

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第117集

烏帽子遺跡Ⅱ

2003

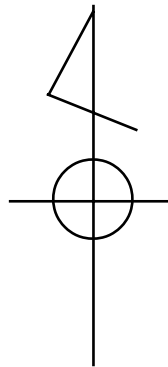
財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター



調査区全景

巻頭カラー 2



調査区周辺の風景



巻頭カラー 3



00B区 SK61 調査状況（ベンガラと玉類出土状況）



出土玉類



巻頭カラー 4

00B区SK61
出土玉類



2032



2003



2012



2021



2004



2013



2022



2005



2014



2023



2006



2015



2024



2007



2016



2025



2008



2017



2026



2009



2018



2027



2010



2019



2028



2011



2020



2029



2030



2031

3036

3037

3038

3039

3040

3041



序

この度、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターは、国道155線建設に伴う事前調査として、愛知県教育委員会から委託を受けて烏帽子遺跡の発掘調査を実施いたしました。

今回の発掘調査は前回の平成5年度につづき2回目となります。調査箇所は前回の調査区に隣接した場所であることから、ほぼ同様の成果が得られるものと考えておりましたが、弥生時代前期の墓やガラス製勾玉の発見という予想外の大きな成果を得ることができました。

本報告書が烏帽子遺跡のみならず、地域の歴史研究や埋蔵文化財の理解に対して役立つことができれば幸いです。

調査にあたり、地元の方々や関係諸機関の御理解と御協力を頂いたことに対して、ここに厚く御礼申し上げます。

平成15年10月

財団法人 愛知県教育サービスセンター
理 事 長 井 上 銀 治

例言

1. 本書は愛知県東海市高横須賀町烏帽子に所在する烏帽子遺跡の第2次発掘調査に関する報告書である。よって書名を『烏帽子遺跡Ⅱ』とする。

第1次発掘調査は1993年11月から1994年2月に実施し、報告書は愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第63集『烏帽子遺跡』として1996年に刊行された。

2. 今次の発掘調査は、国道155号線建設に伴う事前調査として愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが平成12年5月から同9月にかけて実施した。調査面積は2500㎡である。

現地調査は中野良法(調査研究員、現愛知県立大府東高等学校教諭)・木川正夫(調査研究員、現愛知県立岡崎高等学校教諭)、調整を石黒立人(主査)が担当した。

4. 調査にあたっては次の諸機関の御協力を得た。

愛知県教育委員会生涯学習部文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路建設課、愛知県知多建設事務所、東海市教育委員会

5. 整理作業・報告書作成作業は、石黒立人を担当者に平成14年4月から平成15年3月にかけて行った。整理作業・報告書作成作業には次の人々が従事した。

河合明美(調査研究補助員)、鈴木加代子・大塚みゆき(整理補助員)

6. 本書の執筆・編集は自然科学分析を除いて石黒が行った。自然科学分析・報告は(株)パレオ・ラボ(担当:小村美代子・植田弥生・黒澤一男・山形秀樹)に、遺物の写真撮影は福岡栄氏に委託した。

7. 本報告書の作成にあたって次の各氏、機関の御指導・御協力をいただいた。

立松彰、永井伸明、東海市教育委員会

8. 本書の座標は国土座標第Ⅶ系に準拠する。

9. 出土遺物・調査記録は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。



00A区調査風景

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境 -----1	(4) 00C区の遺構と遺物 -----18
(1) 地理的環境 -----1	A. I期の遺構・遺物 18 / B. II期の遺構・遺物 39
(2) 歴史的環境 -----1	C. III期の遺構・遺物 44 / D. V期の遺構・遺物 49
第2章 調査の経過 -----2	第4章 自然科学分析 -----53
(1) 既往の調査 -----2	(1) 烏帽子遺跡の土坑出土ガラス小玉、ガラス製勾玉の成分分析 -----53
(2) 今回の調査 -----2	(2) 烏帽子遺跡の土坑出土赤色物の化学分析 -----55
(3) 調査日誌抄 -----2	(3) 烏帽子遺跡の土坑出土管玉の成分分析 -----57
第3章 遺構と遺物 -----4	(4) 烏帽子遺跡の住居跡等出土炭化材の樹種同定 ---58
(1) 概要 -----4	(5) 烏帽子遺跡出土貝類の同定 -----61
A. 基本層序4 / B. 遺構・遺物 4	(6) 烏帽子遺跡出土貝類の放射性炭素年代測定 -----67
(2) 00A区の遺構と遺物 -----4	(7) 烏帽子遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定 ---68
A. 遺構4 / B. 遺物 4	第5章 結語 -----70
(3) 00B区の遺構と遺物 -----6	
A. I期の遺構・遺物 6 / B. II期の遺構・遺物 7	
C. III期の遺構・遺物 10 / D. IV期の遺構・遺物 17	

挿図目次

第1図 調査区位置図	第18図 00C区出土遺物実測図 (1) I期：縄文晩期～弥生前期
第2図 00A区I期出土遺物実測図	第29図 00C区出土遺物実測図 (2) I期：縄文晩期～弥生前期
第3図 00A区近世加工円盤 (写真)	第20図 00C区出土遺物実測図 (3) I期：縄文晩期～弥生前期
第4図 00B区SK13プラン・セクション	第21図 00C区出土遺物実測図 (4) I期：縄文晩期～弥生前期
第5図 00B区SK13出土土器実測図	第22図 00C区出土遺物実測図 (5) I期：縄文晩期～弥生前期
第6図 00B区SD07遺物出土状況 (写真)	第23図 00C区出土遺物実測図 (6) I期：縄文晩期～弥生前期
第7図 00B区SD07出土土器実測図	第24図 00C区出土遺物実測図 (7) I期：縄文晩期～弥生中期前葉
第8図 00B区出土遺物実測図 (1) I期：縄文晩期～弥生	第25図 00C区出土遺物実測図 (8) I期：弥生中期前葉
第9図 00B区SK61プラン・土層セクション・出土遺物実測図	第26図 00C区出土遺物実測図 (9) I期：弥生中期前葉・中葉
第10図 00B区出土遺物実測図 (2) III期：古代	第27図 00C区出土遺物実測図 (10) I期：弥生中期後葉
第11図 00B区出土遺物実測図 (3) III期：古代	第28図 00C区出土遺物実測図 (11) I期：弥生中期後葉
第12図 00B区出土遺物実測図 (4) III期：古代	第29図 00C区出土遺物実測図 (12) I期：弥生中期後葉
第13図 00B区出土遺物実測図 (5) III期：古代	第30図 00C区出土遺物実測図 (13) I期：弥生中期後葉
第14図 00B区出土遺物実測図 (6) III期：古代	第31図 00C区出土遺物実測図 (14) I期：弥生中期後葉
第15図 00B区出土遺物実測図 (7) III期：古代製塩土器・土製品	第32図 00C区出土遺物実測図 (15) I期：弥生中期後葉
第16図 00B区出土遺物実測図 (8) IV期：中世	第33図 00C区出土遺物実測図 (16) I期：弥生中期後葉
第17図 00B区SD01 (写真)	第34図 00C区出土遺物実測図 (17) I期：弥生中期後葉
	第35図 00C区出土遺物実測図 (18) I期：弥生中期後葉

- 第36図 00C区出土遺物実測図(19)Ⅰ期：弥生中期後葉
- 第37図 00C区出土遺物実測図(20)Ⅰ期：弥生中期後葉
- 第38図 00C区出土遺物実測図(21)Ⅰ期：石器
- 第39図 00C区出土遺物Ⅰ期：石器(写真)
- 第40図 00C区出土遺物実測図(22)Ⅱ期：弥生後期終末
- 第41図 00C区出土遺物実測図(23)Ⅰ期～Ⅱ期：弥生後期～古墳前期
- 第42図 00C区SB04検出状況(写真)
- 第43図 00C区SK98貝層の広がり(写真)
- 第44図 00C区出土遺物実測図(24)Ⅲ期：古代
- 第45図 00C区出土遺物実測図(25)Ⅲ期：古代
- 第46図 00C区出土遺物実測図(26)Ⅲ期：古代
- 第47図 00C区出土遺物実測図(27)Ⅲ期：古代製塩土器・土製品
- 第48図 00C区SD02の貼粘土(写真)
- 第49図 00C区SD02土層セクション図
- 第50図 近世陶磁器・土器類実測図
- 第51図 00C区SD01出土窯関係資料(写真)
- 第52図 その他の遺物
- 第53図 00C区SD02出土窯関係資料(写真)
- 第54図 赤色物の蛍光X線スペクトル図
- 第55図 赤色物のX線回折スペクトル図
- 第56図 烏帽子遺跡出土炭化材の顕微鏡写真
- 第57図 巻貝類(写真)
- 第58図 二枚貝類(1)(写真)
- 第59図 二枚貝類(2)(写真)

表目次

- 第1表 調査工程
- 第2表 ガラス製勾玉・小玉の化学組成(%単位)
- 第3表 赤色物から検出された元素
- 第4表 赤色物から検出された鉱物
- 第5表 管玉の化学組成(%単位)
- 第6表 烏帽子遺跡出土炭化材の樹種同定結果
- 第7表 出土貝類種名表
- 第8表 貝類の出土量
- 第9表 貝殻の放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果
- 第10表 炭化物の放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

図版目次

巻頭カラー

- 1 調査区全景
- 2 調査区周辺の風景
- 3 00B区SK61調査状況
- 4 00B区SK61出土玉類

遺構測量

- 図版1 遺構全体図(1/1000)
- 図版2 調査区西半分プラン(1/500)
- 図版3 調査区東半分プラン(1/500)
- 図版4 00A区第1面プラン(1/200)
- 図版5 00A区第2面プラン(1/200)
- 図版6 00A区第3面プラン(1/200)
- 図版7 00A区土層セクション南壁 SK09・15 SX04・07(1/00、1/50)
- 図版8 00B区第1面プラン(1/200)
- 図版9 00B区第2面プラン(1/200)
- 図版10 00B区第3面プラン(1/200)
- 図版11 00B区土層セクション1東壁 SB01・02(1/100、1/50)
- 図版12 00B区土層セクション2 SD01 SX01 SK04・09・11・14・16・17(1/50)
- 図版13 00B区土層セクション3 SK22・23・26・27・28 SD13・17(1/50)
- 図版14 00B区土層セクション4 SK31・32・34・35・36・88・89(1/50)
- 図版15 00C区第1面プラン(1/200)
- 図版16 00C区第2面プラン(1/200)
- 図版17 00C区第3面プラン(1/200)
- 図版18 00C区土層セクション1東壁 SB01・02 SD03(1/100、1/50)
- 図版19 00C区土層セクション2 SB03・04・05(1/50)
- 図版20 00C区土層セクション3 SK14・15・32・45・48(1/50)
- 図版21 00C区土層セクション4 SK51・54・97・98・102(1/50)
- 図版22 00C区土層セクション5 SK103・105・106・130・131(1/50)
- 図版23 00C区土層セクション6 SK137～140・208・209(1/50)

遺構写真

- 図版24 調査区全景
- 図版25 00A区第1面全景・第3面近景
- 図版26 00B区第1面全景・SD01完掘状況・土層セクション
- 図版27 00B区第3面全景・第3面東部近景
- 図版28 00B区SK13・SD07遺物出土状況
- 図版29 00B区SK61調査状況・SB01完掘状況
- 図版30 00B区SK32・34・36遺物出土状況
- 図版31 00C区第1面西部近景・SD02完掘状況
- 図版32 00C区第2面調査区西部近景
- 図版33 SK14・130・131遺物出土状況
- 図版34 SK208貝層検出状況・移動式竈出土状況

遺物写真

- 図版35 00B区弥生土器
- 図版36 00C区弥生土器
- 図版37 00B区・00C区須恵器
- 図版38 00C区須恵器・土師器
- 図版39 00B区SK13出土水神平式壺内蔵下呂石(1)
- 図版40 00B区SK13出土水神平式壺内蔵下呂石(2)

第1章 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

東海市は、名古屋台地の南端に位置する名古屋市・笠寺台地と天白川河口部を挟んで対面し、猿投山南麓・知多半島に連なる丘陵、開析谷の低地、海岸平野など変化に富んだ地形が広がる。南からみれば知多半島の西岸北端に相当する位置にあり、北は名古屋市緑区、南は知多市、東は大府市に接する。東海市西部の海岸線は、近世以降の干拓や埋め立て地、臨海工業地帯の形成によって順次西へ遠退き、現在では高台から望むことも難しいけれども、大田川駅より北の名鉄常滑線は近世以前の海岸線にほぼ沿って走っており、かろうじて往時の様子を窺い知ることができる。

名鉄新名古屋駅で常滑線の電車に乗り、名古屋市南部の市街地を通過して天白川を越えると東海市である。東海市に入ると車窓の眺めは、右方が近くに耕作地、遠くに林立する煙突を伴う工場群となり、左方は丘陵斜面が間近に続く。左方の丘陵が途切れて視界が開けると、その辺りに製塩遺跡として著名な松崎遺跡がある。丘陵が左の方に離れていくとともに電車は速度を落とし、大田川駅に停車する。大田川駅を過ぎると線路は高架となり、電車は大田川町・横須賀町・高横須賀町などの町並みを眼下に南下し、知多市に入ると再び左側の車窓に丘陵がせまる。

この丘陵が開けた一帯には砂堆が並列し、もっとも海側が烏帽子遺跡の立地する第3砂堆である。烏帽子遺跡は大田川駅と尾張横須賀駅のほぼ中間辺りにあって、第3砂堆の東寄りに位置している。

第3砂堆には大田川町・横須賀町・高横須賀町など古くからの町並みが広がり、その東は水田が営まれる低地になっている。低地の周囲は襷状に丘陵と谷が繰り返して入り組んでいる。縄文時代中期の海進期にはリアス式海岸を形成していたかもしれない。その後、海岸線の前進・後退が繰り返されるなかで第1・第2の砂堆が形成され、最後に第3砂堆が残されることになったのであろう。第3砂堆が形成された初期には、東側の低地は潟湖になっていた可能性が高い。

(2) 歴史的環境

烏帽子遺跡が立地する第3砂堆上には、これまでのところ縄文時代晩期前半以前の遺跡は知られていない。砂堆の形成時期とも関わるが、弥生時代前期の小海退期までは十分な高さがなかったからかもしれない。

弥生時代前期の遺跡には知多市荒古遺跡・細見遺跡が知られている。両遺跡とも遺跡の内容についてはよくわからない。内陸よりの砂堆に立地する野崎遺跡では条痕紋系土器が出土している。

弥生時代中期になると獅子懸遺跡・法海寺遺跡などその後継する遺跡が増える。

弥生時代後期には東海市中ノ池遺跡、知多市大廻間遺跡のように丘陵上に営まれる例が出現し、いわゆる「高地性集落」に関係づける考え方もある。同様の傾向は弥生時代終末から古墳時代前期にも認められるが、今回烏帽子遺跡で同時期の資料が出土したので、低地立地・高所立地が同時期に並存していることがあきらかになった。

古墳時代には塚森遺跡など伊勢湾地方における最初期の土器製塩遺跡が出現する。その後土器製塩は松崎遺跡や烏帽子遺跡にひろまり、古代の7世紀から8世紀にかけて盛行する。興味深いのは松崎遺跡や烏帽子遺跡では、弥生時代ではなく古代に貝層形成がみられることで、海浜部の遺跡としての特質を示しているとしても、その時期的な差が環境差によるのかどうか気になるところである。

中世以降は調査例も少ないが、今回00B区において遺構・遺物が検出されたことから、散漫ながら存在していた可能性は高いと考えられる。

江戸時代は尾張藩横須賀御殿の時代である。「臨江亭」「御洲濱」という邸宅群や庭園からなる広大な建造物であり、今後の地道な調査が望まれる。

第2章 調査の経過

(1) 既往の調査

烏帽子遺跡は愛知県遺跡分布地図に登録された周知の遺跡（地図番号 43062）である。

第1次調査は、平成5年11月から翌平成6年2月にかけて、国道155線建設に伴う事前調査として当センターが実施した。調査面積は2040㎡である。それまで散布地として知られていたのみであった烏帽子遺跡は発掘調査の結果、縄文時代晩期から江戸時代にかけての遺構・遺物が出土し、長期にわたる複合遺跡であることが明らかになった。とりわけ注目されたのは、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての資料群中に製塩土器に類似する資料が一定量含まれていたこと、江戸時代の横須賀御殿の御庭焼窯（「横須賀御殿窯」と命名）の存在が確認されたことである。ただ、遺構に関しては基盤が砂層であるため脆弱で、その検出と掘削に際して十分な保護が必要であり、それは今回も同様であった。したがって遺構の属性把握について厳密には不備があったことは否めない。

(2) 今回の調査（図版1）

調査面積は2500㎡である。調査区は市道や生活道路によって00A区、00B区、00C区の都合3つに分かれる。西端の00C区は前回の93A区・93B区に隣接している。00A区は基本的には東へ傾斜する地形であり、おそらく第3砂堆の東端に位置するのであろうが、00B区との間に浅い谷地形が存在することから、砂堆上面には起伏があった可能性が高い。00B区では上部に各時期の遺物を含む砂層が堆積し、洪水層であると認定した。前回調査で風成とされた砂層（93B区褐色砂）との対応は判然としない。遺構・遺物はその下部から検出した。00C区は前回調査の所見から濃密な成果が予想され、実際そのようになった。とくに近世のSD01から派生するSD02を検出したことは「横須賀御殿」に一步近づいたという印象を与えた。

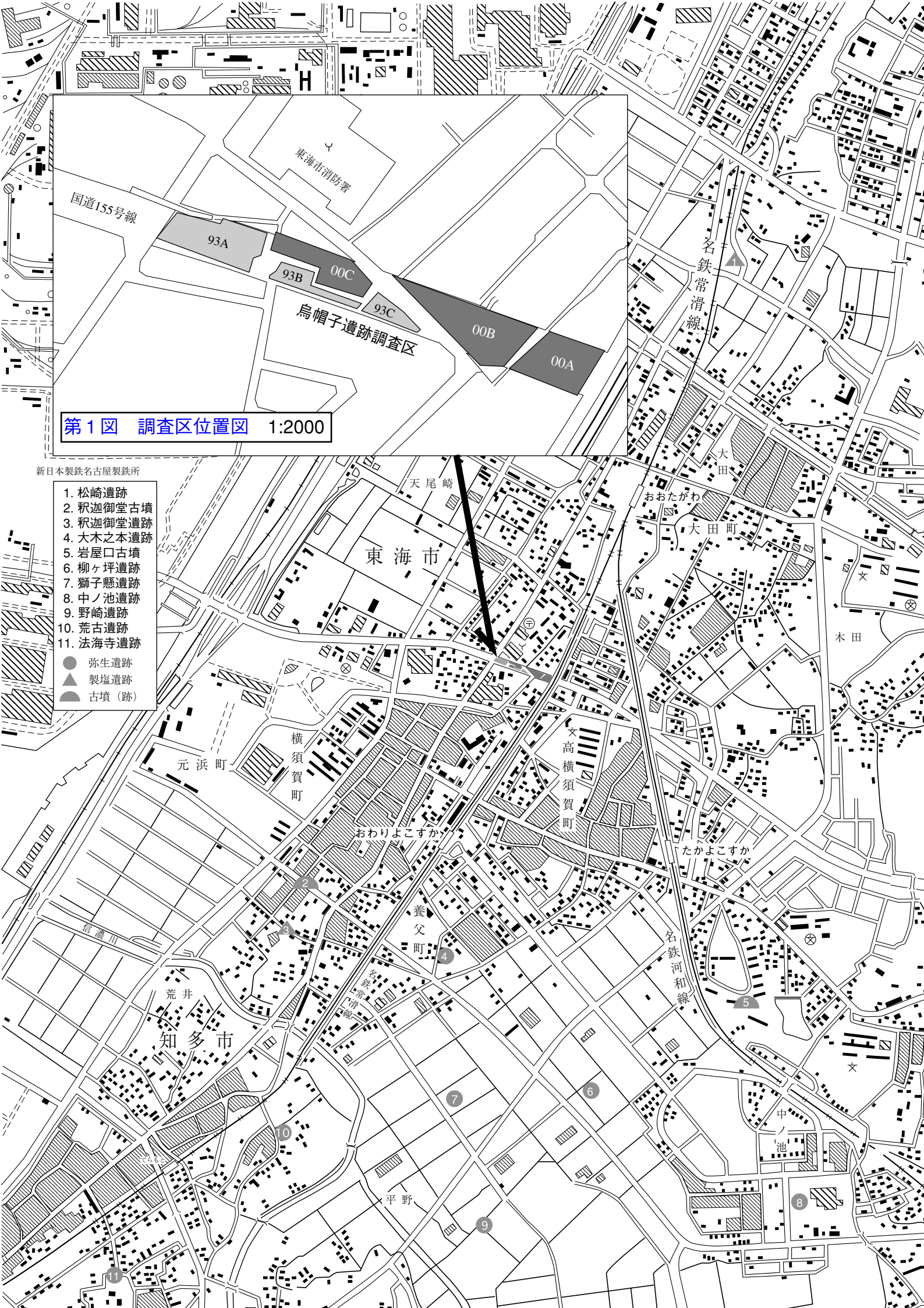
(3) 調査日誌抄

- 4/13 00A区表土剥ぎ開始。調査区東端に貝層が分布。
- 4/17 作業員作業開始。遺構検出。
- 4/25 SD01掘削。

- 4/28 SX01掘削。
- 5/8 SK15掘削。炭化物層検出。竪穴建物跡か？
- 5/9 第3面全景撮影。
- 5/10 00A区調査終了。
- 5/11 00B区表土剥ぎ開始。
- 5/15 第1面遺構検出。
- 5/18 調査区西部でSD01検出。粘土帯を確認。溝斜面を整えるために貼り込まれたものか？調査区東部を全体に掘り下げる。近世遺物を含む礫混じりの粗砂層が上部を覆っている。洪水による堆積の可能性が高い。
- 5/25 SD01掘削。
- 5/30 SD01掘削完了。
- 6/2 古代遺構群の検出。
- 6/5 古代遺構の掘削開始。
- 6/6 SK13掘削。水神平式の壺と下呂石が多数姿を見せる。
- 6/13 第1面掘削完了。全景撮影およびラジコン・ヘリによる写真測量。
- 6/14 第2面調査開始。
- 6/15 SB01・SB02掘削。SB01はカマド粘土、貼床粘土が残存。
- 6/16 古代遺構群掘削。
- 6/19 第3面調査開始。
- 6/22 SD07から弥生土器の鉢（底部穿孔）が伏せた状態で出土。
- 6/30 SK34・SK36から炭化物層検出。炭化物層中から炭化米出土。竪穴建物跡か？
- 7/4 SK61掘削。赤色砂上からガラス製勾玉・管玉出土。
- 7/5 00B区全景撮影。ラジコン・ヘリ写真測量。
- 7/7 00B区調査終了。
- 7/11 00C区表土剥ぎ開始。
- 7/18 遺構検出開始。SD01掘削。窯関係遺物が多量に出土。窯壁やレンガも含まれている。
- 7/24 SD02掘削。
- 8/3 SD01・SD02撮影。
- 8/4 第2面調査開始。
- 8/11 第2面以降掘削完了。
- 8/18 全景撮影。ラジコン・ヘリによる写真測量。
- 8/21 第3面調査開始。黒褐色の包含層が厚い。
- 9/3 現地説明会開催。
- 9/4 遺構掘削継続。
- 9/18 全景撮影。ラジコン・ヘリによる写真測量。
- 9/19 最終確認調査開始。SK208から貝層出土。サンプル採取。
- 9/26 最終面全景撮影。調査終了。
- 9/27 事務所撤去。

第1表 調査工程

項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月
表土除去						
遺構検出	A区1面 	2・3面 	B区1面 	2面 	3面 	C区1面
遺構掘削						
写真・測量	●	●	●	●	●	●●
埋戻・撤去						



第1図 調査区位置図 1:2000

新日本製鉄名古屋製鉄所

1. 松崎遺跡
2. 积迦御堂古墳
3. 积迦御堂遺跡
4. 大木之本遺跡
5. 岩屋口古墳
6. 柳ヶ坪遺跡
7. 獅子懸遺跡
8. 中ノ池遺跡
9. 野崎遺跡
10. 荒古遺跡
11. 法海寺遺跡

- 弥生遺跡
- ▲ 製塩遺跡
- ◐ 古墳(跡)

第3章 遺構と遺物

(1) 概要

A. 基本層序

各調査区の土層断面は図版7・図版11・図版18に示した。

基盤層は灰白色粗砂で、上部に暗褐色系の砂層が包含層として堆積していた。包含層からは弥生から古代にかけての遺物が混在して多量に出土し、時期による違いは見出せなかった。包含層上部は褐色系砂で覆われており、00B区東部についてそれを洪水層と認定した。市道がかつて水路であったことは調査でも確認でき、それとの関連が考えられた。

B. 遺構・遺物

基盤層が砂層のために遺構の保護には苦勞した。また住居跡の認定に関して、弥生時代では炉跡や柱穴、古代ではカマドの有無を指標に認定した。そのため、方形プランでも要件を欠くものは「SK」と表記した。

ところで、弥生中期後葉の遺物は古代の遺物といっしょに出土する例もままあったが、ある程度復元できるものを含む遺構については弥生時代と認定した。遺構は古代に属するものが最も多く、烏帽子遺跡の中心をなす。重複が激しい地点では遺構輪郭の認定に不安材料を残す。なお、図版では各調査区の遺構プランが第1面から第3面まで区分されているが、各面は当時の生活面ではなく、調査の進行上任意に設定した作業面である。遺物の出土状態図のように上下の遺構が重なって複雑になるのを避けるために設けたものであり、したがって同一面で異なる時期の遺構が共存することになる。

遺物は、縄文晩期から弥生前期にかけての一群があらゆる遺構から出土し、しかも断片が多いので原位置にはないと判断した。前回調査では当該期の遺構が報告されているが、今回認定するには至らなかった。弥生中期後葉に関しては大形の破片が多く、比較的出土量もまとまっており、前回調査を追認した。古代は製塩土器がまとまって出土することは無く、近傍で土器

製塩が行われた可能性を窺うにとどまった。

(2) 00A 区の遺構と遺物

A. 遺構

SD01 (第1面: 図版4・25)

江戸時代から現代までの畠の区画溝。山茶碗の小片が出土した。

SX01 (第1面: 図版4・25)

幅3m、深さ約1mで溝状を呈する。江戸時代に属す。第3面で調査した底面には土坑が並び、侵食を繰り返した流路の底面といった印象をもった。

SX02 (第2面: 図版5)

これも流路の痕跡のような落ち込み。

SX03 (第2面: 図版5)

不定形な落ち込みで、流路の可能性はある。

SX04・SX07 (第3面: 図版6・25)

調査区西部の基盤面で検出した浅い落ち込み。西に下降して黒褐色砂が堆積していた。遺物は壺(1)が出土した。時期は縄文時代晩期から弥生時代前期まで遡る可能性がある。自然地形の埋没面であろう。

SK15 (第3面: 図版6・25)

SX04掘削後に検出した炭化物の広がり遺構と認定した。住居跡の可能性も考えられるが確証はない。

SE01 (第3面: 図版6・25)

長径2.8m、短径1.8mの土坑。湧水層まで達するので井戸と認定した。

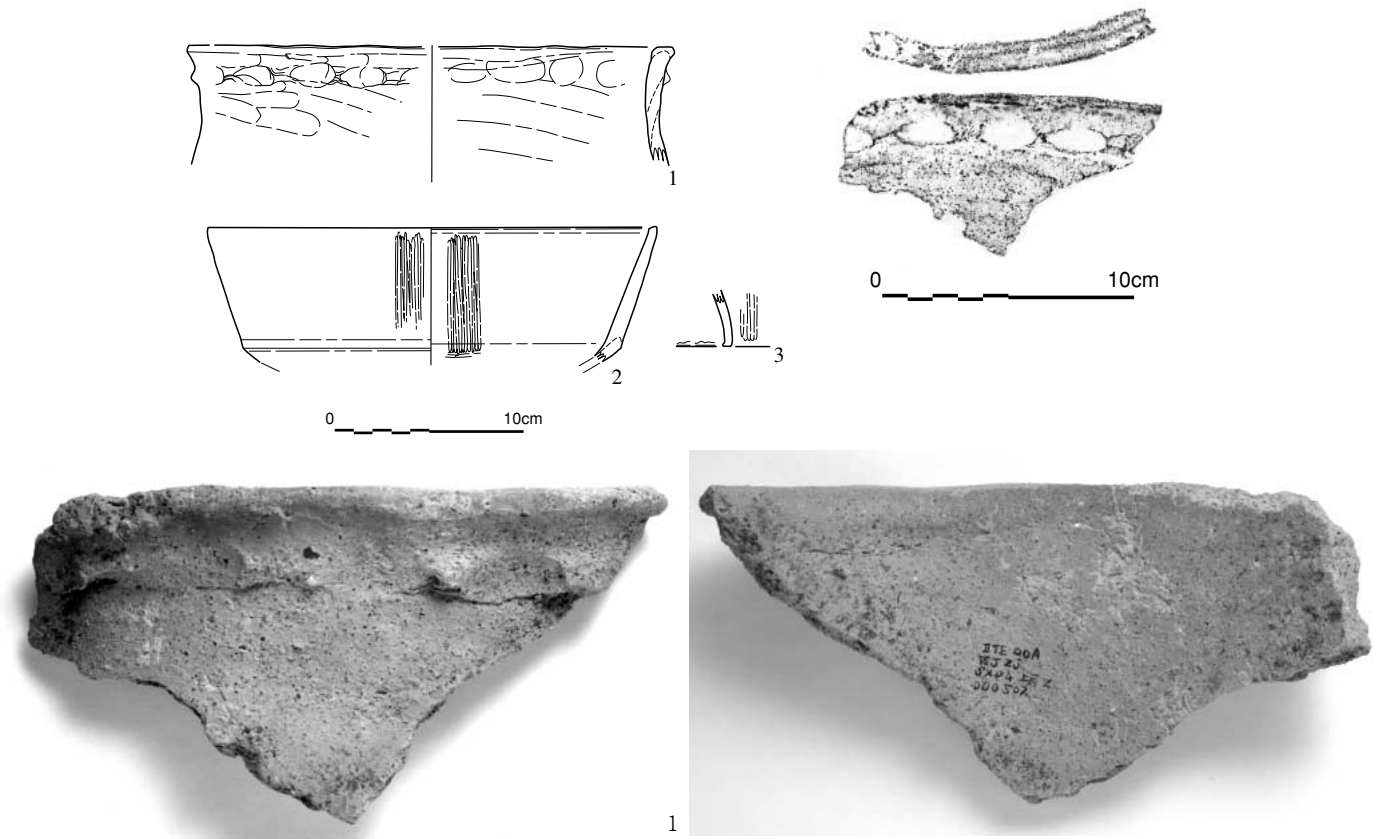
B. 遺物

出土した遺物は断片的であった。

第2図1は突帯紋系の壺。口縁部上端には面をもち、外側に小さく突き出す。口縁端部からやや下がった位置に貼付突帯がめぐる。突帯は指で楕円形状に押圧される。頸部内外面はナデ仕上げである。ナデ仕上げの深鉢と組み合わせるのであろう。

2・3は弥生後期終末期の高杯。2はやや直線的のびる杯部で、口縁部端面には浅い条線が認められる。廻

第2図 00A区I期出土遺物実測図

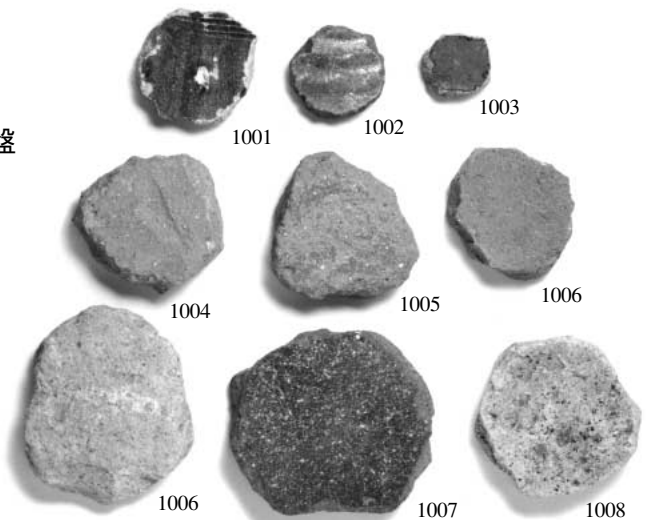


間I式前半に併行する。

第50図 532は磁器の皿、533は磁器製の灯明皿。534は播鉢。535はホウロクの内耳片である。

第3図1001～1009は江戸時代の陶器片を利用した加工円盤である。微高地東端に位置する00A区の性格を示していよう。

第3図 00A区近世加工円盤



(3) 00B 区の遺構と遺物

A. I 期の遺構・遺物

SK13 (第4図/第2面: 図版9・26)

西北西—東南東に軸線をもつ舟形の土坑で、検出段階には長軸 1.95 m、短軸 0.75 m であった。しかし、基盤が砂であるために変形した可能性もある。

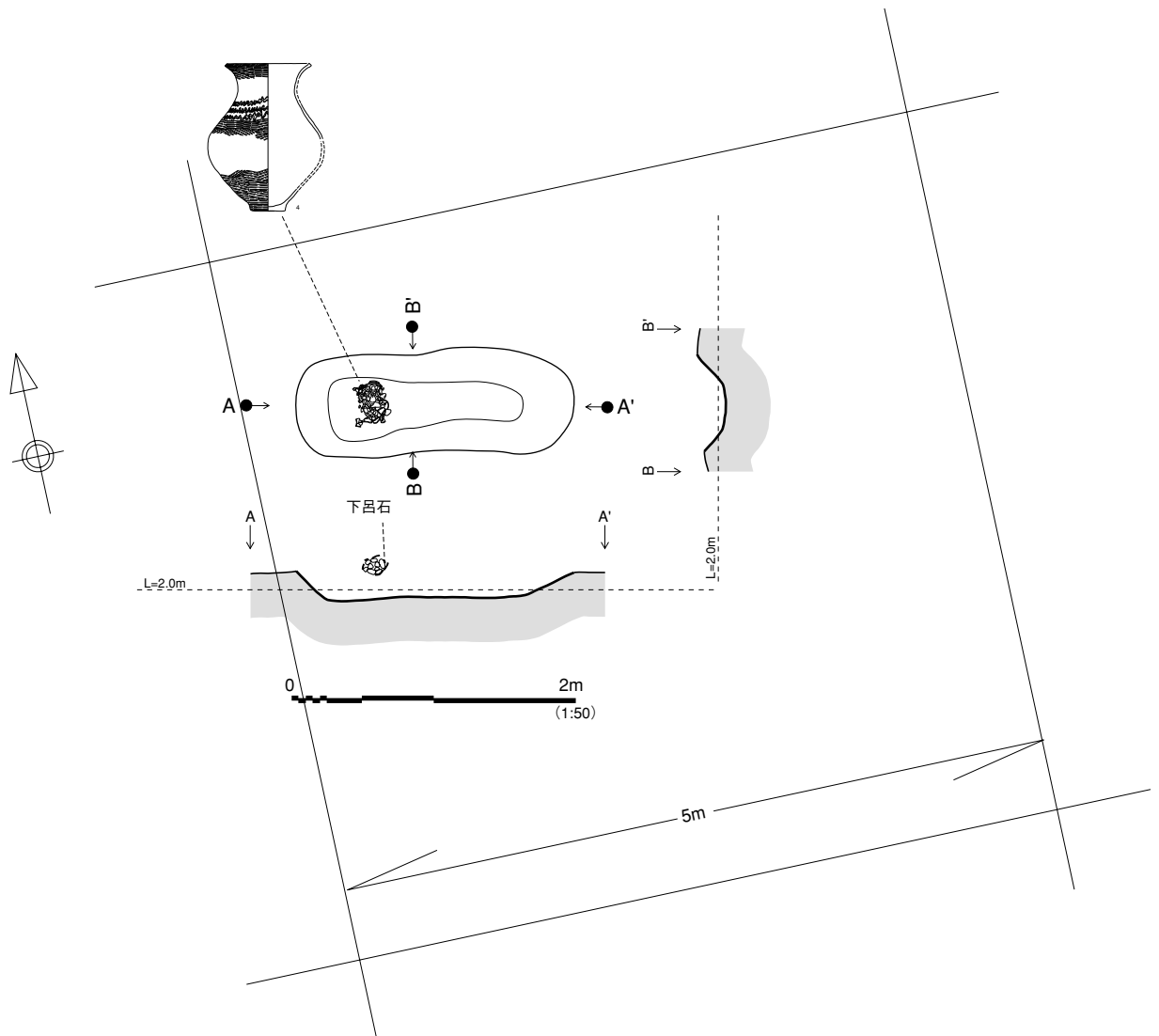
土坑の西部で水神平式の壺 (4) が底面から 15cm ほど浮いて出土した。口縁部を上にし、少し斜めに傾斜した状態で出土した。器体は風化し断片化していたが、内部には下呂石の円礫 34 個と安山岩の円礫 1 個が詰まっていた。いずれも未使用で、サイズからみて木曾

川水系下流域産であろう。壺の胎土は雲母が目立たないことから、少なくとも矢作川流域産でないことは確実である。下呂石が壺に詰められた状態で運ばれたのか、下呂石のみ運ばれたのか、どちらであろうか。

壺が底面から浮いて出土したことは、土坑内部に埋められていなかったことを示している。これが墓坑であったとすれば、墓坑を埋め戻したあと盛土の上部に据え置かれた可能性が高いことを示している。風化が著しいのも地表面に露出していたことを窺わせる。

壺は二枚貝による条痕紋で仕上げられている。口縁部の端面から外面には横位の条痕、頸部には波状紋が 3 帯、肩部には横位の断続する条痕、体部は縦位

第4図 00B 区 SK13 プラン・セクション



の羽状条痕である。口縁部外面に突帯はめぐらないが、口縁端部の条痕も含めて尾張南部から知多半島にかけての地域的な特徴である可能性が高い。

SD07（第6図／第3面：図版10・25）

軸線が北北西－東南東を向く舟形土坑である。長軸2.2m、短軸0.7mである。土坑の南寄り底部穿孔の鉢（第7図5）が伏せられた状態で出土した。土坑墓であろう。

鉢は口縁部の屈曲が強く、内外面ともナデ仕上げされており、矢作川下流域在来の土器である。

その他の遺物（第8図）

縄文晩期後半～弥生前期

15は口縁部に半截管状工具による刺突が施され、体部には粘土紐の接合痕を残す。稲荷山式の深鉢であろう。16～27は縄文晩期末から弥生前期にかけての二枚貝条痕深鉢およびナデ深鉢である。28は4と同様に口

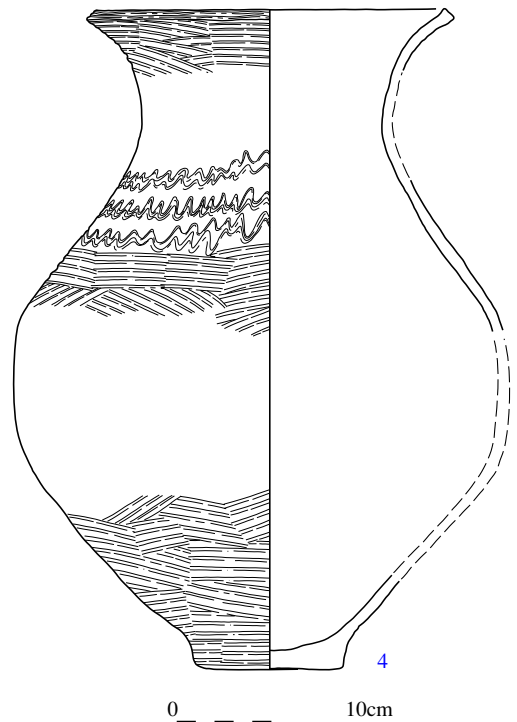
第6図 00B区SD07遺物出土状況



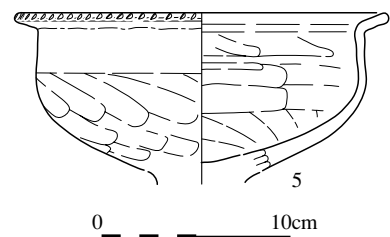
縁部に押し引きではなく条痕を施す水神平式壺である。

弥生中期

6～14は弥生中期後葉の土器群である。10・11・13は濃尾平野の貝田町式系（I系）に共通する。ただ11の体部内面にはミガキ調整が施され、また体部外面のハケメもかっちりしており、在地的ではない印象を受ける。頸部のゆるい屈曲などは伊勢地方との関係も窺わ



第5図 SK13出土土器実測図



第7図 SD07出土土器実測図

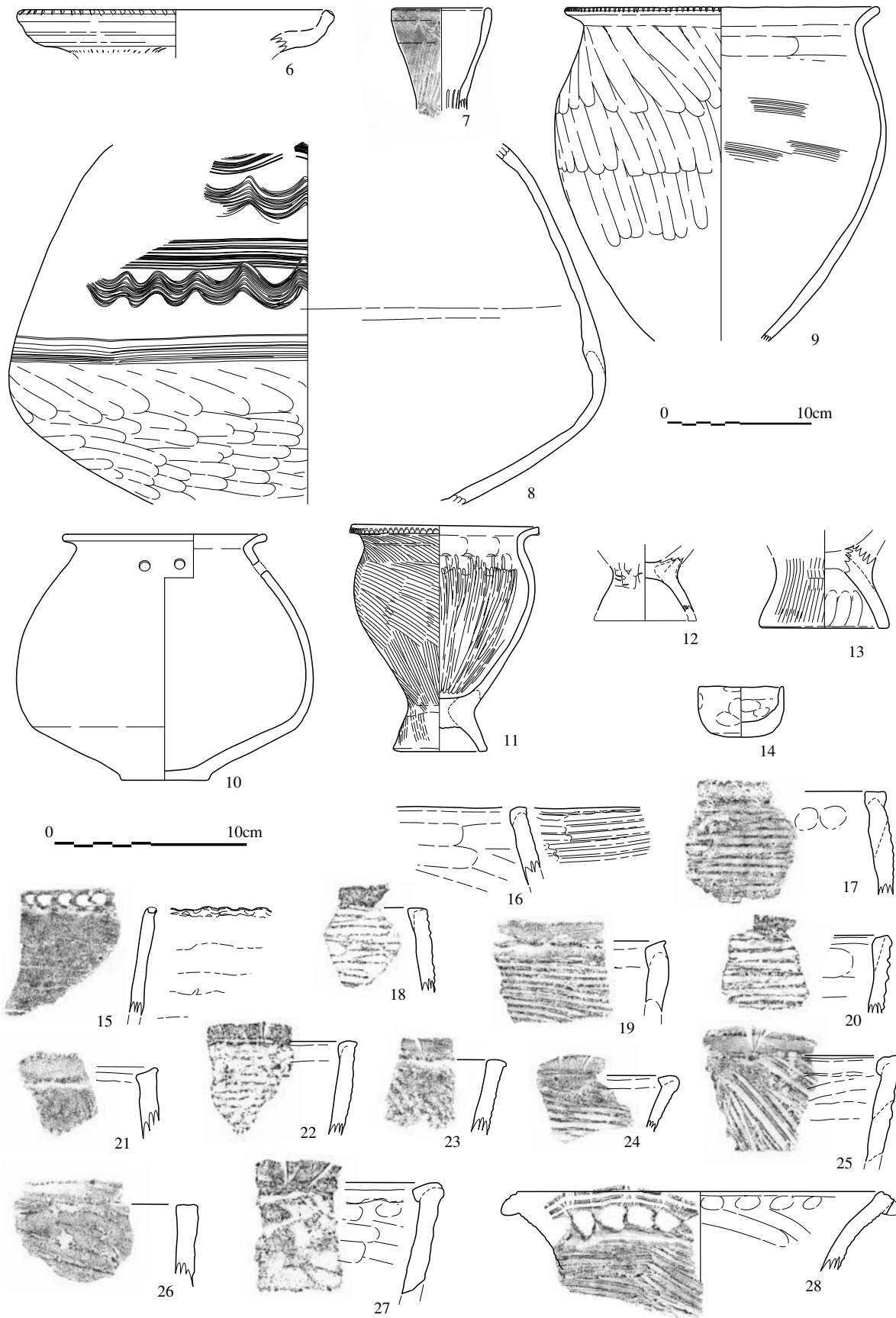
せており、対岸相互の緊密な関係を示しているであろう。上記以外はⅢ系である。矢作川下流域産であろう。

B. II期の遺構・遺物

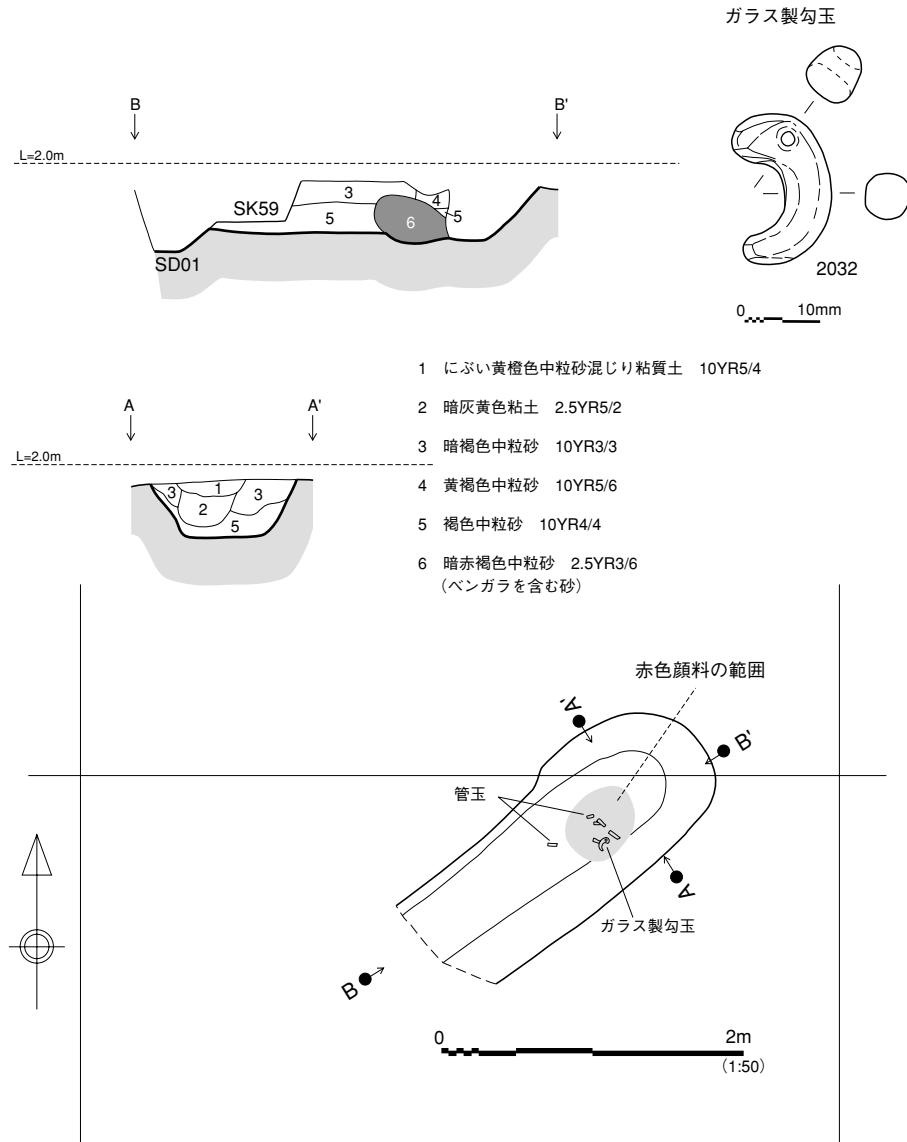
SK61（第9図／第3面：図版10・25）

軸線が北東－南西を向く舟形の土坑で、南西端

第8図 00B区出土遺物実測図(1) I期: 縄文晩期~弥生



第9図 00B区SK61プラン・セクション・出土遺物実測図



は調査区外となる。

土坑の北寄りには赤色砂が立体的に堆積し、内部と周囲からコバルトブルーのガラス製勾玉1点、緑色凝灰岩製管玉6点、コバルトブルー・スカイブルー・ライトグリーンガラス小玉28点+3点?が出土した。ガラス製勾玉は伊勢湾地方では初出であり注目される。

赤色砂の赤色成分についてはベンガラという分析結果がでていいる。赤色砂の断面は楕円形であり、上部から流入した状況ではない。もともとベンガラの塊が埋められていたか、墓坑とすれば遺体の頭部に塗布され

ていた可能性が高い。しかし、人骨の遺存は全く認められなかった。

年代については遺物が伴わず判断が難しい。7世紀以降00B区は集落域であり、それ以前は断続的に墓域であったとすれば、下限は古式の須恵器の時期である5世紀後半辺りにおくことができよう。そしてガラス製勾玉・小玉が蛍光X線分析によればいずれもソーダ石灰ガラスであること、緑色系ガラスが含まれていることから、5世紀を前後する時期をあてることができようか。

C. III期の遺構・遺物

a. 遺構

SB01 (第1面・第2面: 図版9・10)

北東辺にカマド状の突出部をもつことから竪穴建物跡と認定した。カマド状の突出部には粘土が遺存し、また床面にも粘土が散布していた。貼床といえるほどの完全な面を造るわけではないが、土間式建物の可能性が高いと考えた。

ただ遺構面の上部はすでに削平され、仮に建物であった場合、平地式の可能性がなかったのかどうか、残念ながら判断するすべはない。

SB02 (第1面・第2面: 図版9・10)

カマドはなかったが、粘土・焼土を検出したことから建物跡と認定した。また床面直上とおぼしきレベルから、破片ではあるが遺物がまとまって出土した。

SK15 (第2面: 図版9・26)

SK16と重複している。内部にはかなり腐食が進んだ貝層が認められた。

SK17 (第2面: 図版9・26)

粘土と焼土が出土した。粘土は貼床の痕跡のようであり、土間式建物であった可能性が高いと考えた。

SK34 (第3面: 図版10・27)

プランは方形で竪穴建物跡の可能性を窺わせる。埋土からは炭化物層が出土した。SK36と同様である。

SK36 (第3面: 図版10・27)

SK34と同じく炭化物層が出土した。炭化物には塊状に固着した炭化米が含まれていた。収納されていた米が焼失して散乱したのだとすれば、建物は倉庫様のものであったろうか。

いずれにしても遺構の重複が激しい区域であり、基盤層が砂ということもあって、切り合いの輪郭は不確実さを残す。

b. 遺物

SB01 (第10図)

遺物は少ない。杯H蓋(29)・広口壺(31)が出土した。30は壺蓋か? 31はSB02の34と共通する。

SB02 (第10図)

高杯(32・33)は透孔が欠落している。甕(35~39)は矢作川流域の特徴をもつ。39は長胴化し、長い口縁部をもつ。7世紀後半~8世紀前半か?

SK04 (第11図)

杯H蓋(49)・高杯(50・51)・広口壺(52)・須恵器甕把手(54)・伊勢型甕(55)がある。50は透孔が欠落している。55は口縁部が強く横ナデされて上端がつまみ出されている。7世紀後半。

SK15 (第11図)

無蓋高杯(57)・杯B(58)・鉢(59)伊勢系把手付釜(60)が出土している。60の把手は挿入式で内面は凹んでいる。7世紀後半から8世紀前葉か。

SK16 (第12図)

7世紀後半のまとまった資料である。杯H蓋(61・62)・無蓋高杯(63・64)・脚付椀(65・66)・鉢F(67)・甕(68・69)・須恵甕(70)がある。

SK32 (第12図)

杯H(71)・高杯(72・73)・鉢(75・76)・壺(77)・甕(78)・伊勢系把手付釜(79)がある。

7世紀代だが、74のように5世紀代の杯も出土している。80は土師器である。

SK88 (第13図)

もっとも多量に遺物が出土した。杯H蓋(83)・杯H(84~87)・無蓋高杯(88~95)・脚付椀(96)・短頸壺(97)・長頸壺(98)・甕(99)・広口壺(100~102)・鍋(103)・甕(104)、土師器長胴甕(106)などがある。7世紀後半に属す。1011は知多式1類の製塩土器である。105も把手付鉢で、5世紀代の古手である。SK32の74と同様に混入であろう。

その他

第14図 108は移動式カマドで、断片化してSK88や江戸時代のSD01などいくつかの遺構から分散して出土した。大型品である。焚き口の周りに突帯をめぐらし、肩に牛角状の突起をもつ。突起は一体に作り付けられて、中空になっている。釜を置く穴は推定径25cm前後である。

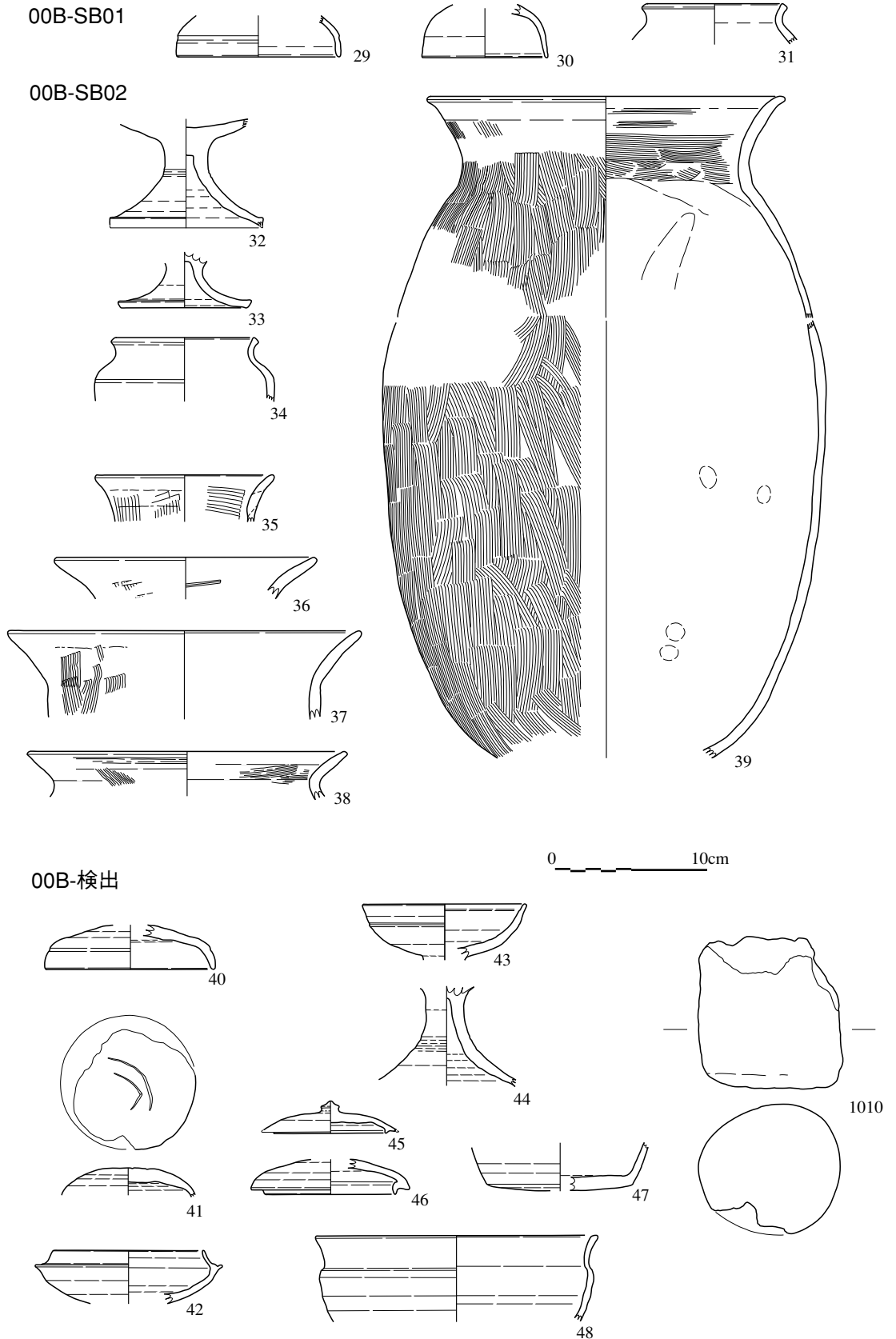
土製品 (第15図)

遺構に伴う資料のみを図化した。SB01の1012、SK32の1025が知多式4類である以外は知多式3類で、らせん状の指整形痕を顕著に残している。

金属器 (第14図)

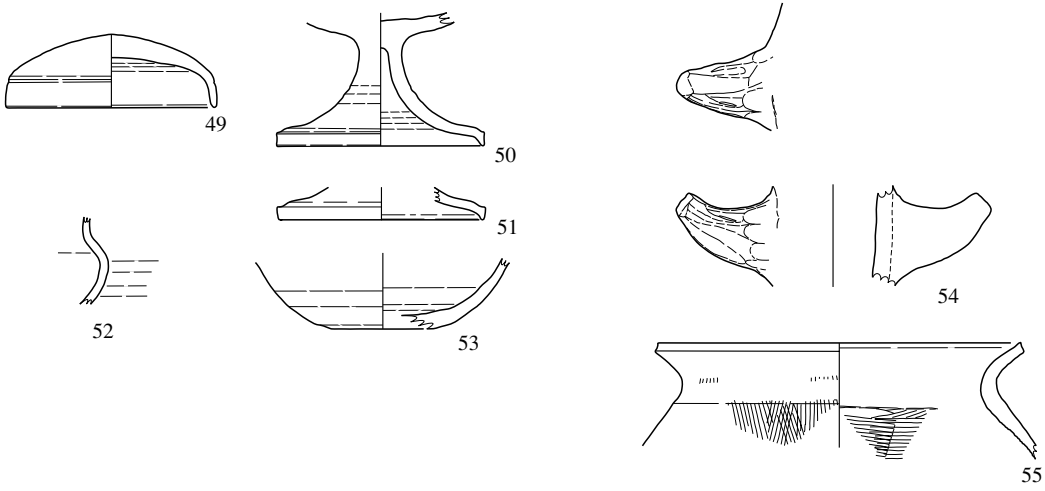
銹化の進んだものが多かった。そのうち、SK88から出土した2点を掲載した。2001は鉄鏃状で左側が頭部である。茎は断面方形を呈する。2002は刀子片である。

第10図 00B区出土遺物実測図(2) III期: 古代

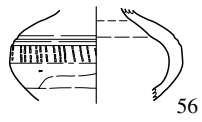


第11图 00B区出土遺物実測図(3) III期:古代

00B-SK04

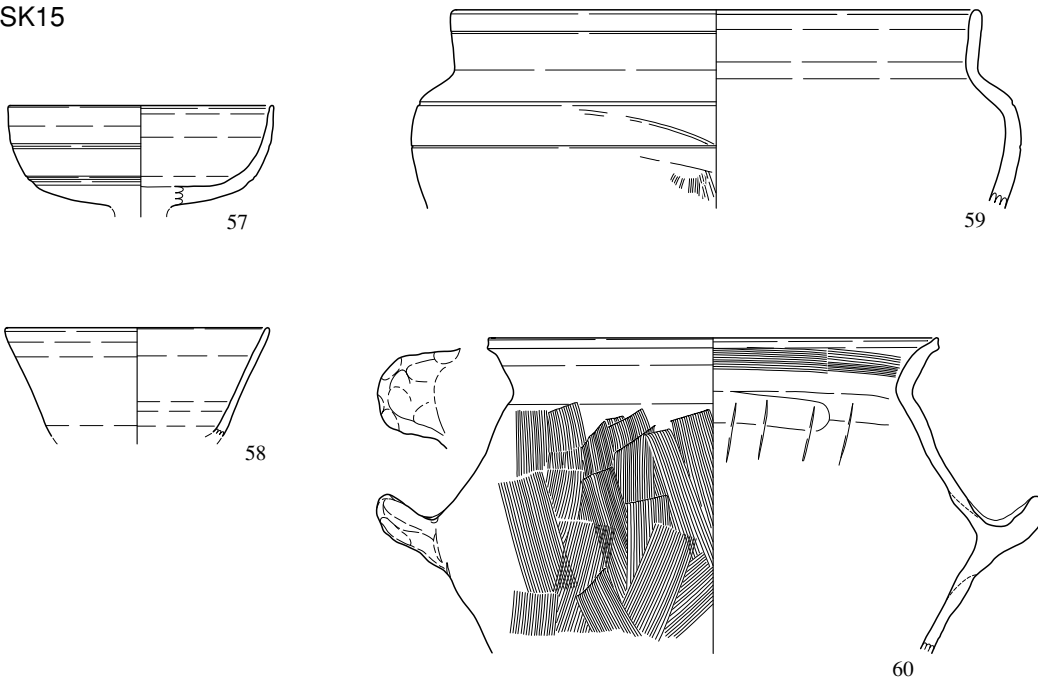


00B-SK14



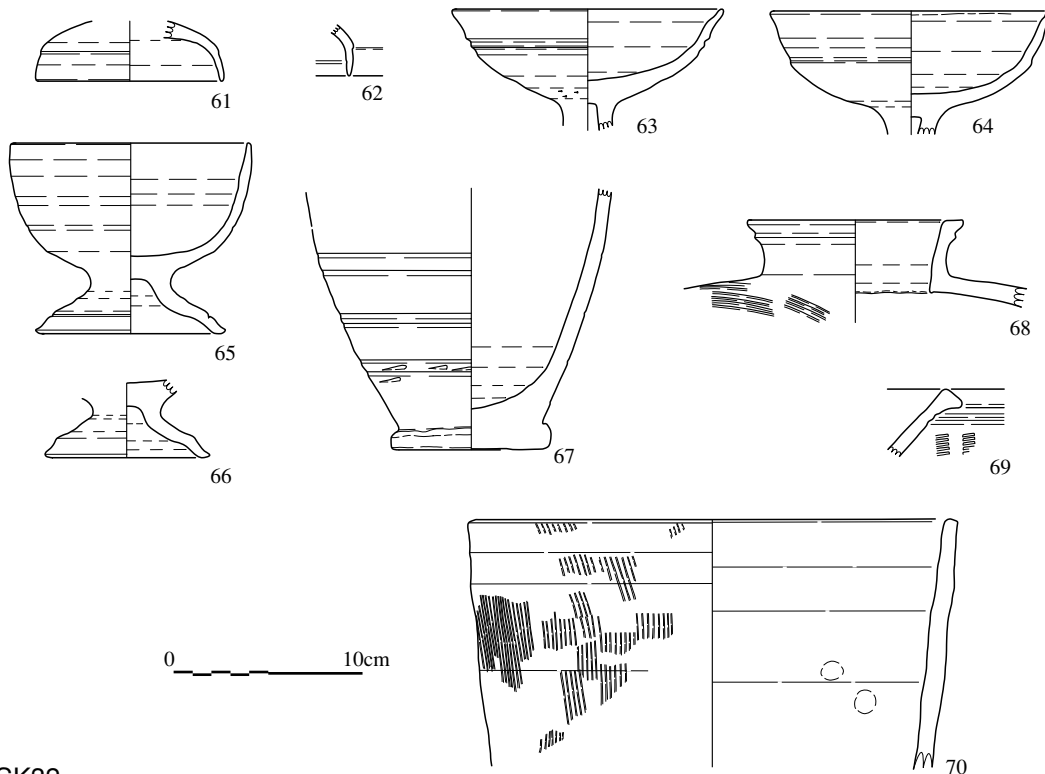
0 10cm

00B-SK15

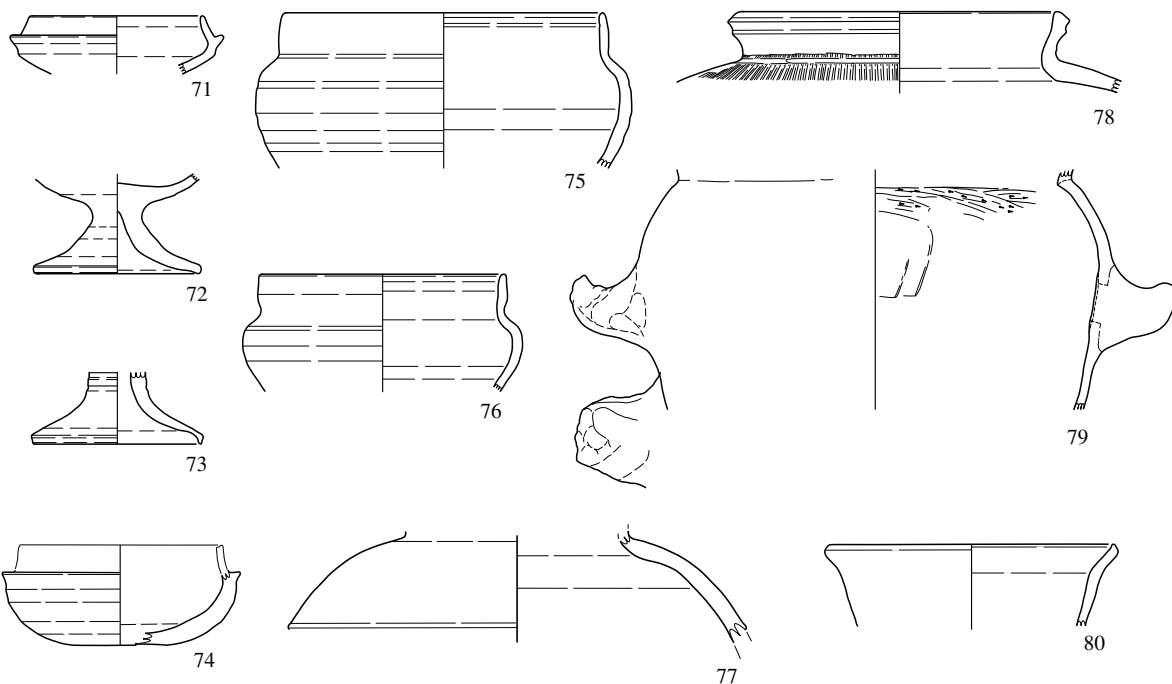


第12图 00B区出土遺物実測図(4) III期:古代

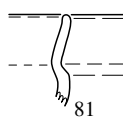
00B-SK16



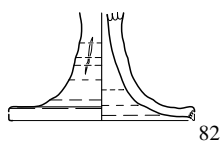
00B-SK32



00B-SK29

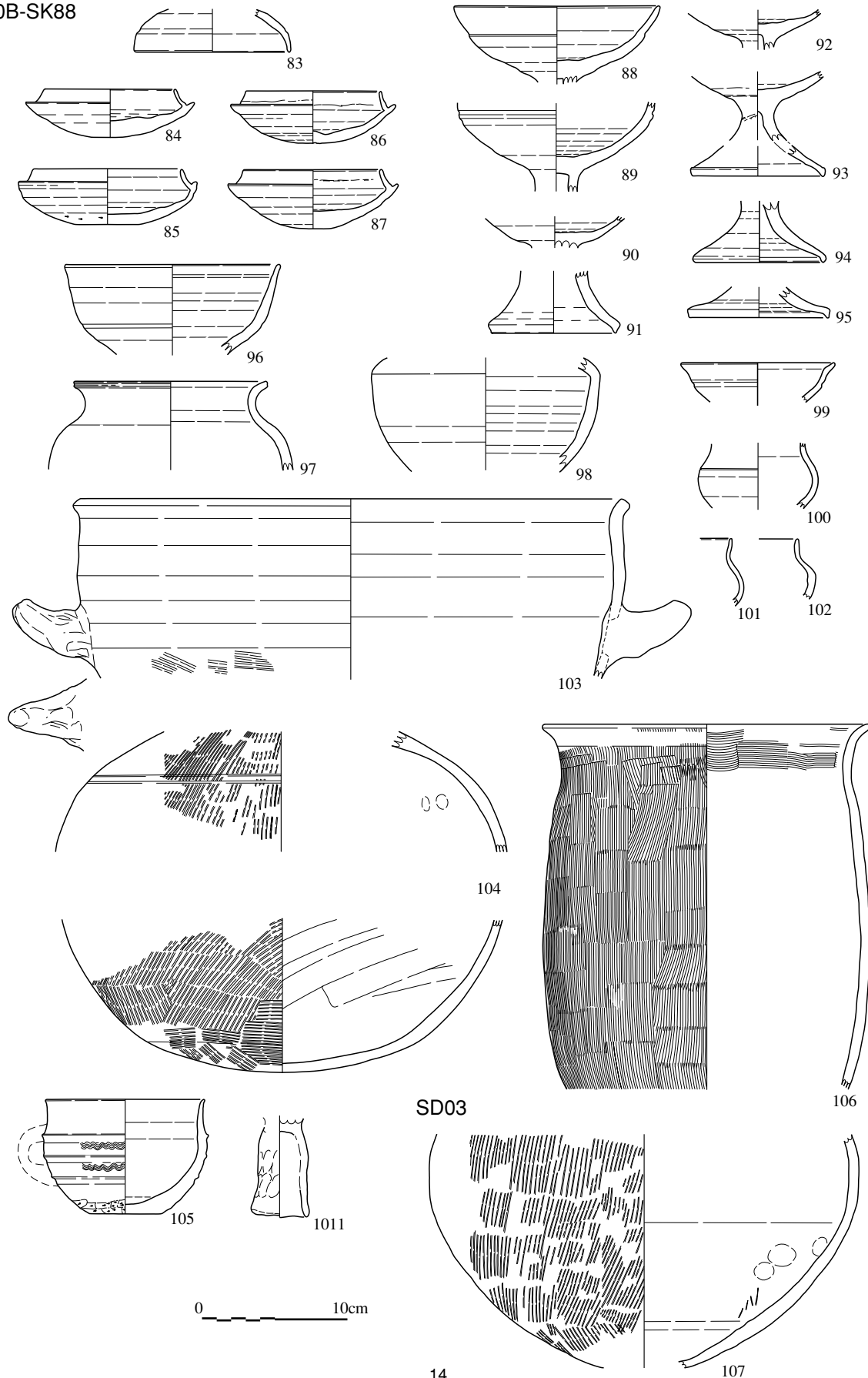


00B-SK34

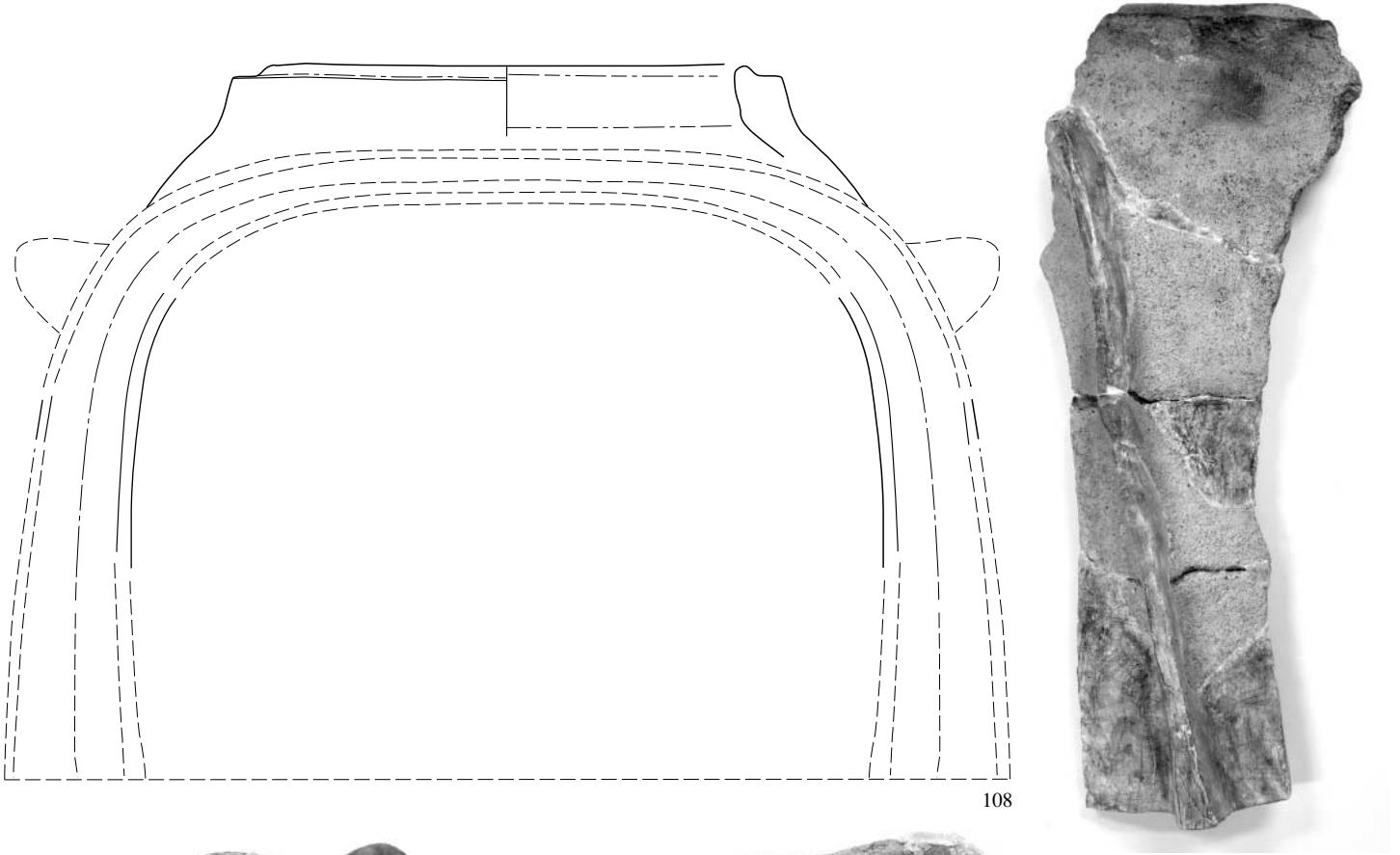


第13图 00B区出土遺物実測図(5) III期:古代

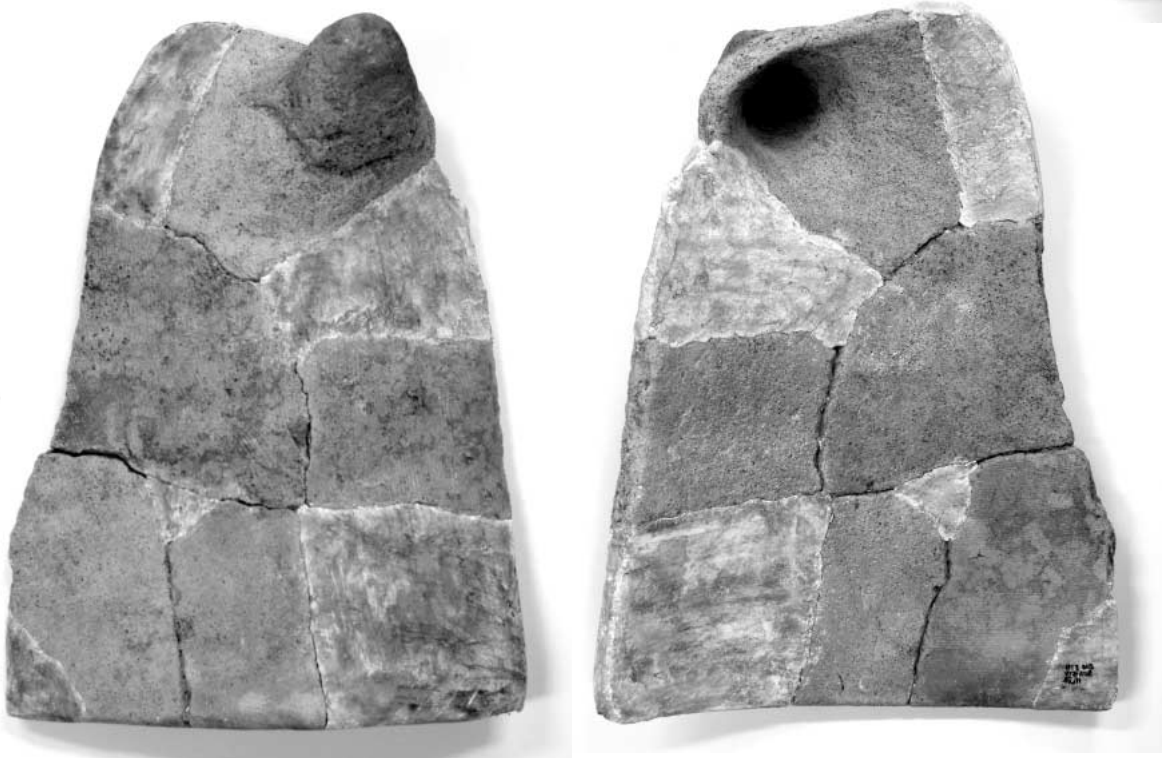
00B-SK88



第14图 00B区出土遺物実測図(6) III期:古代



108



00B区 SK88 出土鉄製品



2001



2002

第 15 図 00B 区出土遺物実測図 (7) III 期：古代 製塩土器・土製品

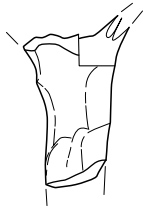
00B-SB01



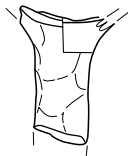
1012



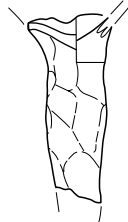
00B-SB02



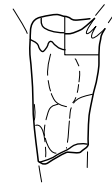
1013



1014



1015



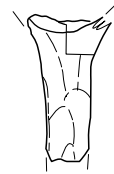
1016



1017

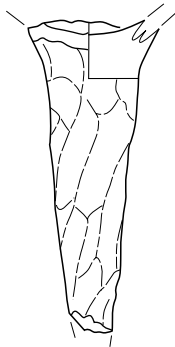


1018



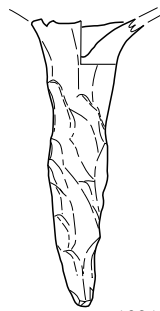
1019

00B-SK16



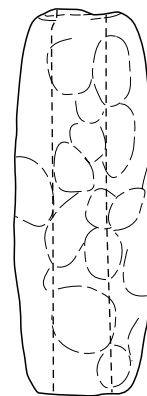
1020

00B-SK27

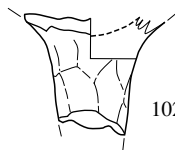


1021

00B-SX02



00B-SK32



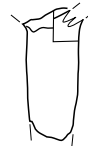
1022



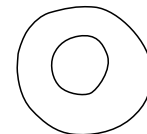
1023



1024



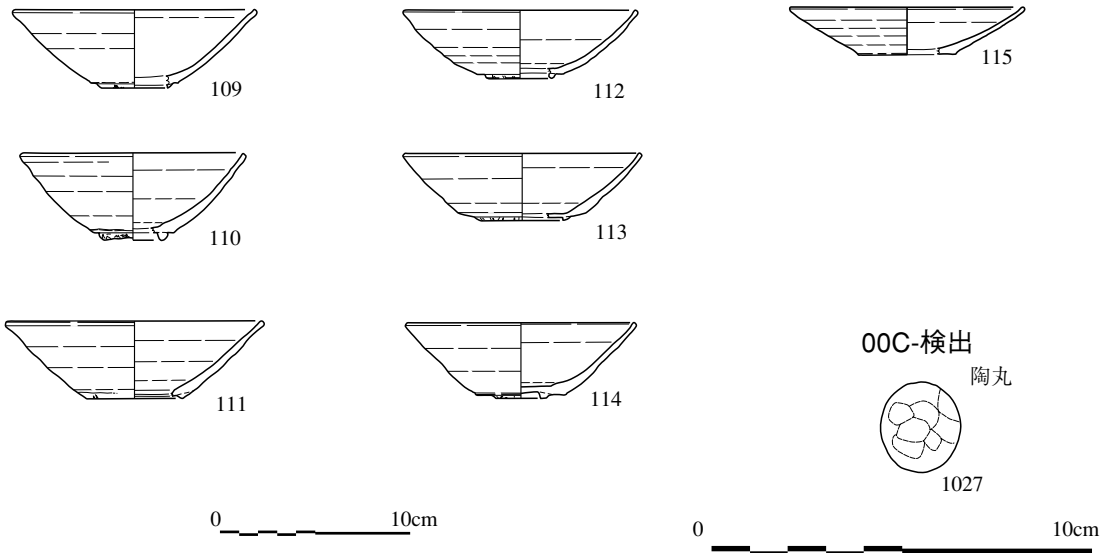
1025



1026

第16図 00B区出土遺物実測図(8) IV期：中世

00B-SD02



D. IV期の遺構・遺物

SD02 (第2面：図版9・26)

幅0.6m、検出時で深さ0.3m、断面が箱形を呈する溝である。北東から南西方向にほぼ直線的にのびる。

隣接して平行するSD03、調査区西部で見つかったSD04・SD05・SD06など、時期は確定できていないが、軸線の一致や間隔からほぼ同時期の区画溝であった可能性が高い。

遺物(第16図)は椀が中心で、小皿は小片が出土しているに過ぎない。図示した一群はいずれも北部系の均質手である。115などは高台が欠落し、立ち上がりもゆるく、かなり浅くなっている。年代的には14世紀後葉といったところか。

E. V期の遺構・遺物

SD01 (第17図、第1面：図版8・9)

調査区南壁寄りで検出した。溝の北肩は凹凸のある不定形なテラス状をなす。検出時には北肩より南側に、なめらかにのびる平行する縞状の堆積(図版12：SD01セクション参照)が認められた。断面観察によって、粘土層を挟んで平行する堆積層が確認でき、堆積層上部が削平されていることが縞状に見えた理由であった。

堆積層中に水流の痕跡は認められなかった。

粘土層は厚さ30cmほどあり、溝斜面に貼り付けられた状態であったが、とくに漆喰状という感じではなかった。基盤が砂層であるため、護岸および擁壁のために貼り付けられたものと判断した。

遺物はほとんど出土せず、00C区とは対照的である。

第17図SD01 西から



(4) 00C 区の遺構と遺物

A. I 期の遺構と遺物

a. 遺構

弥生中期後葉と考えられる遺構はいくつか存在する。それ以前については、遺物は出土しているが、遺構の存在ははっきりしない。周溝の痕跡等の細かな遺構は見つかっていない。

SB05 (第3面: 図版 17)

調査区西端で検出した竪穴建物跡。地床炉が見つかっているので「SB」記号を付与した。

SK51 (第2面: 図版 16)

一部のみ検出した。弥生土器がまとまって出土。

SK52 (第2面: 図版 16)

一部のみ検出した。貝層が認められた。弥生土器がまとまって出土している。

SK130 (第2面: 図版 16)

SK131に切られている。覆土から円礫が出土した。

SK131 (第2面: 図版 16)

整った方形プランを呈している。

SK152 (第2面: 図版 16)

南辺のみ検出した。

SK205 (第3面: 図版 17)

SK209に切られている。貼床がわずかに残存。

SK209 (第3面: 図版 17)

SK208に切られている。下部砂層内より弥生土器が出土した。この砂層は基盤層と認識されたものであるが、湧水のために十分調査ができなかった。包含層である暗褐色砂が堆積しない遺構の存在を伺わせる。

b. 遺物

縄文晩期～弥生前期

第18図はいずれも二枚貝条痕深鉢である。

116～122は比較的薄手で、口縁端面が丸く仕上げられている。なかでも、116はとくに薄手で条痕の幅も狭いので、突帯紋土器期に遡るだろう。123以下は口縁部がやや拡張気味のもので、端面も平坦である。条痕は横位・斜位に加えて縦位がある。133は口縁部がやや内傾し、砲弾型を呈するのであろう。

第19図は口縁端部の面取りが明瞭で、口縁部内外に拡張する深鉢である。口縁部の仕上げに粘土紐が付加されるものが多い。163は口縁端面に指オサエ痕が残る。

第20図は口縁端部が内側に大きく拡張する鉢類である。175は体部の傾斜が強く、身は浅い。176～181も同様の形態であらう。

第21・22図はナデ仕上げの深鉢である。烏帽子遺跡に特徴的な器種で、名古屋市古沢町遺跡、小坂井町榎王遺跡、長野県茅野市御社宮司遺跡などに類例がある。

第21図は口縁部を拡張しないがやや肥厚させる一群である。口縁端面が丸いものと面取りをするものがあり、両者とも口縁部はやや肥厚気味で薄手のものは無い。

第22図は口縁部を拡張するもの。二枚貝条痕深鉢と同様に口縁端部を内側に大きく拡張するもの(208～217)がある。

外面の調整は、指の単位が明瞭にわかるナデと、若干ケズリ気味で砂粒の移動が認められ指の単位がわからないものがある。後者は板などの工具を用いたのであろう。

破片資料が多いので厳密な数値区分はむづかしいが、大雑把にみて、条痕仕上げ・ナデ仕上げともに口径は20cm内外のものと15cm以下のものに分かれるようだ。通常集落遺跡で出土するのは前者であり、後者が烏帽子遺跡の特殊性に関係する要素と言える。

第23図上段は底部を集成した。口縁部数に比べて底部の少なさが気になるけれども、それはともかくとして丸底がほとんどで、平底はみられない。223のように尖底とおもわれるものもある。烏帽子遺跡における型式的特徴とえよう。

第23図下段は浮線紋系土器と弥生前期の沈線紋系土器および条痕紋系土器である。

227は浮線紋浅鉢で、口縁部下の無紋帯が明瞭に形成されて、やや幅広くなっている。口外帯には点刻があり、浮線紋帯は1段のようだ。

228は口縁部に口外帯が無く、227に比べて小さい。無紋帯下の紋様は沈線状である。

229は有紋深鉢の口縁部で工字紋が施されている。

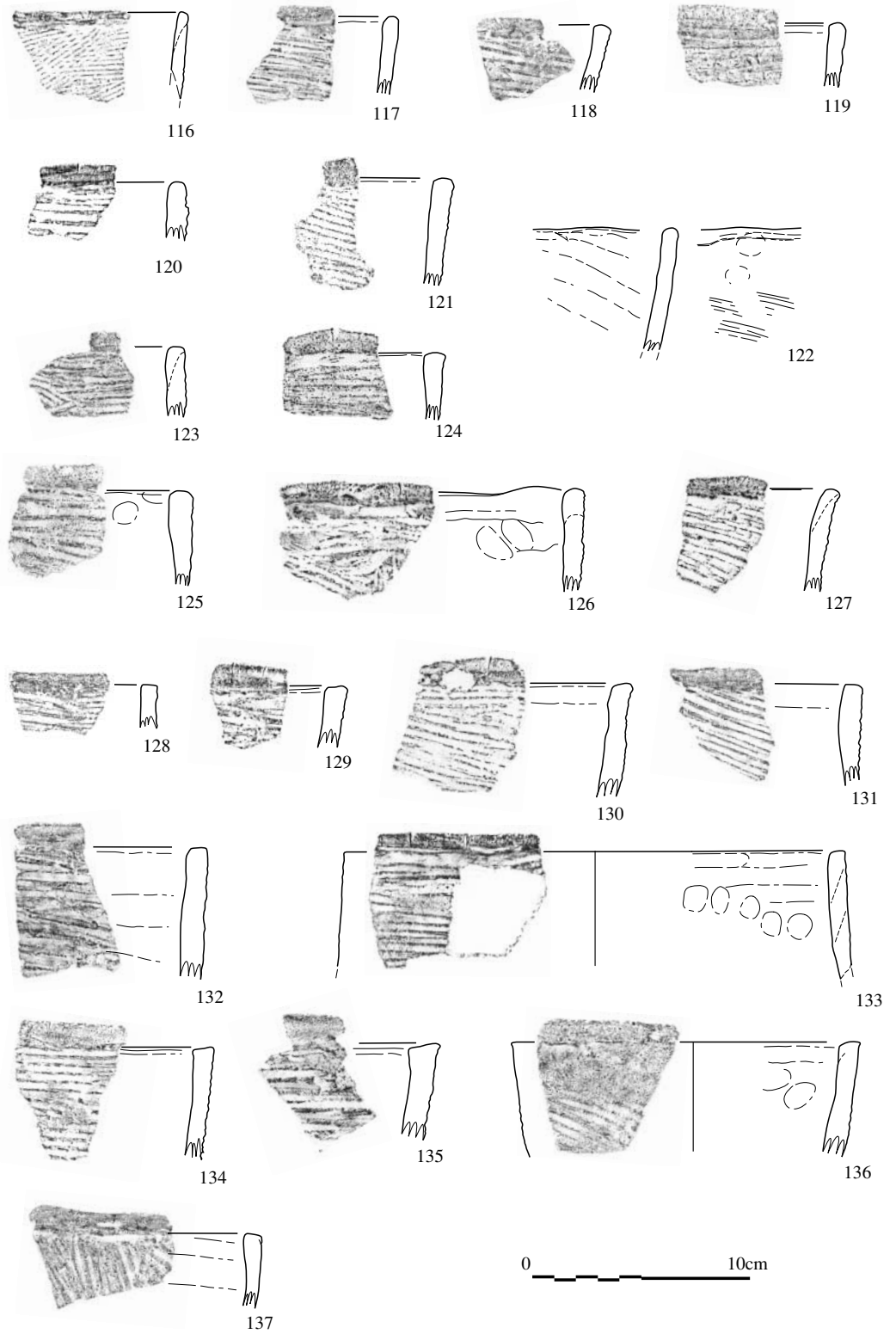
230・231は水神平式の甕である。

第24図は弥生前期から弥生中期にかけての内傾口縁土器と厚口鉢を集成した。

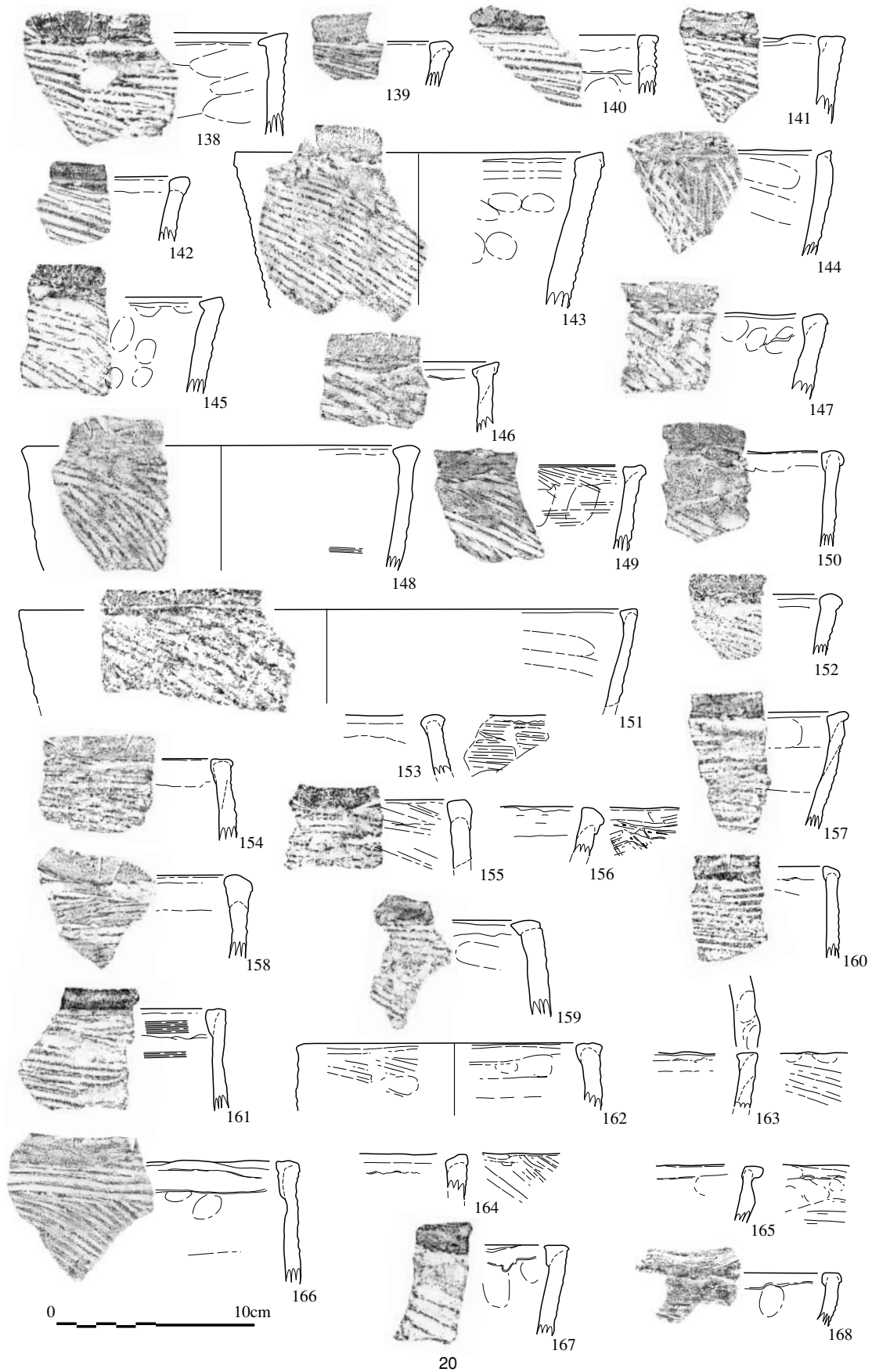
232～234はナデ仕上げである。弥生前期を下ることはない。

235以下は二枚貝条痕である。いずれも口縁部は比較

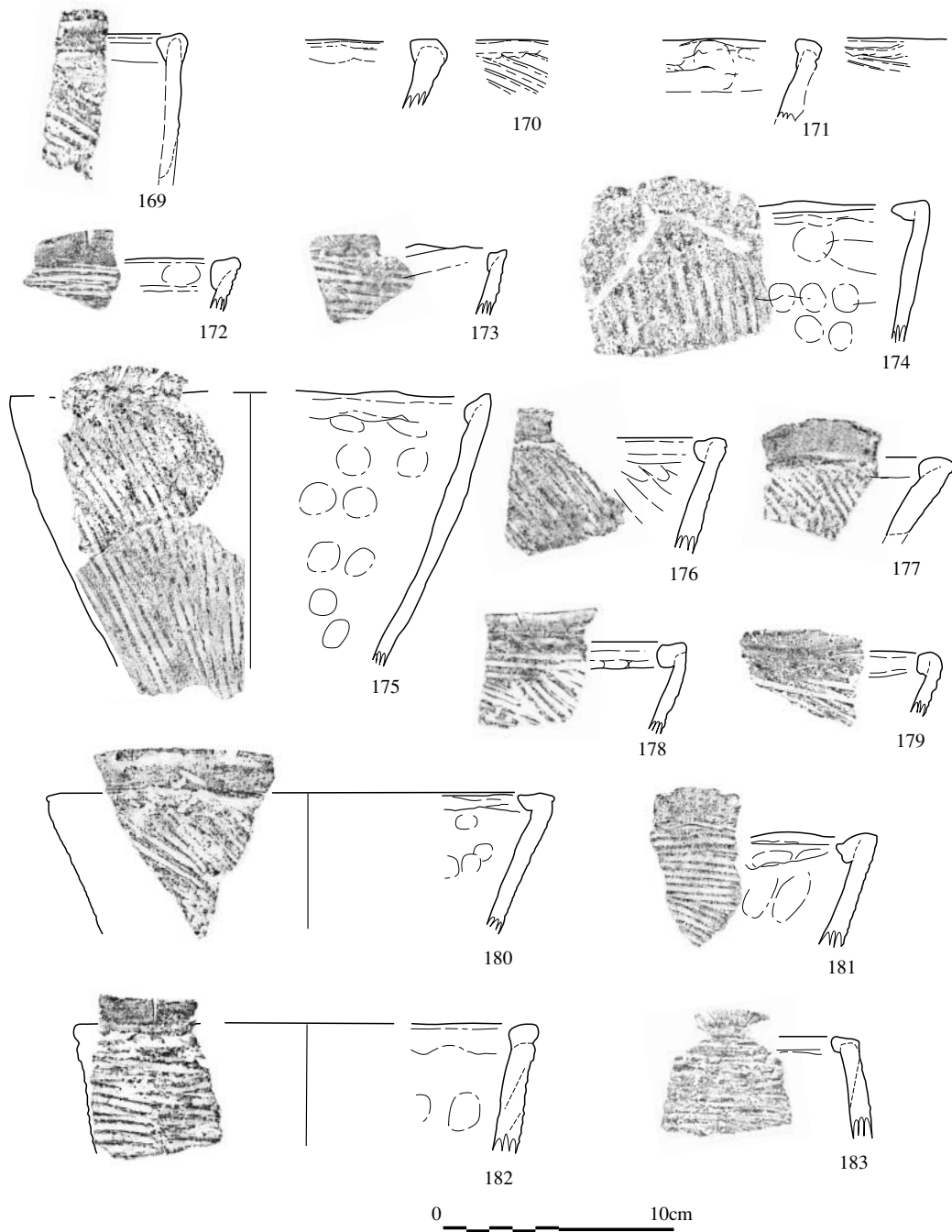
第18図 00C区出土遺物実測図(1) I期：縄文晩期～弥生前期



第19図 00C区出土遺物実測図(2) I期:縄文晩期~弥生前期



第20図 00C区出土遺物実測図(3) I期:縄文晩期~弥生前期



的薄手で、235・236は弥生前期に遡る可能性がある。237以下は弥生中期前葉中段階を下らず、口縁部が大きく肥厚する岩滑式末期に該当する例は含まれていない。

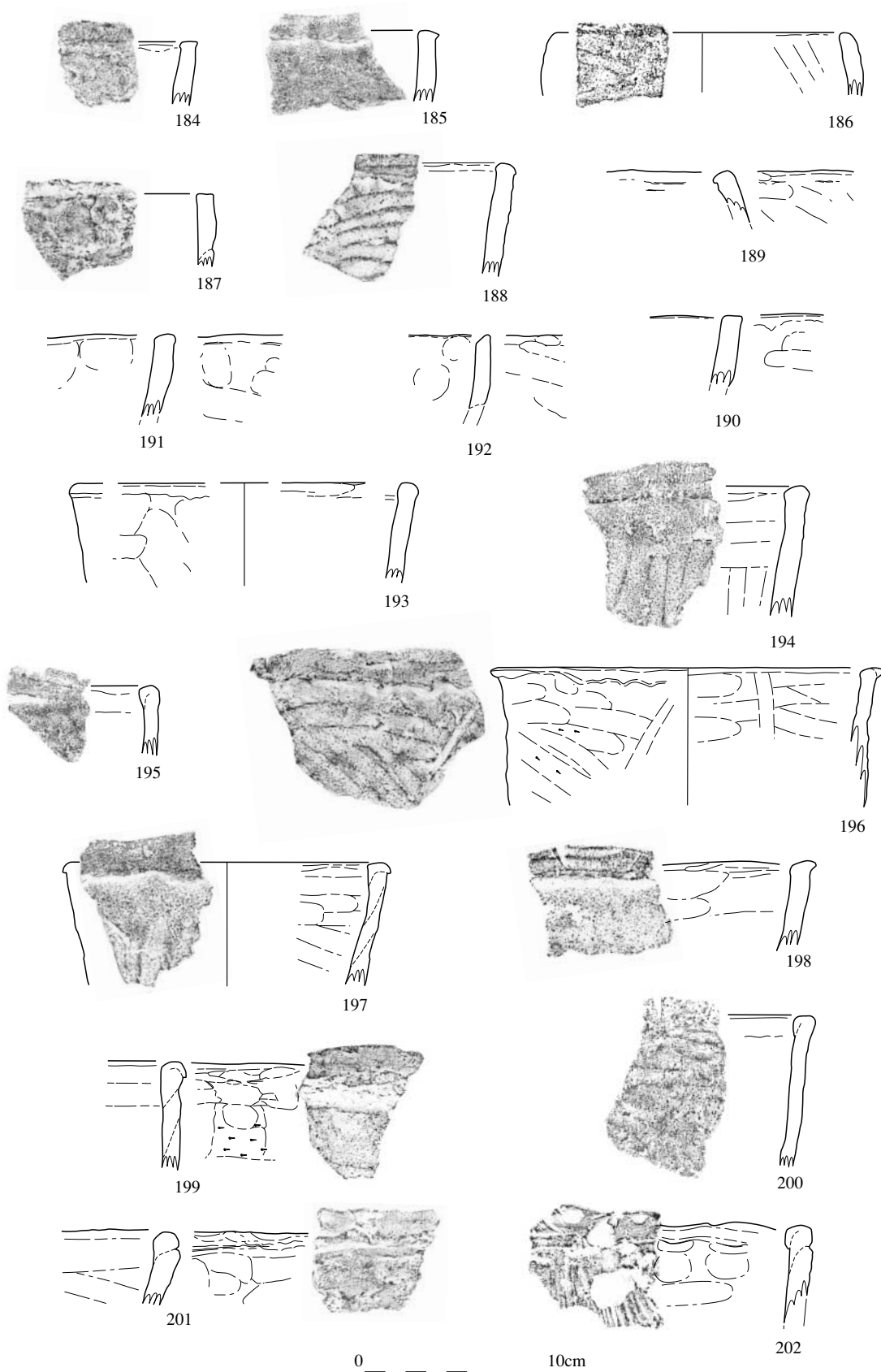
第25図は弥生中期の条痕紋系土器を集成した。245は頸部に波状紋が施され中期前葉に位置づけられる。

口縁部は横ナデにより無紋で、指による単独圧痕をもつ。

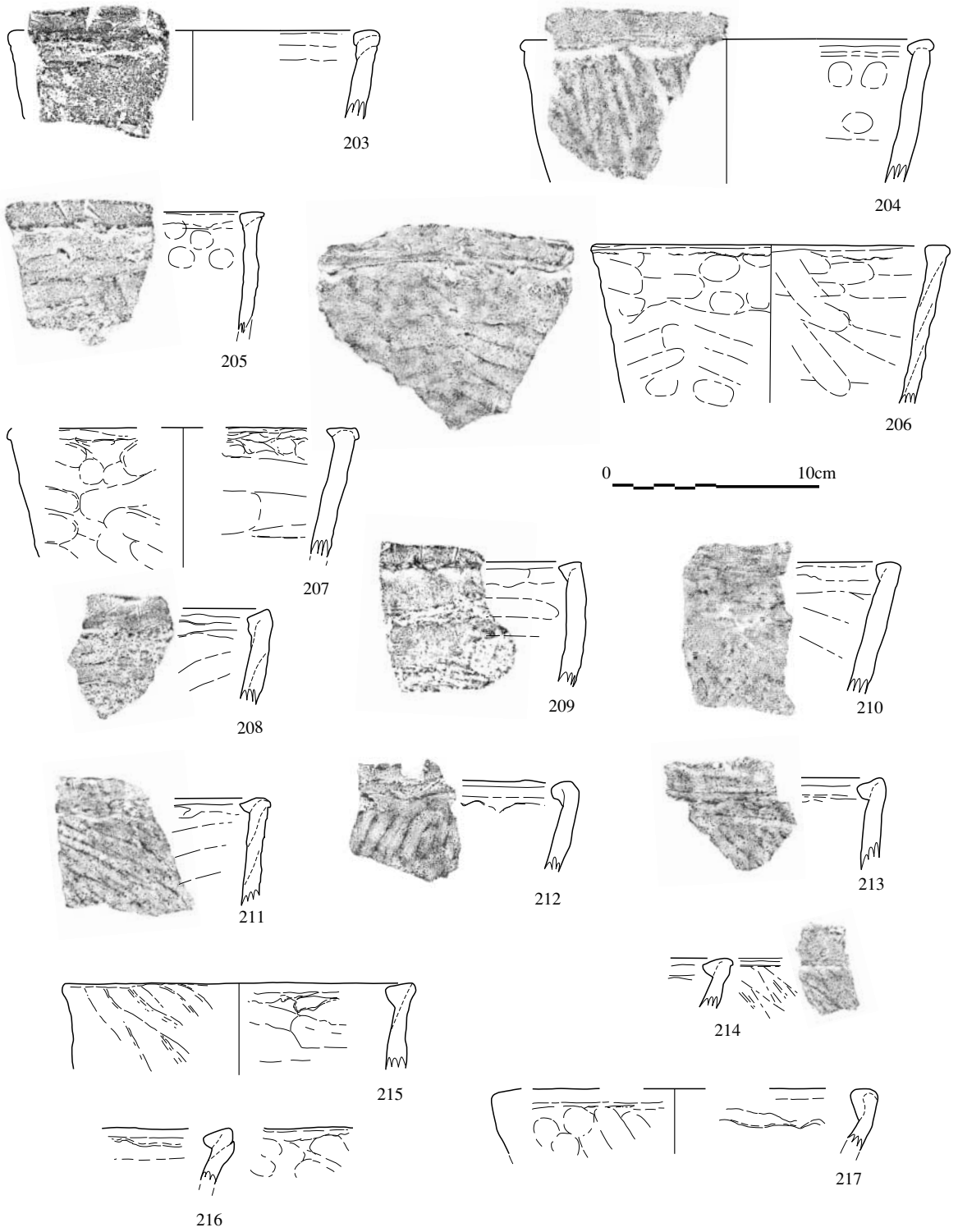
246・247は跳ね上げ紋が崩れた斜条痕である。247の口縁部には突起の剥がれた痕跡がある。

248・249は受口状口縁壺で、249は口縁部が伸びて彎

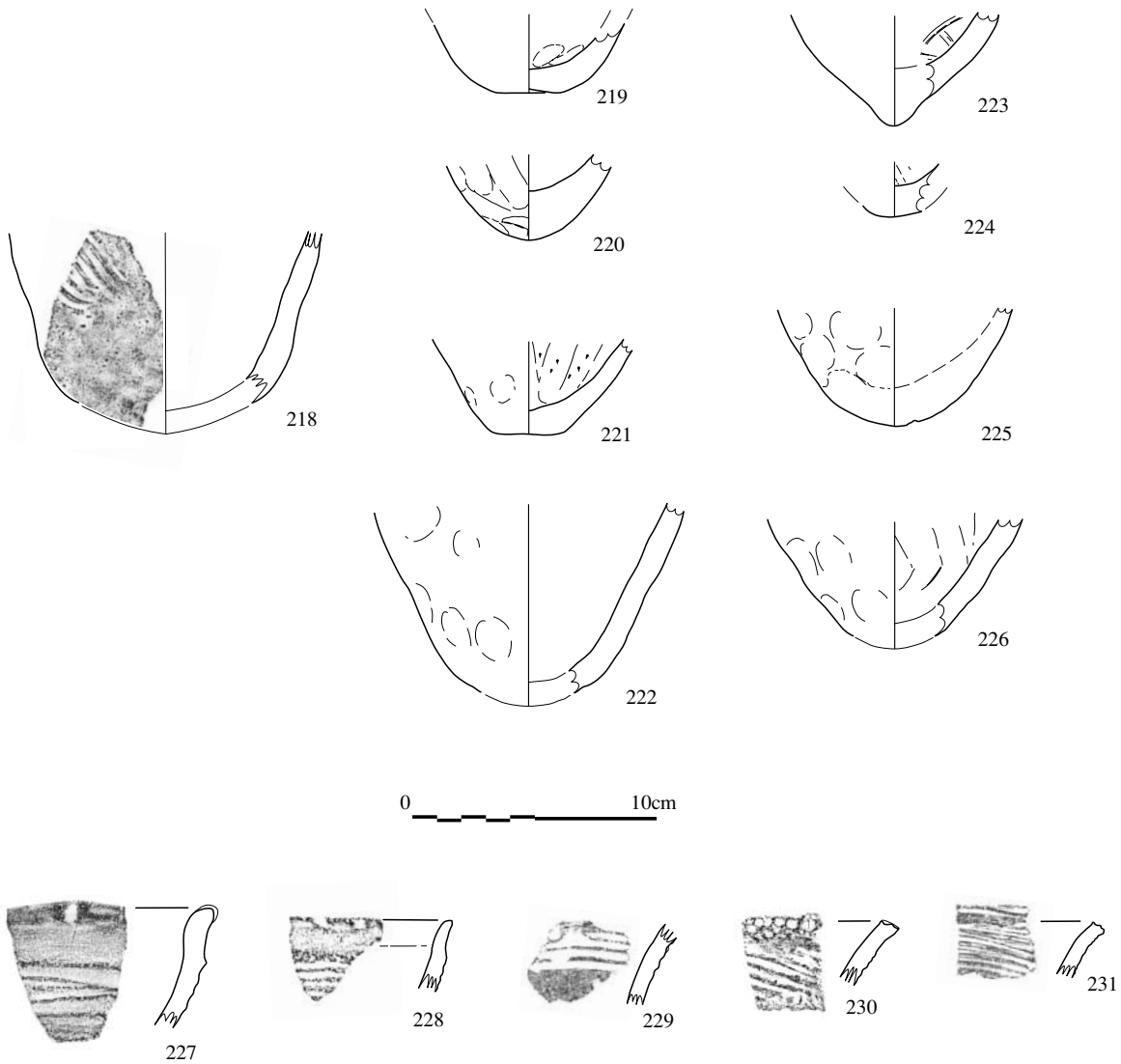
第21图 00C区出土遺物実測図(4) I期:縄文晩期~弥生前期



第22図 00C区出土遺物実測図(5) I期:縄文晩期~弥生前期



第23図 00C区出土遺物実測図(6) I期:縄文晩期~弥生前期



曲し新しい様相を示している。248は弥生中期前葉中段階、249は同新段階に属す。

251以下は甕。257は口縁部内面にハケメ調整が施されており、折衷型か？

258は内外面とも二枚貝条痕が施され、弥生前期以来のものである。もしくは弥生前期に含める必要があるか。滋賀県守山市小津浜遺跡出土例に良く似ている。

第25図 259～261は弥生中期前葉の新段階、262～264は弥生中期中葉古段階の土器である。

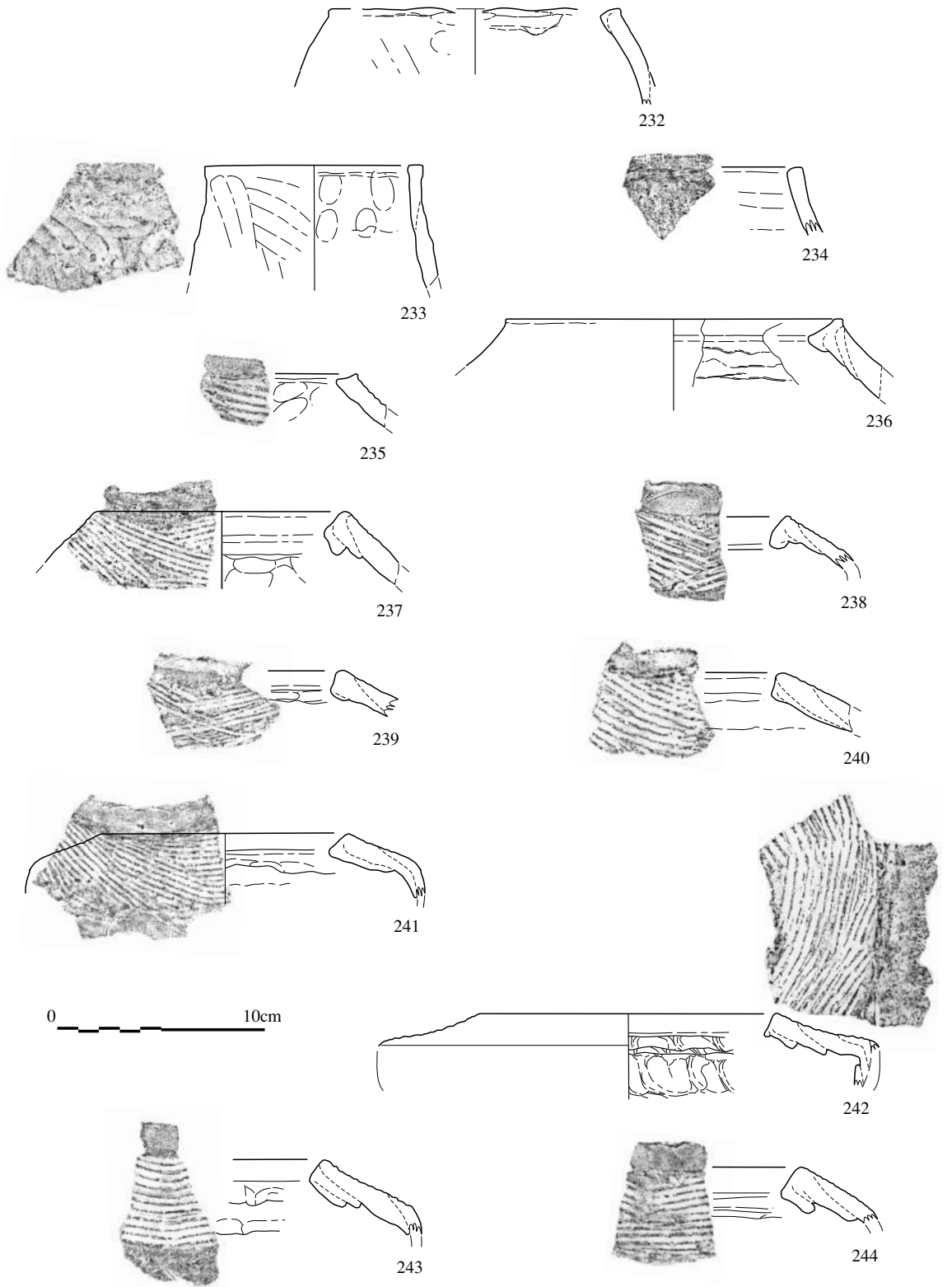
259は二枚貝背面圧痕による擬縄紋が施される壺であり、磨消縄紋風の紋様をもつ。頸部には5条の沈線がめぐり、中央の1条を中心として上下に交互に縦位沈線が施され、簡略な工字紋を構成している。体部には

沈線で区画された中に擬縄紋が充填されたコ字状紋様(王字状もしくは工字状区画が崩れたもの?)がめぐり。最下段は沈線で区画されている。260は擬縄紋に平行線紋が付加され、259と同類であろう。261は半割管状工具による多条平行線に同工具の押し引き紋が付加されている。弥生中期前葉後半から中葉初頭にかけての特徴である。

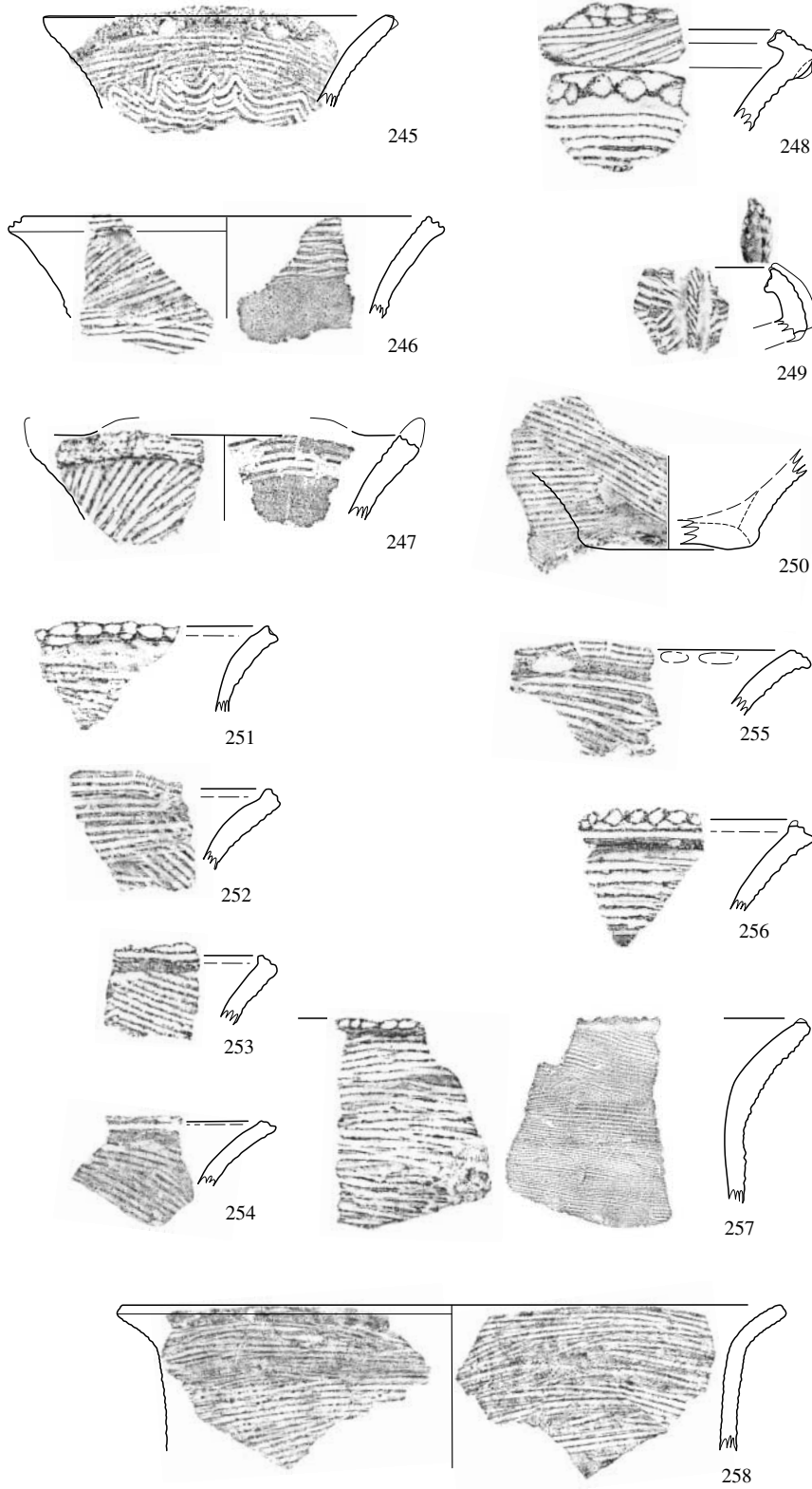
262・263は二枚貝刺突列に沈線が付加された連弧紋構成となっているもので、濃尾平野や矢作川下流域で散見される資料である。刺突列は擬縄紋に含められるかもしれない。

264は二枚貝条痕の甕で、濃尾平野南部通有の器種である。

第24図 00C区出土遺物実測図(7) I期:縄文晩期~弥生中期前葉

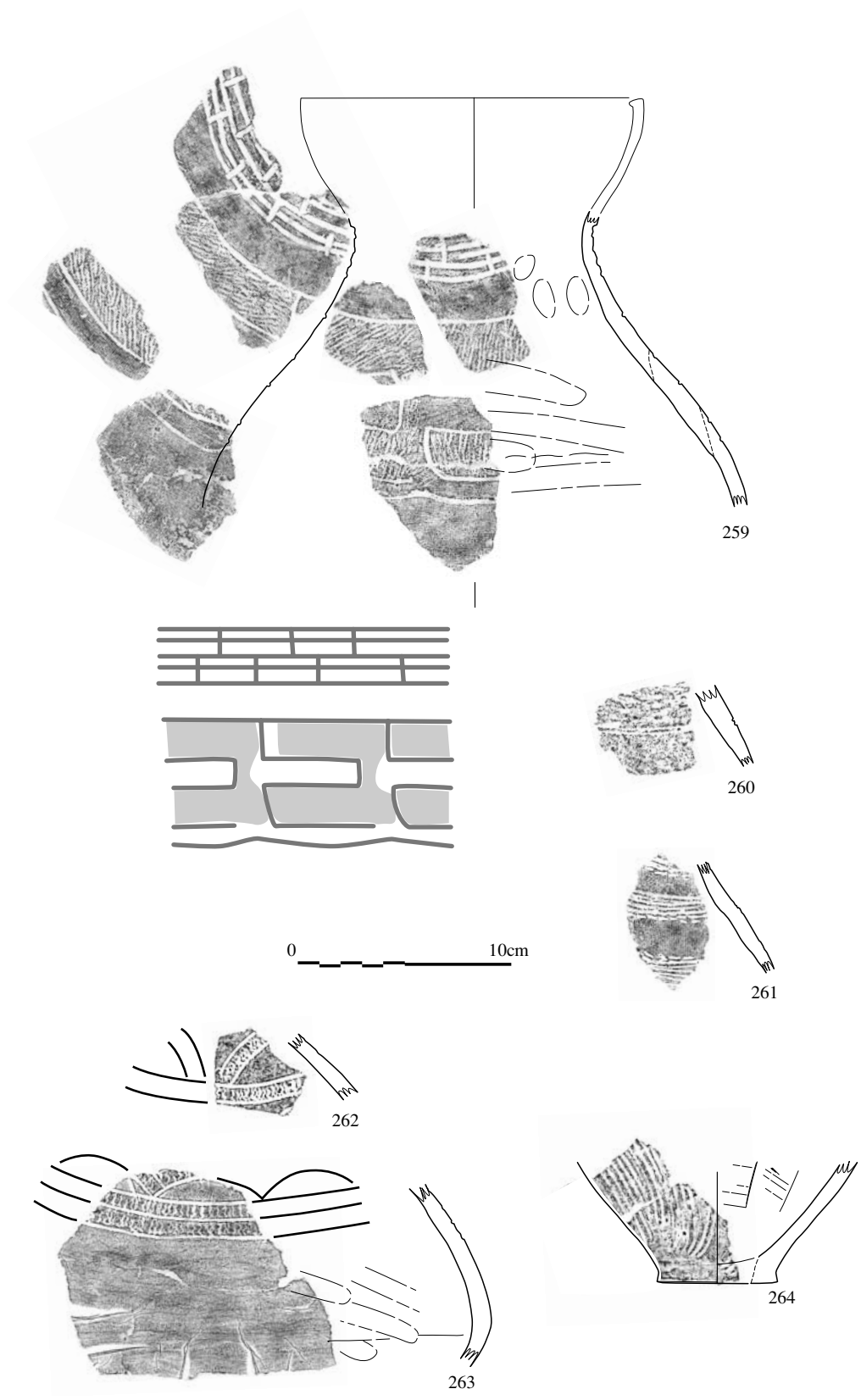


第25图 00C区出土遺物実測図(8) I期:弥生中期前葉



0 10cm

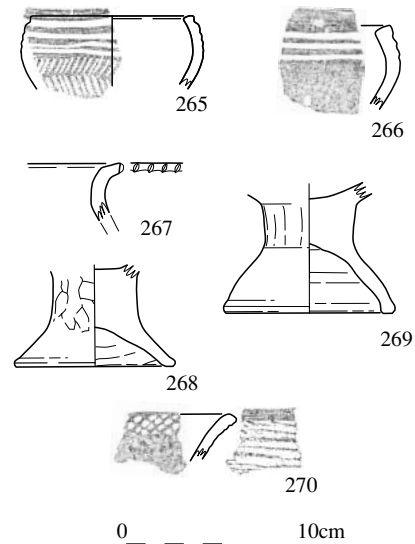
第26図 00C区出土遺物実測図(9) I期:弥生中期前葉から中葉



第27図 00C区出土遺物実測図(10)

I期：弥生中期後葉

00C区-SB05



弥生中期後葉

烏帽子遺跡から出土した弥生中期後葉の土器群は、従来の研究に倣えば、

- ①濃尾平野在来の貝田町式に共通する一群(I E系)、
- ②濃尾平野北東部から内陸部にかけて分布する条痕紋系土器に共通する一群(II N系)、
- ③伊勢湾西岸地域の土器に共通する一群(I W系)、
- ④矢作川中下流域在来の土器群に共通する一群(III系)、

⑤凹線紋系土器に共通する一群(IV系)、などのいくつかの《系統》に分かれる。細かな型式差や胎土の特徴に注目するなら、さらに分れるであろうが、いちおうこの区分を指標に以下解説を加える。

SB05 (第27図)

265・266はIV系、267～269はIII系、270はII N系である。

SK51 (第28図)

271～280はI E系、281～283はIII系、285・286は伊勢湾西岸のIV系(IV S系)である。弥生中期後葉中段階の古相である。

271・272は口縁部や頸部の管状工具による刺突が特徴的である。277は口縁部外面と端面に二枚貝刺突が加えられている。278～280は台付甕で、278・279は頸部の屈曲が強い。

283は古相を呈する受口の細頸壺で、半割管状工具による平行線紋を主紋様としている。連弧紋に刺突紋が加えられている。

285・286は同一個体と思われる。口縁部には凹線1条と細いクシで刺突紋、頸部から体部にかけては直線紋、最下段には波状紋がめぐる。体部下半には横位に、底部付近は縦位(放射状)にミガキが施されている。ミガキ仕上げは伊勢湾西岸の中・南部地域(納所遺跡や鳥居本遺跡に特徴的)の特徴であり、搬入品であろう。

284はI系とIII系の折衷型である。体部上半にはハケメを残し、色調も明るい。側面形はIII系そのものであり、手抜き製作の可能性もある。

SK52 (第29図)

291～298はI E系、299・300はIV系、301・302はIII系、303・304はI W系である。弥生中期後葉中段階の古相である。

304は口縁部下端には連続刻み、上端は円周分割単位の部分刻みが施されている。

その他、305は弥生中期中葉に属す二枚貝調整の甕である。306～312は縄文晩期から弥生前期にかけての土器である。312は壺頸部片で、波状紋は波長が小さく圧縮されているので中期に下るかもしれない。以上は、後の時期の遺構に埋土とともに流入して混在という結果に至ったことを示す資料として提示した。

SK130 (第30図)

313～315はI E系、316～322はIII系、323・324はIV系。ただし318・319は、形態はIII系的であるが、紋様・調整が在来のものとは異なり折衷型か、もしくは三河東部との関係を示す資料の可能性がある。弥生中期後葉の中段階新相に属す。

SK131 (第30図)

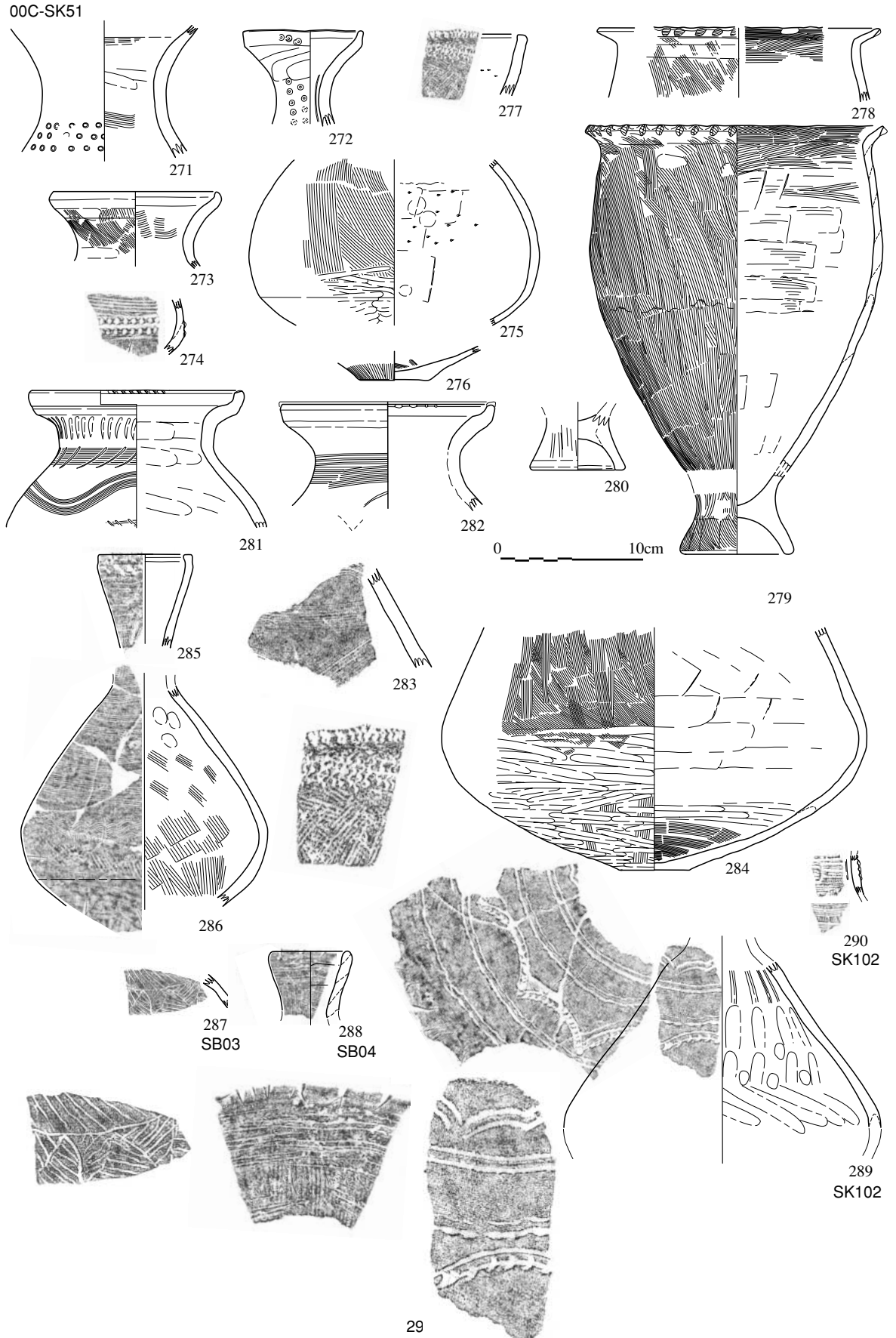
325～328はIV系、329・330はIII系。弥生中期後葉新段階に属す。

325はタタキが右上がり、濃尾地域のIV系タタキ甕とは異なる。知多半島から三河にかけては右上がりのタタキ甕が分布しているが、成形時における土器と製作者の位置関係が異なるのであろうか。左上がりの場合には土器を正立に置いて右手にタタキ板を持ち成形すると考えられるが、この場合にはタタキ板を左手で持つか、土器そのものを手で持つ、ということになるのだろうか。

329は鐔状口縁をもつ台付鉢、もしくは高杯である。III系には珍しい。外面はナデ仕上げである。

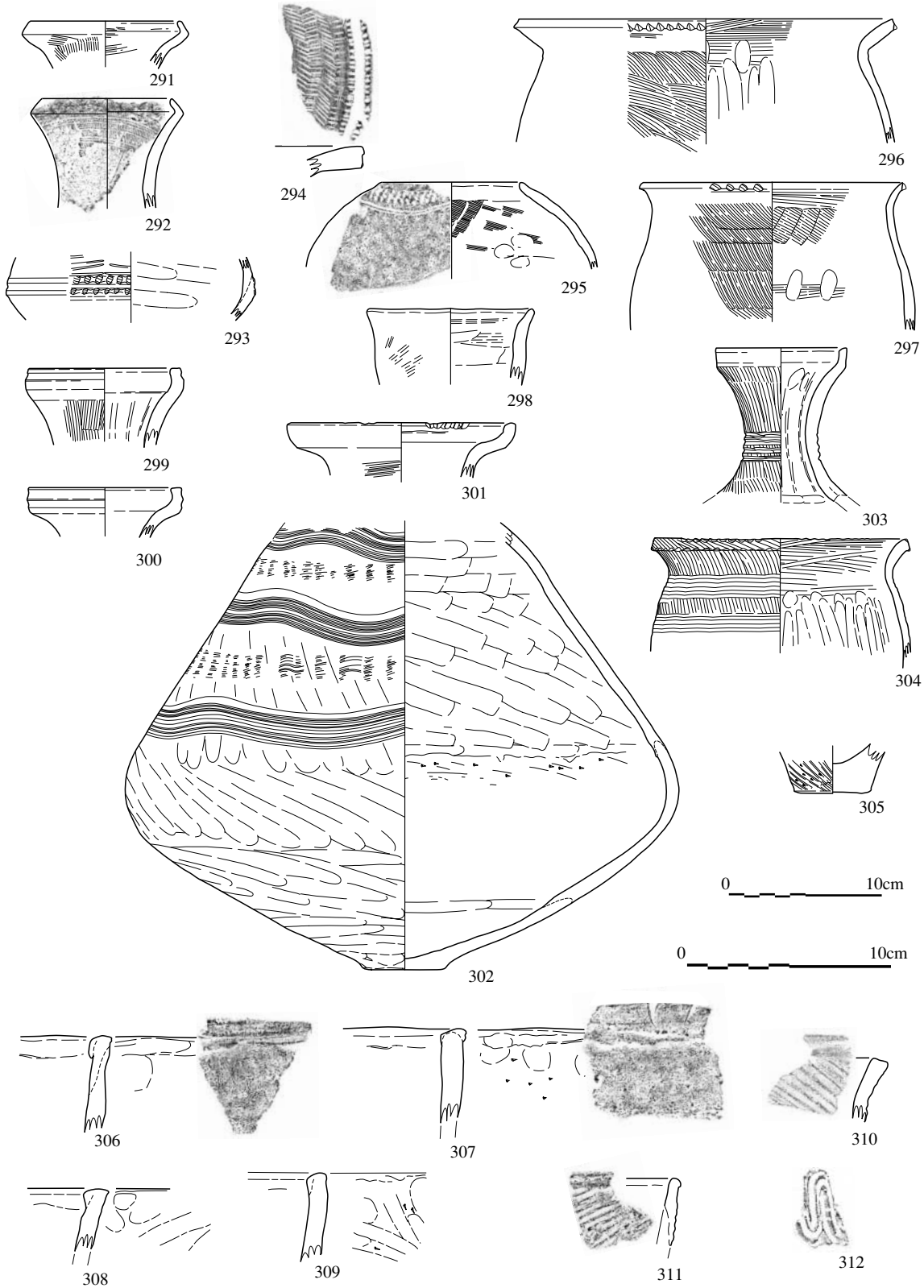
SK139 (第31図)

第28図 00C区出土遺物実測図(11) I期:弥生中期後葉



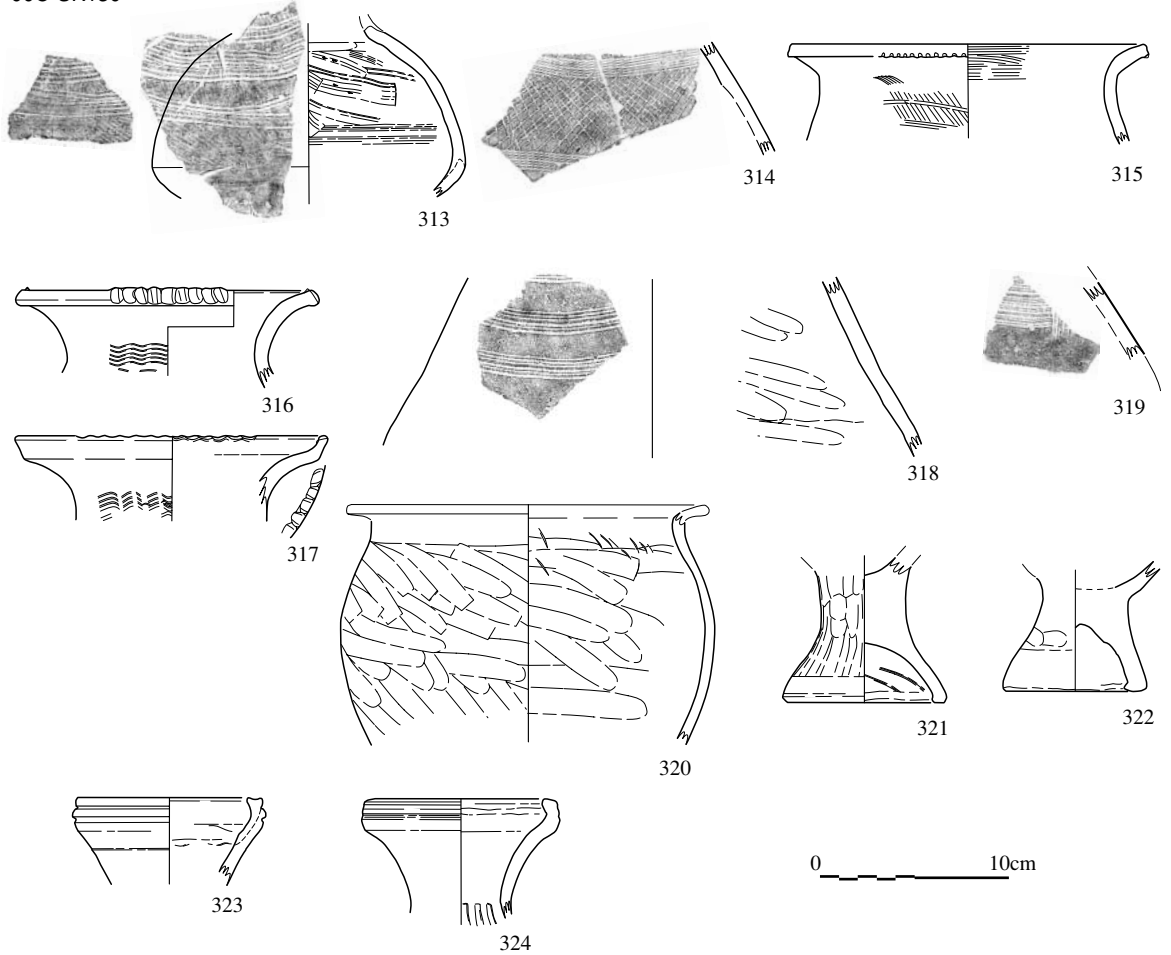
第29图 00C区出土遺物実測図(12) I期:弥生中期後葉

00C区-SK52

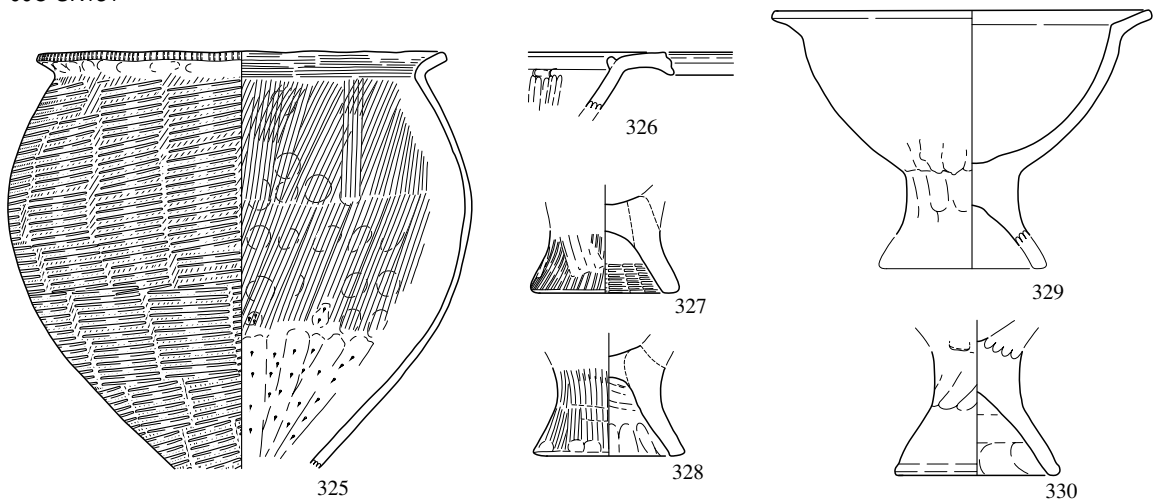


第30図 00C区出土遺物実測図(13) I期:弥生中期後葉

00C-SK130



00C-SK131



331は内面にケズリ、外面はケズリ後にミガキが施されている。Ⅲ系甕の変異か、それとも後期に属するのだろうか。332～324はⅢ系。334は高杯で、杯部外面には粗いハケメの後、ミガキが施されている。ハケメはタタキのようにもみえる。

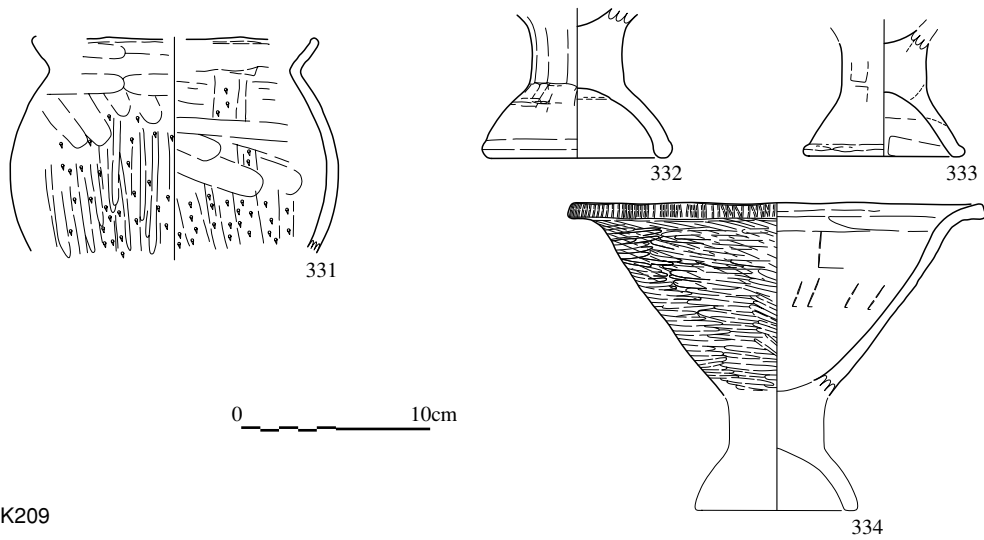
SK209 (第31図)

335はⅠE系、336～339はⅢ系、340はⅣ系、341はⅡN系である。

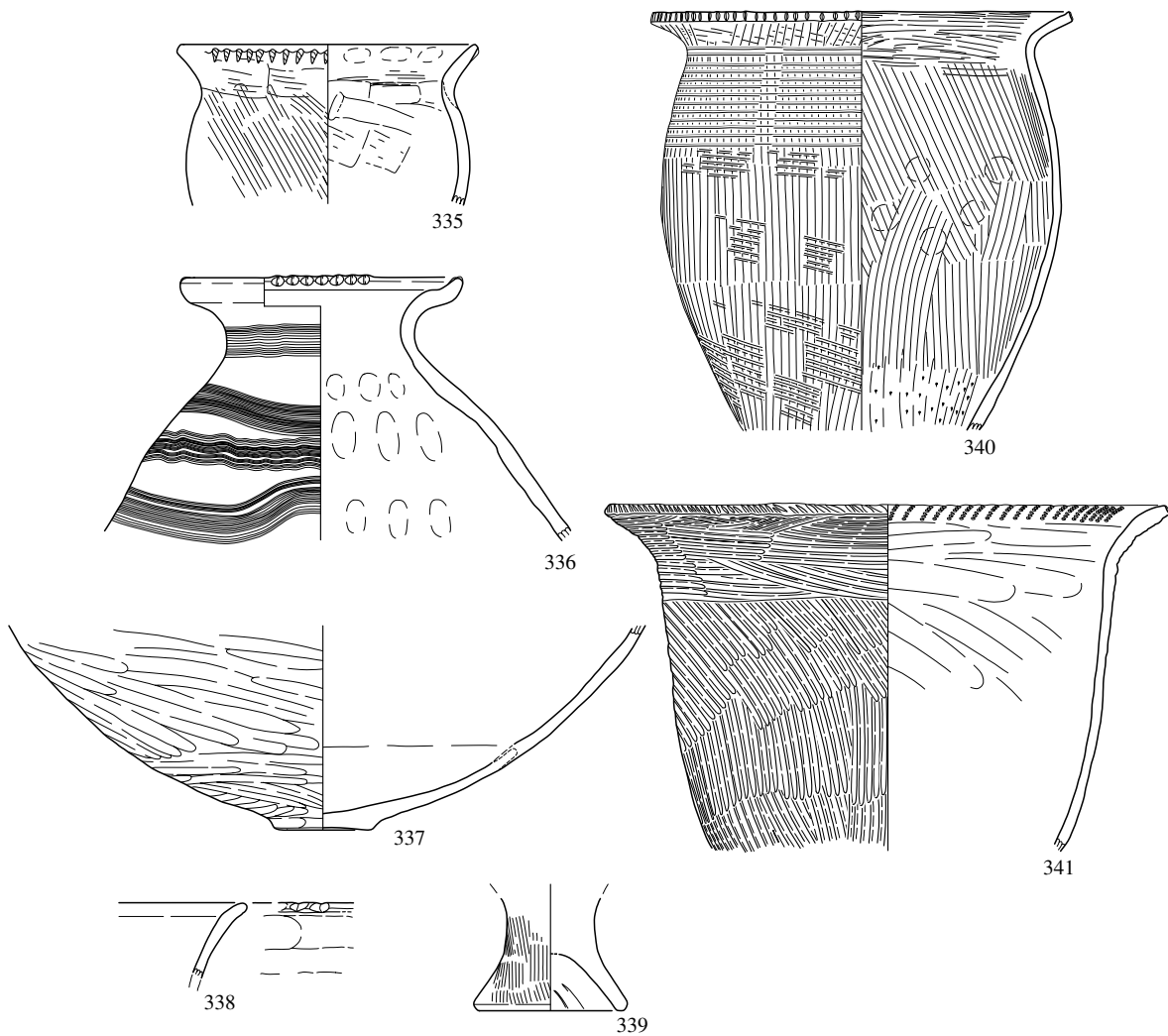
338は口縁部に部分圧痕が施された深鉢形の甕で、Ⅲ系の弥生中期後葉における初現型式である。

第 31 图 00C 区出土遺物実測図 (14) I 期：弥生中期後葉

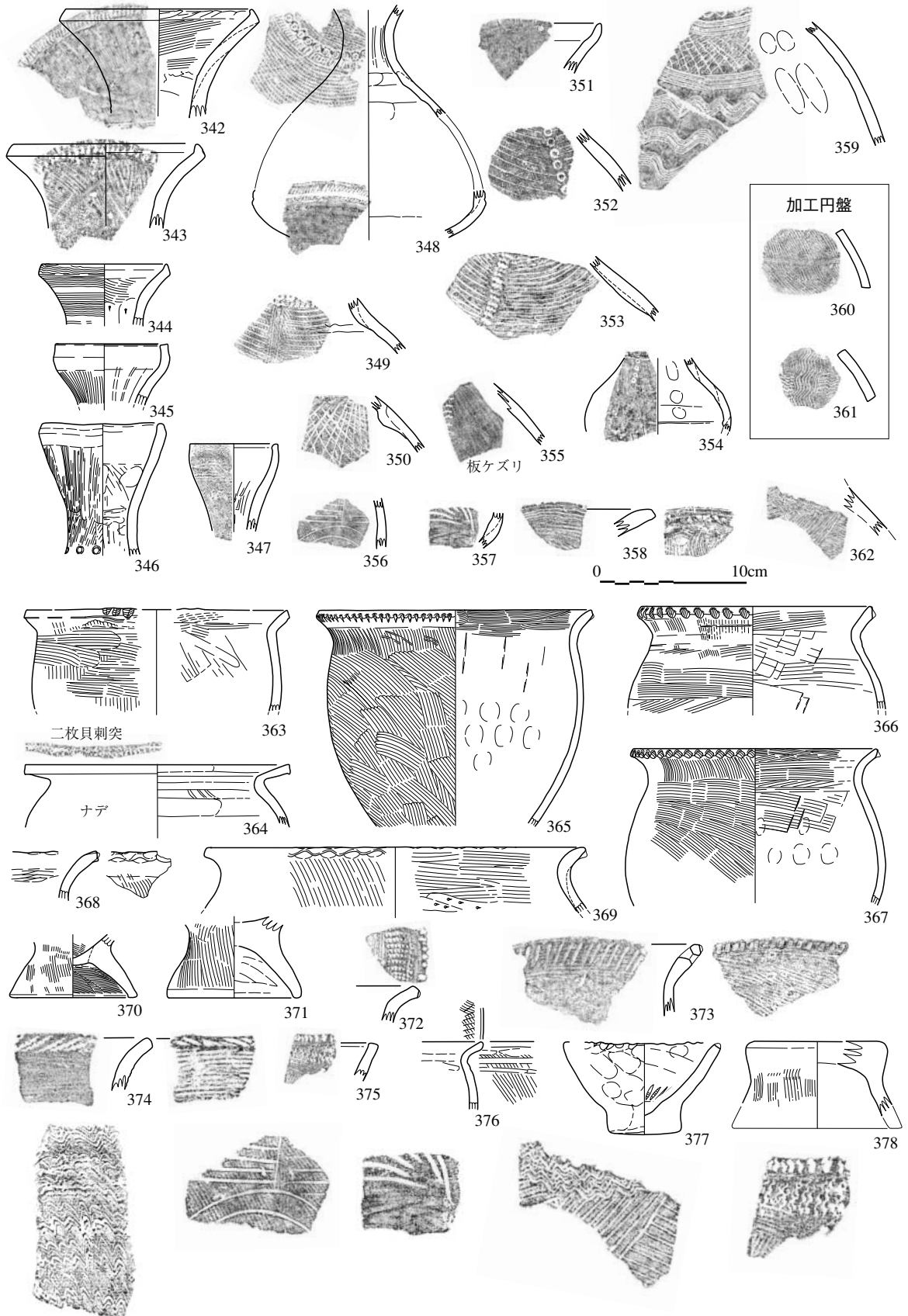
00C-SK139



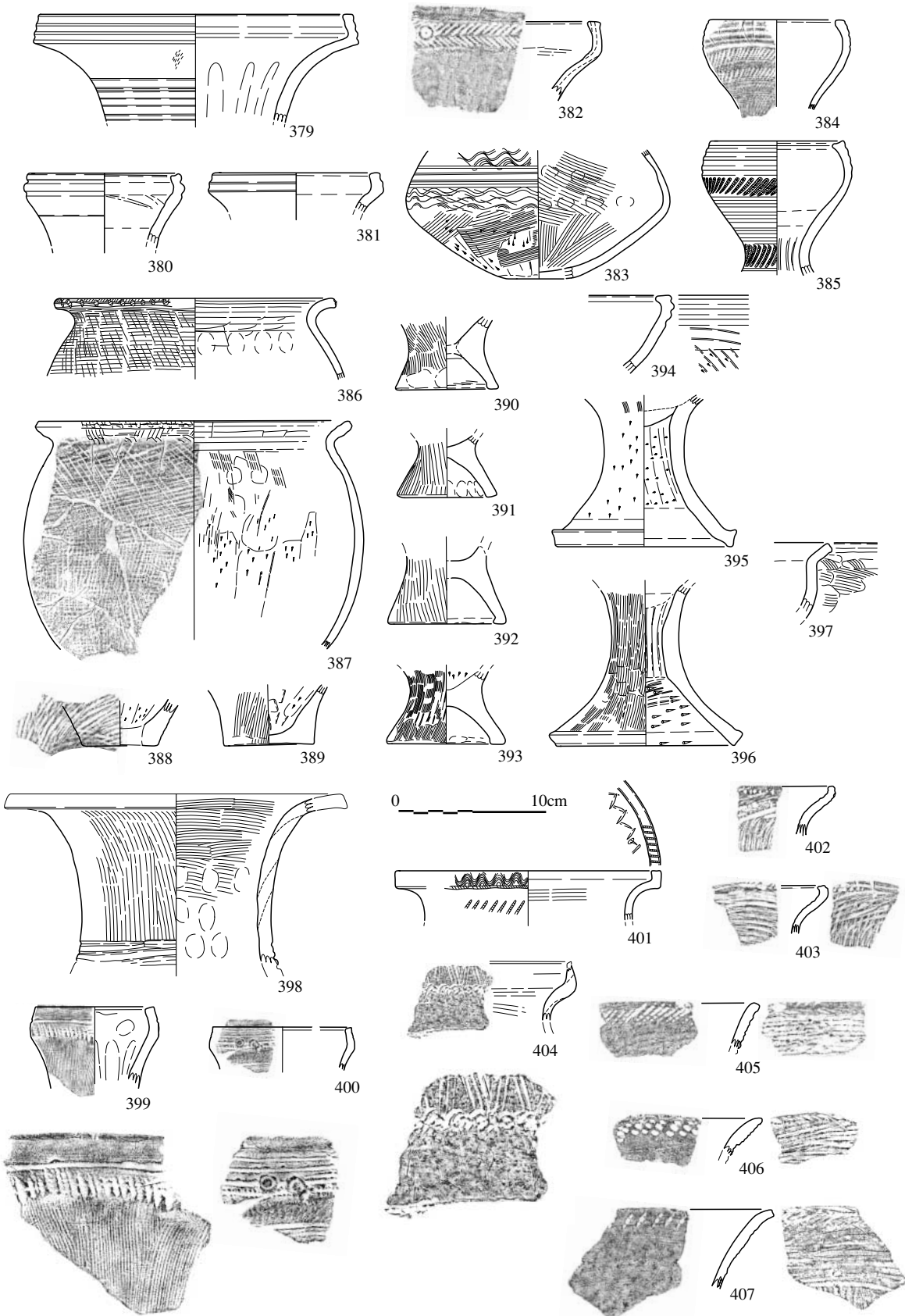
00C-SK209



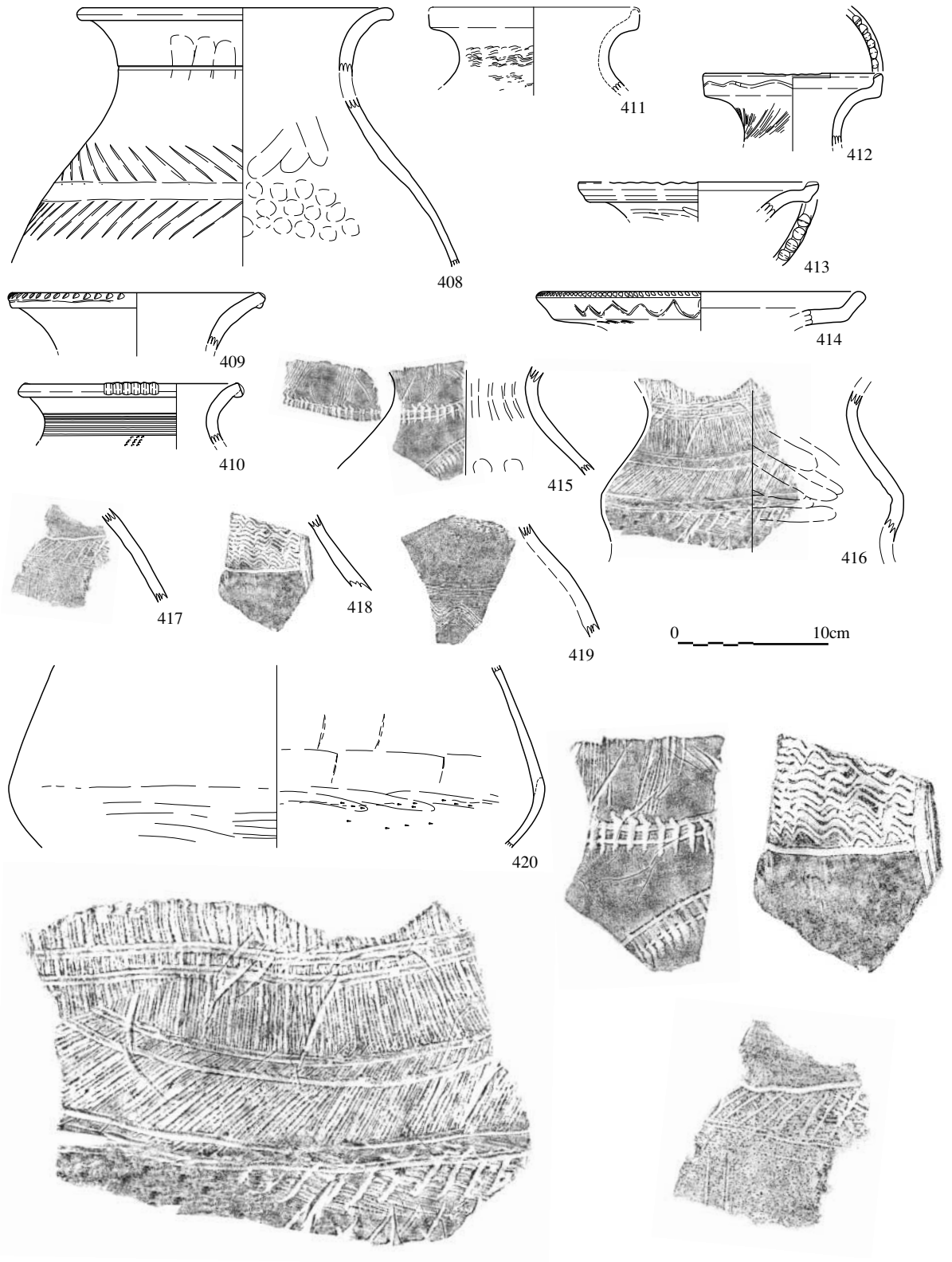
第32図 00C区出土遺物実測図(15) I期：弥生中期後葉



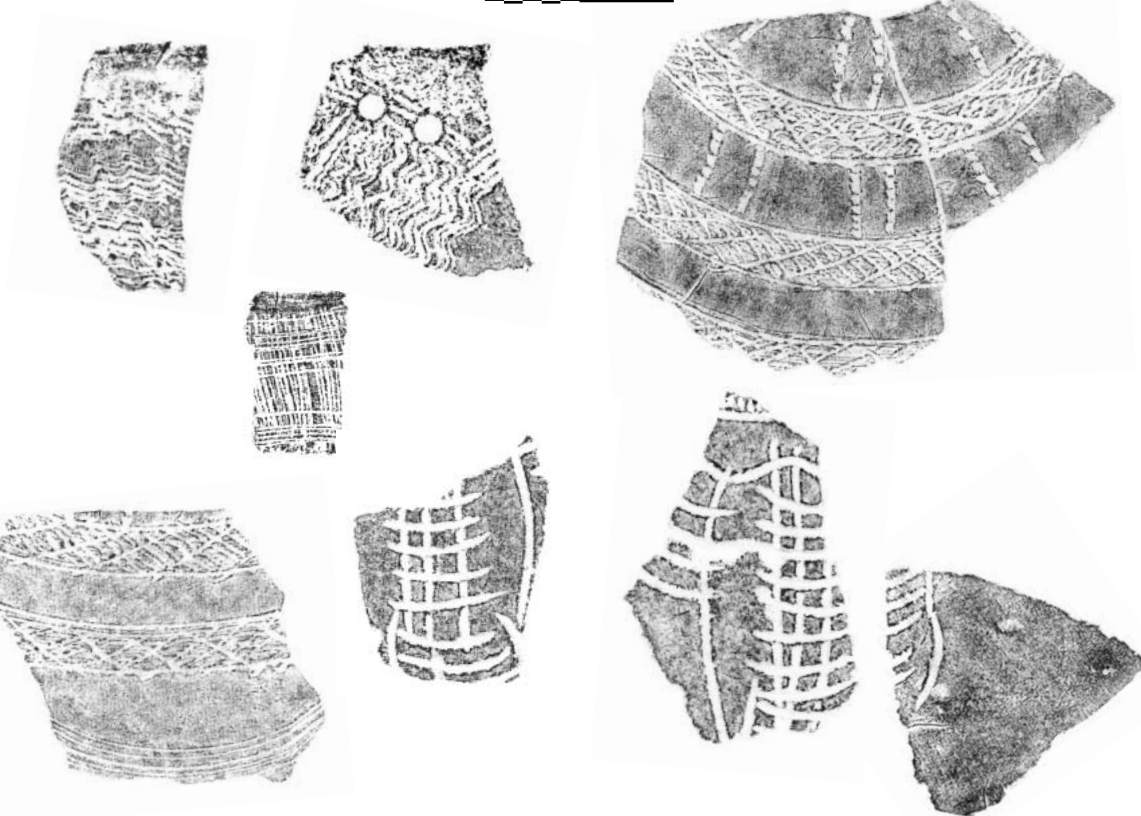
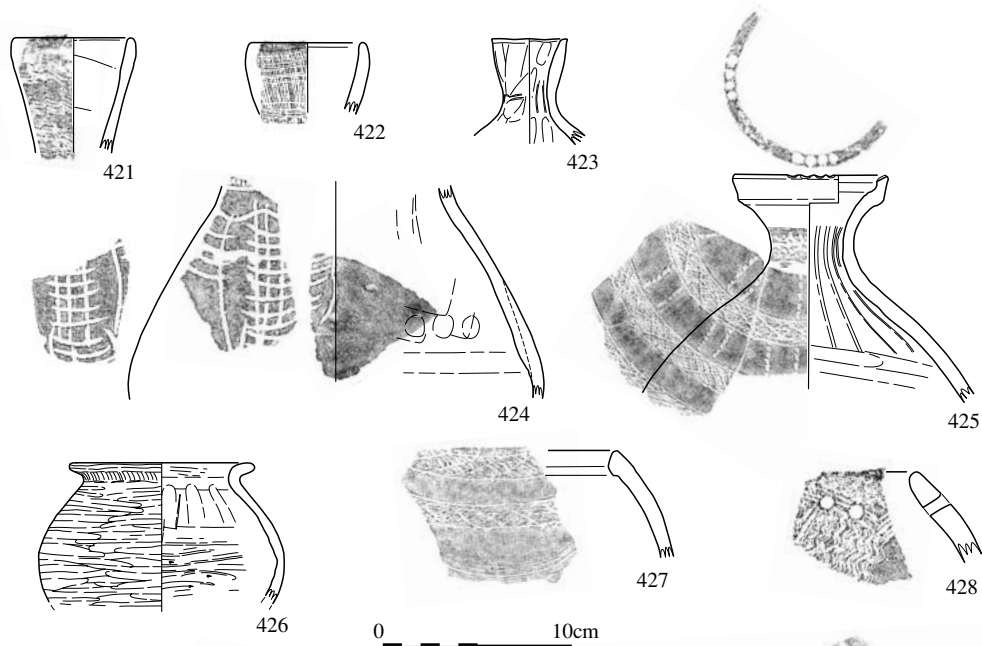
第33图 00C区出土遺物実測図(16) I期:弥生中期後葉



第 34 图 00C 区出土遺物実測図 (17) I 期：弥生中期後葉



第35図 00C区出土遺物実測図(18) I期:弥生中期後葉



以下は各系統の集成である。

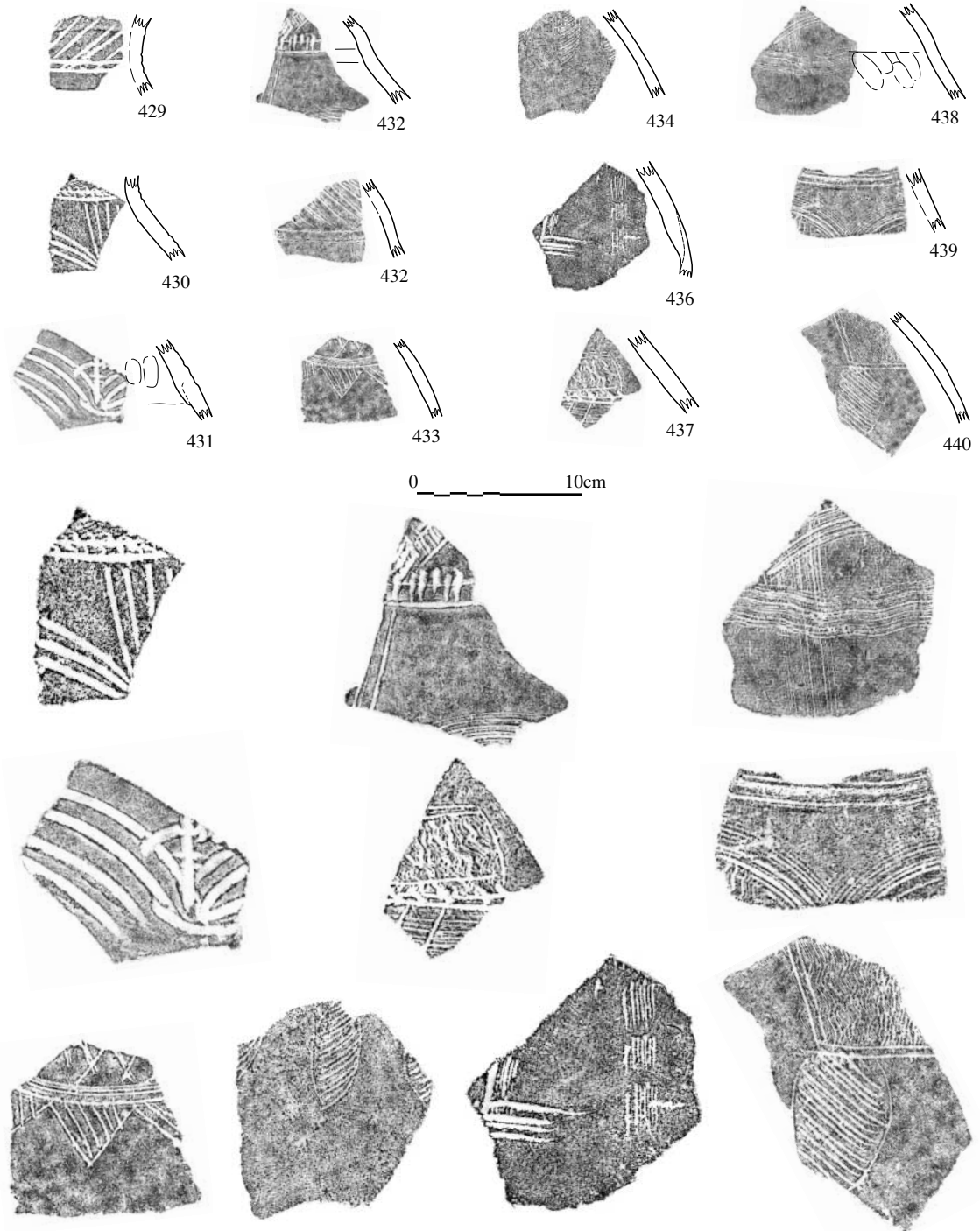
I E系 (第32図)

弥生中期後葉古段階から後葉中段階古相に限定できる。342～344は受口状口縁細頸壺。345～347は口縁部の横ナデが強く、凹線紋系の影響が現れている。

348～362は体部紋様の集成。356・357は磨消線による

連弧紋である。360・361は加工円盤である。363～365は甕。363は口縁端部に部分圧痕、体部上半には横ハケメが施されている。尾張と伊勢の折衷のようだ。366は断続する横ハケメで伊勢湾西岸との関連が考えられる。367は斜位から横位に移行する在来の手法である。

第36図 00C区出土遺物実測図(19) I期:弥生中期後葉



364は体部ナデ仕上げで口縁端部には二枚貝刺突が施されている。類例は甚目寺町大淵遺跡にある。

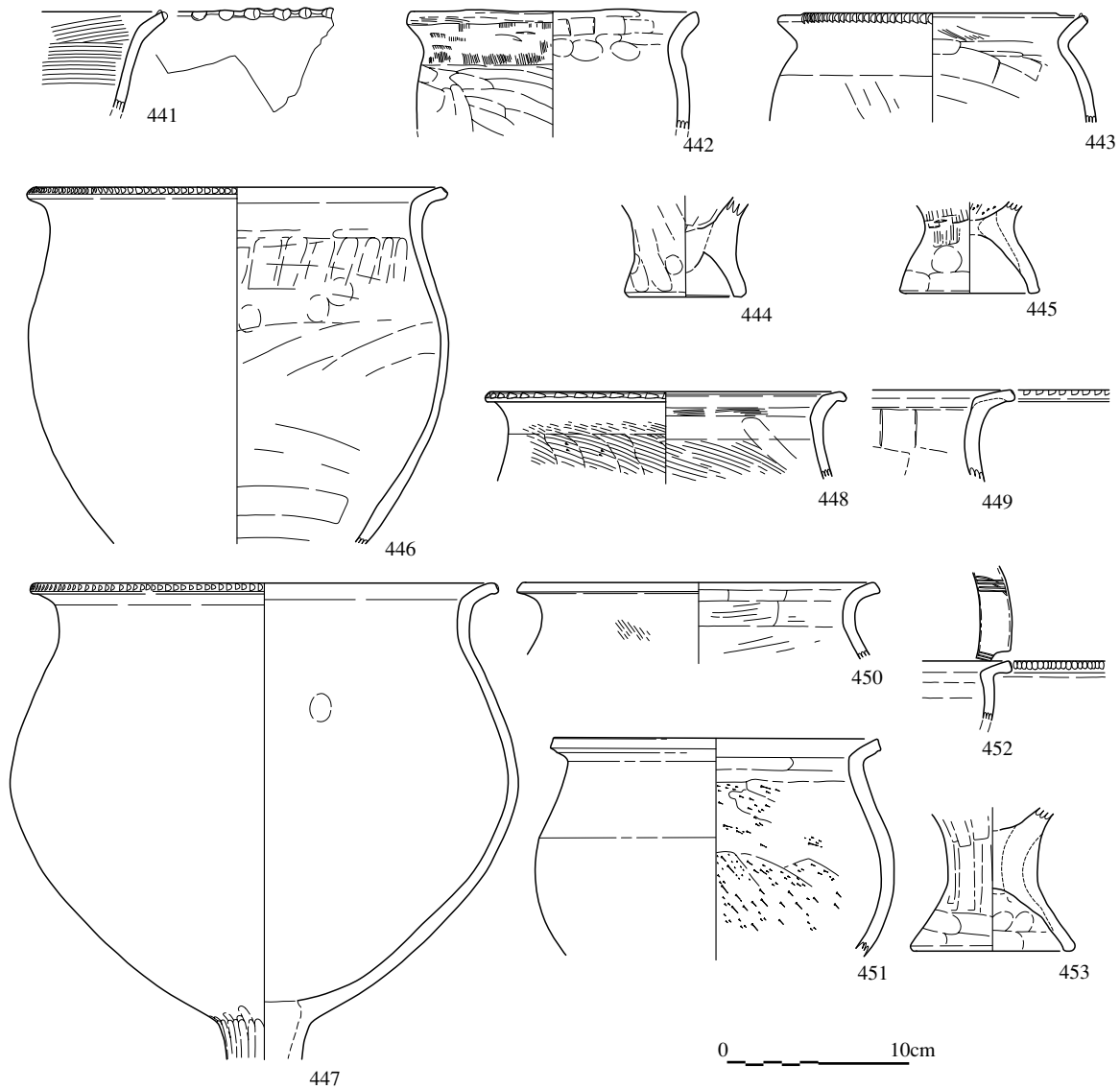
368・369は口縁部を指でつまむ指頭圧痕が特徴的である。濃尾平野南部地域との関連が強い。373は口縁部内面にハケメ圧痕が施されている。弥生中期後葉にはそこそこ散見される資料であるが、まとまって出土したことはこれまで無い。

374はⅡN系の模倣土器で、ハケメ調整が施され、条痕工具には二枚貝が用いられている。

378は脚台状土製品(土製支脚)である。このような上げ底状は弥生中期後葉を遡ることはない。なお、脚台状土製品は台付甕出現後には衰退する土製品である。Ⅳ系(第33図379～396)

382は口縁部外面にクシで羽状刺突紋が施されてい

第37図 00C区出土遺物実測図(20) I期:弥生中期後葉



る。387のタタキは右上がり。388のタタキも右上がりだが、これは底部付近に限られ、上部では反転して左上がりになるはず。

I W系 (第33図 398～403)

398は頸部にしっかりした沈線がめぐる。399は口縁部に沈線、屈曲部には細い沈線とハケメ刻みがめぐる。

II N系 (第33図 404～406)

クシ条痕の甕である。いずれも搬入品であろう。

V系 (第33図 401～404)

401は受口状口縁甕で、口縁上端には部分圧痕、外面にはハケメ波状紋、頸部と口縁部内面にはハケメ刺突紋が施されている。402・403も受口状口縁甕であるが、琵琶湖地方北部のものと区別はつきにくい。

404は口縁部外面に複合鋸齒紋、屈曲部に櫛状工具の

中央を支点にして小さく回転させる相対扇形紋が施されている。琵琶湖地方南部の野洲川下流域産であろう。

III系 (第34図～第37図)

第34図。408は体部に沈線による羽状紋が施されており珍しい。411～414は受口状口縁壺である。口縁部の外傾度は時間の変化に対応する。口縁部上端の圧痕も同様に、弥生中期後葉中段階までは部分圧痕が内側に施され、新段階には外向きに連続して施されるようになる。

415以下は頸部から体部にかけての破片資料である。415は平行線に刺突を加えた連弧紋が特徴的で古い様相である。

第35図は細頸壺と無頸壺。421・422はI系あるいはIV系の影響を受けた口縁部形態である。425は在来の口

縁部形態である。受口状口縁は太頸壺と同様に、やや内傾→直立→外傾→強く外傾、という変化を見せる。424は沈線で構成される懸垂紋が施されている。無頸壺の428は口縁部には沈線による連弧紋、そこからクシによる波状紋が垂下している。

第36図は紋様集成である。沈線紋構成、櫛描紋構成、[沈線紋・櫛描紋] 混合構成がある。

体部の横位区画は、2条沈線→1条沈線・半截管状工具による平行線→櫛描紋、というように変遷し、2条区画は弥生中期中葉新段階に出現する。430は頸部の隆起部上半で、2条沈線に二枚貝刺突紋を加え、3条沈線連弧紋の谷部に縦位直線を加えている。431は連弧紋の谷部を上下から弧線で囲みさらに縦の沈線を加えている。432は415と同一個体の可能性が高い。頸部の隆起部で、2条沈線に刺突紋を重ね、連弧紋の谷部下に垂下紋を加えている。古相を呈する。438は櫛描紋構成で、連弧紋の谷部に八字状に垂下紋を加えている。横位区画は無いが、古相である。

第37図は甕と台付鉢である。441は体部が張らない初期の台付甕であろう。442・443はI E系に類似するが体部はナデ仕上げである。

444は上から充填された粘土が脚部天井に大きくはみ出すもので、I系台付甕初期の特徴をもつ。447は頸部の屈曲が強く体部も張るので新相である。

451は口縁部がナデ仕上げで、体部内面にはケズリが施され、後期の特徴をもつ。弥生後期初頭に下がる可能性が高い。

452・453は台付鉢、もしくは高杯である。

石器 (第38図・第39図)

縄文晩期から弥生中期にかけての資料である。

打製石鏃は11点出土したうち、10点を図示した。3002は黒耀石である。他はチャートと下呂石である。3009はチャート製で大きな瘤を残す。

3011は有孔磨製石鏃で、五角形を呈するが、先端が内湾して尖る。穴は両側穿孔であるが、片側が深い。弥生中期後葉に属すであろう。

3012は溝切りによって切断された扁平片刃石斧。本来は2倍程度の大きさのものであったろう。表裏に溝を切り、パンチを当てて切断したのであろうが、溝の中央からずれて折れている。朝日遺跡・一色青海遺跡に類例がある。

3015は大形の扁平両刃もしくは薄手の両刃石斧の破

片から再生加工中のもの。柱状片刃石斧の未製品か。

3016は両刃石斧の刃部片。

3013は打製石斧。

3014は独鈷石。隆帯付近の幅・厚は大きく違わない。やや古いか？

3017は凹石。平坦面だけでなく側面にも凹部がある。小さな溝状の凹みが集積しているので、剥片製作に関わるものであろう。3018もタタキ石としても使用されているが、平坦部に凹みは無い。

他に、図示していないが、磨製石斧の再生加工に伴う調整剥片、チャートの石核・剥片が出土している。タタキ石も多いが、帰属時期はよくわからない。

B. II期の遺構・遺物 (第40図・第41図)

a. 遺構

遺構は検出できなかったが、SK208下部の状況を見ると存在した可能性はある。挿図は遺構ごとの掲載となっているが、古代の遺物を伴っており、一括性を基準とする単位を表すわけでは無く、便宜的なものである。

b. 遺物

第40図のSK105の454は赤彩の壺で、内湾気味の口縁部上端には太描の櫛描直線紋(擬凹線)がめぐる。頸部の櫛描紋帯を除く外面と口縁部内面が赤彩されている。

455は甕で口縁部が直線的な廻間型の甕である。456は内外面にケズリ痕を残す。内面にはミガキが施されている。

457はハケメの調子から弥生中期後葉に属すと思われる。

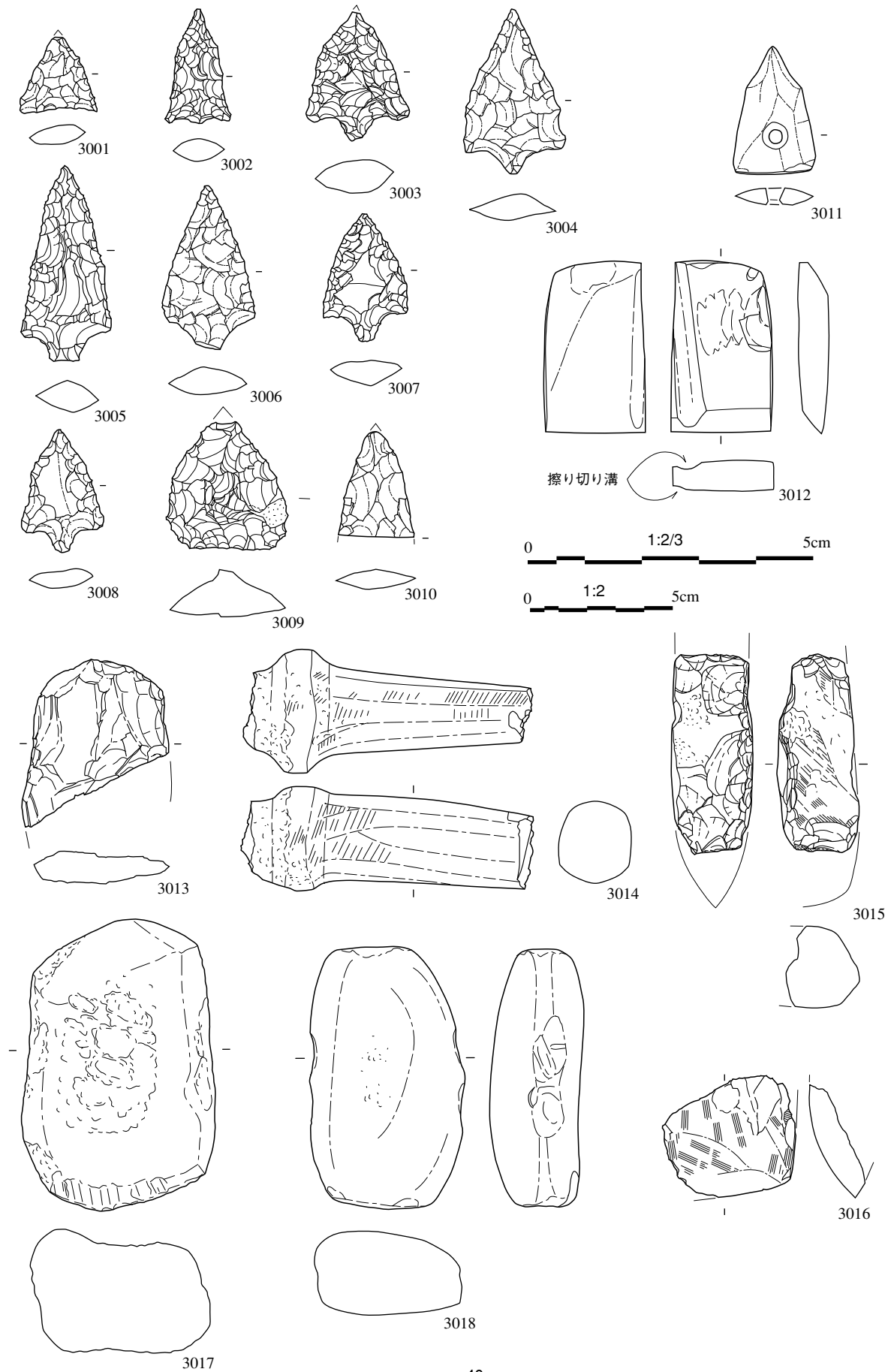
SK106の460は杯部の口縁端部が赤く発色している。断面も内部まで赤いので、赤彩ではなく、赤く発色する(鉄分を多く含む)粘土が付加されているようだ。脚は柱状で高い。濃尾平野の廻間I式前半に対応するのであろう。

SK214の462は粗雑なつくりの直口壺である。雲母を多く含み、扁平な形態なので伊勢産であろうか。

463は受口状口縁の浅鉢(鍋)で、内面にはケズリが施されている。口縁部には強い横ナデが施され、内湾している。底部は面をもたない。名古屋台地から濃尾平野南部にかけてのものに類似する。

第41図のSK98の486は二重口縁壺の退化したもの

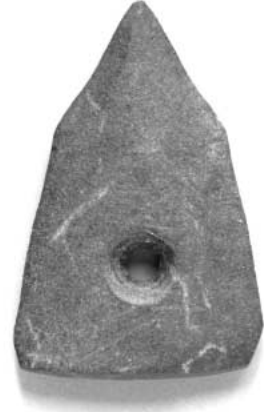
第38図 00C区出土遺物実測図(21) I期:石器



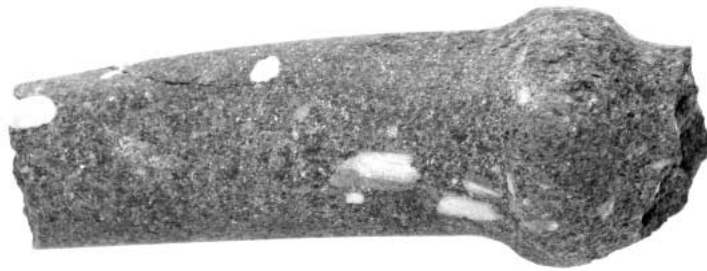
第39图 00C区I期：石器



3012



3011



3014



3017



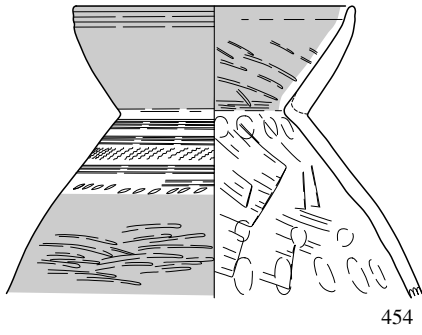
41



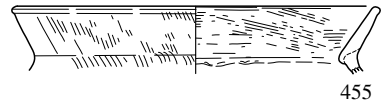
3018

第40図 00C区出土遺物実測図(22) I期:弥生後期終末

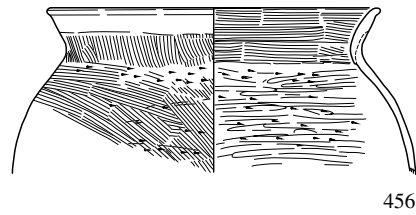
00C-SK105



454

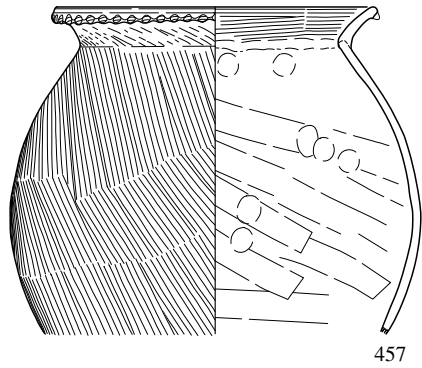


455



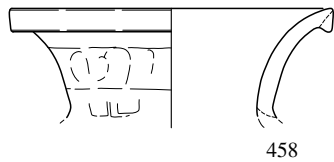
456

0 10cm

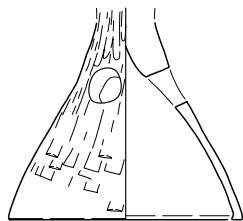


457

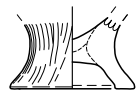
00C-SK106



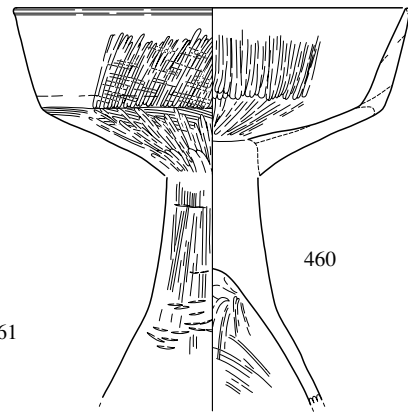
458



459

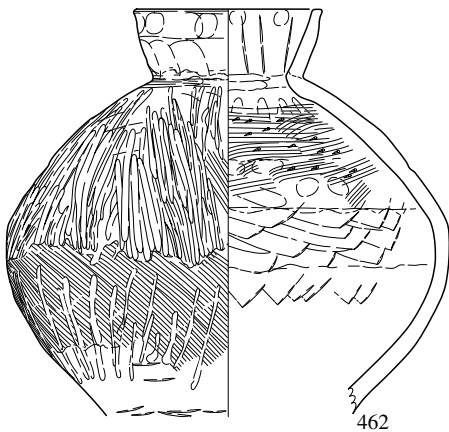


461

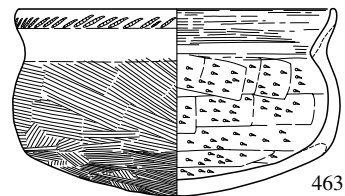


460

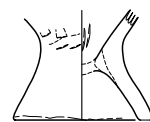
00C-SK214



462



463



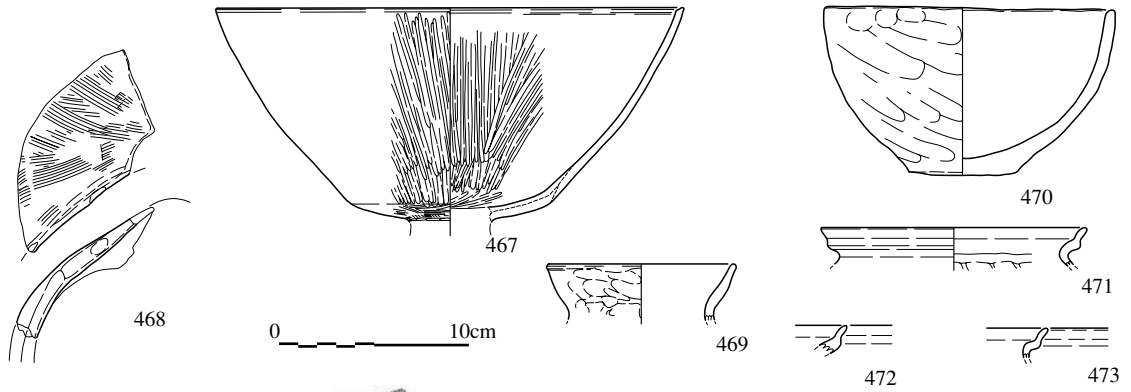
464

第41図 00C区出土遺物実測図(23) I期~II期:弥生後期終末~古墳前期

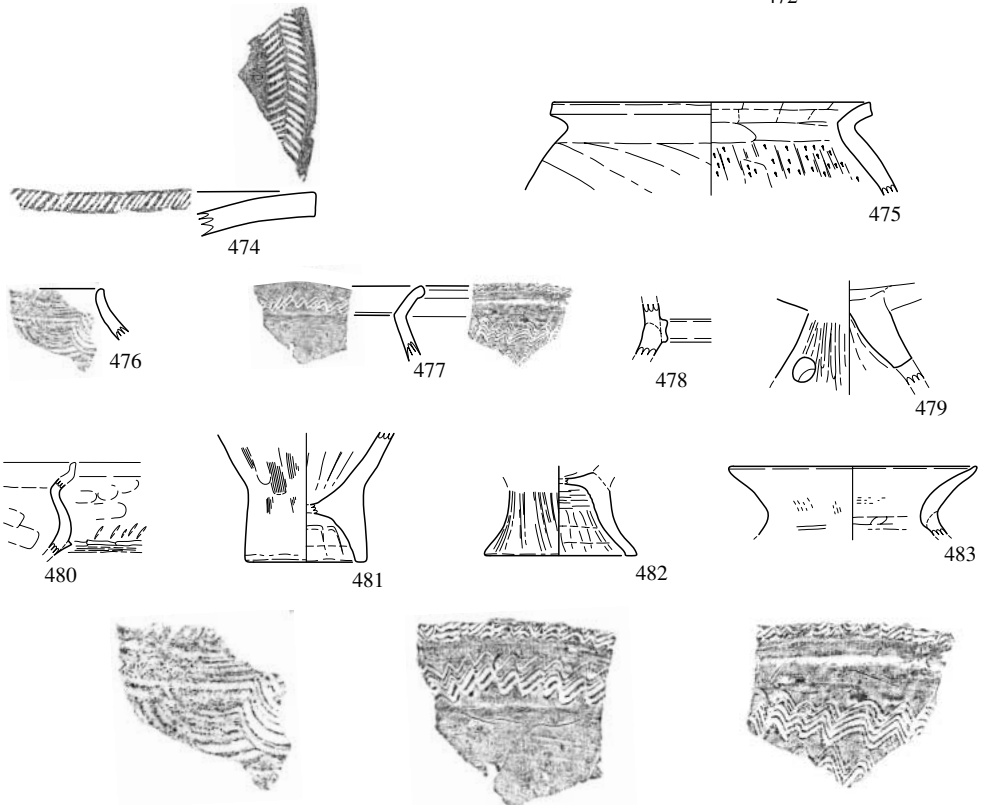
00C-SK98



00C-SK208下



検出



で、松河戸Ⅱ式か。

SK208の468は手焙形土器の覆い部である。471~473はS字状口縁甕C類。469は短頸壺であろう。

検出の474・475は弥生後期初頭の壺と甕である。475は外面はナデ仕上げ、内面は頸部までケズリが施され、口縁部は横ナデされている。

476・477は系譜が不明。478はパレス壺体部のタガ

状の突帯片。

480は手焙形土器の鉢部の破片。下部には突帯状をなす粘土のはみ出しがある。

C. III期の遺構・遺物

a. 遺構

SB03 (第2面: 図版16・24・32)

長軸4.7m、短軸3.3mの竪穴である。北辺にカマドをもっていたようで、突出部から粘土の小塊が出土した。構築材の一部と考えられる。床面はほとんど残っておらず、掘形の検出にとどまった。8世紀に属す。

SB04 (第2面: 図版16・24・32)

東辺にカマドをもつ。プランは第42図のようにはっきりしていた。しかし、床面はほとんど残っておらず、掘形の検出にとどまった。カマドの構造も不明である。8世紀に属す。

SK105 (第2面: 図版16・24)

貝層を伴っていたが、隣接するSK208のものかもしれない。

SK208 (第3面: 図版17・34)

長軸4.4m、短軸3.6mの土坑である。内部には多量の貝殻が廃棄され、貝層を形成していた。

最下部は湧水で確認できなかったが、弥生後期から古墳時代の遺構が重複していた可能性が高い。

b. 遺物

SB03 (第44図)

杯蓋H (484) と杯B (485) が出土している。明らかに混在である。

SB04 (第44図)

487は杯蓋Bである。488は鉢。489は濃尾型長胴甕。490は円筒形の土器で器種不明。被熱により風化している。外面にはケズリ痕がある。1028は製塩土器の杯部。器壁は比較的厚い。8世紀。

SK14 (第44図)

491は杯蓋Bで宝珠つまみが付いている。492は杯A。493は鉢。8世紀前葉。

494・495はやや大形の高杯で、混入か。

SK103 (第45図)

501～503はつまみ蓋。504は提瓶の口縁部で混入か。506は濃尾型長胴甕。8世紀前葉。

SK105 (第45図)

509は土師器の甑である。内面下部は右上がりのケズリである。把手は挿入式である。

SK208 (第45図)

513・514・517は貝層から出土した。また移動式カマド片(518)も貝層の周辺から出土した。7世紀後半代。

その他の遺構や包含層中出土資料を含めて時的には7世紀後半から8世紀前半までの幅におさまり、00B区のように5世紀代まで遡りそうなものは見当たらない。それは00B区が墓地として断続的に利用されてきたことと無関係ではないのだろう。

土製品 (第47図)

遺構から出土したものを図示した。

製塩土器 SK32の1044・1045、SK103の1048～1051が知多式4類で、他は知多式3類である。SK208の2点は大型で知多式3類でも古手か？

太いものと細いもので時期差があるのであれば、SK208以外は混在ということになる。

土錘 1043・1057・1058など円筒形のもの、孔の両端、もしくは一端が同じ方向に欠損している。

紡錘車 1047は断面が算盤玉状を呈する。古代以前に属す可能性もある。

第42図 000C区SB04検出状況

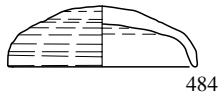


第43図 000C区SK98貝層の広がり

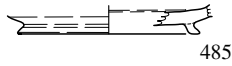


第44图 00C区出土遺物実測図(24) III期: 古代

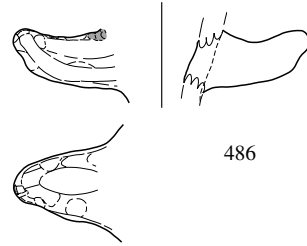
00C-SB03



484

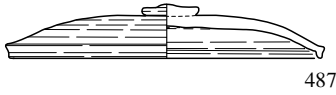


485

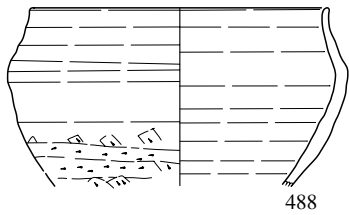


486

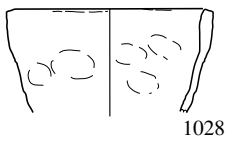
00C-SB04



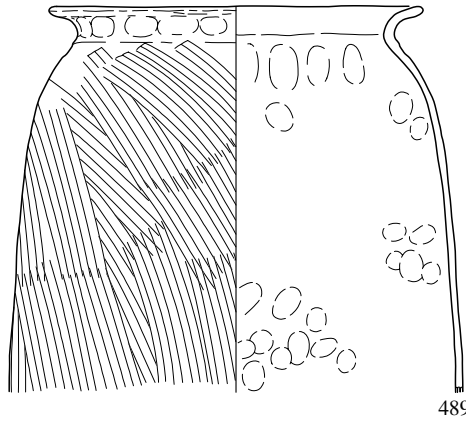
487



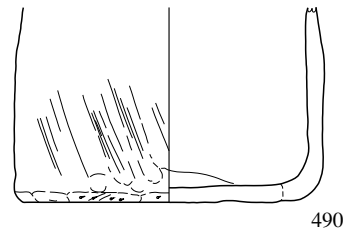
488



1028



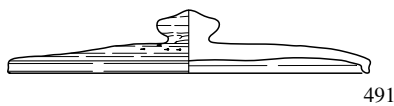
489



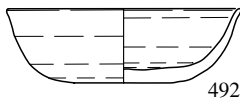
490

00C-SK14

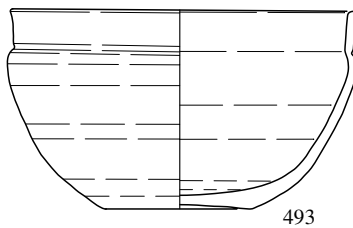
0 10cm



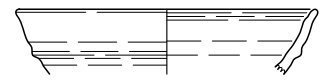
491



492



493



494

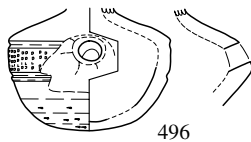


495

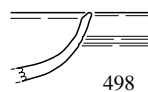
00C-SK51

00C-SK102

00C-SK104



496

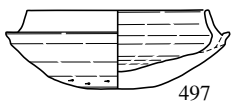


498

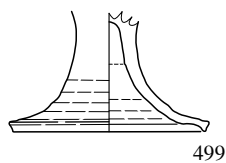


500

00C-SK97



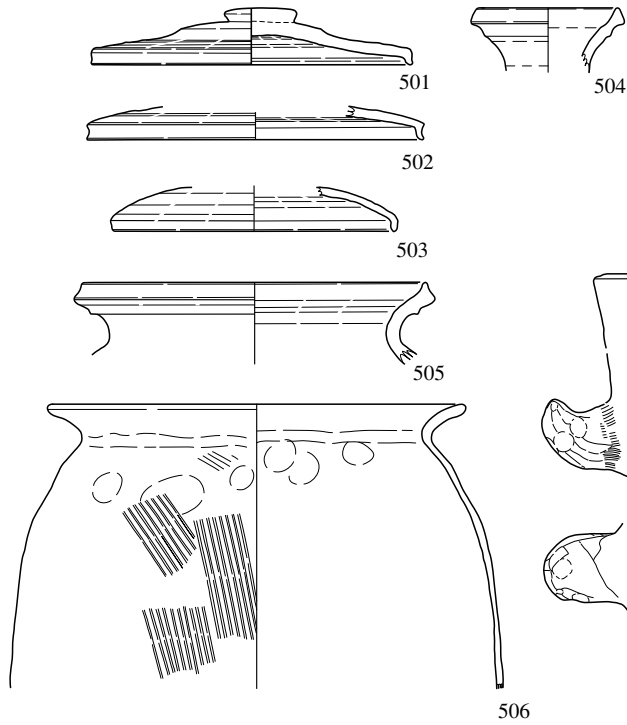
497



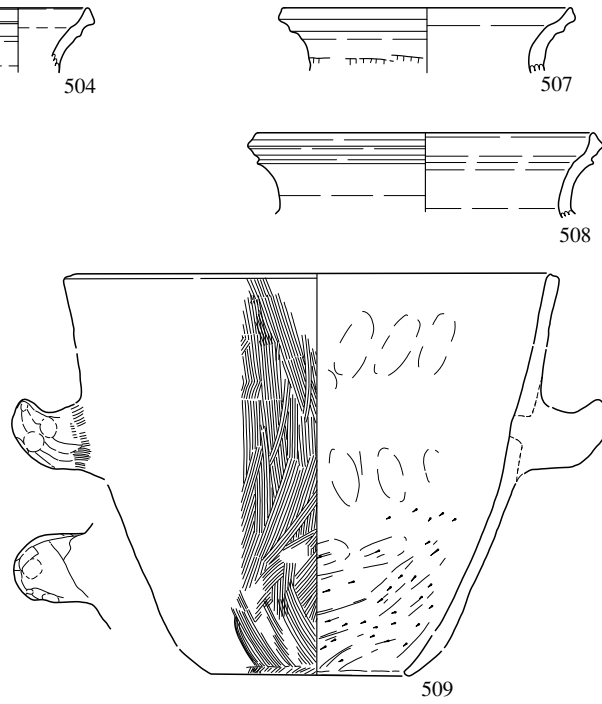
499

第 45 図 00C 区出土遺物実測図 (25) III 期：古代

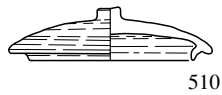
00C-SK103



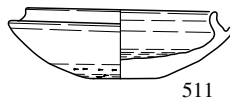
00C-SK105



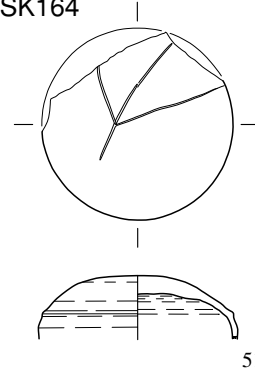
00C-SK153



00C-SK163

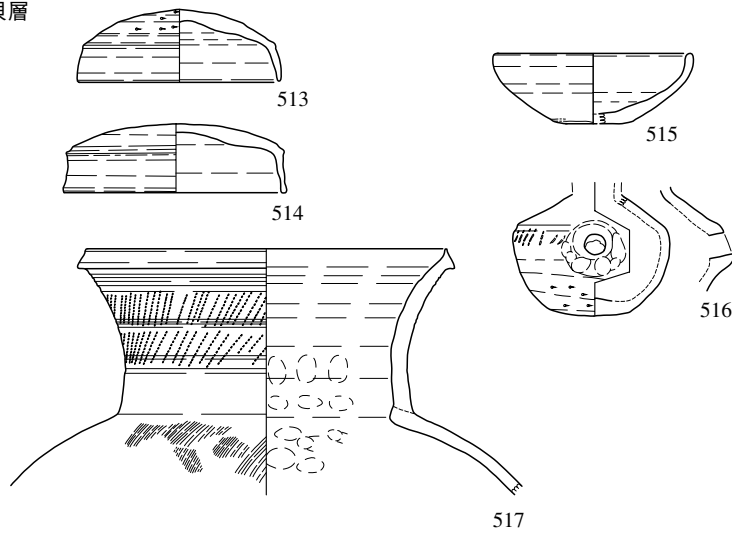


00C-SK164



00C-SK208

貝層



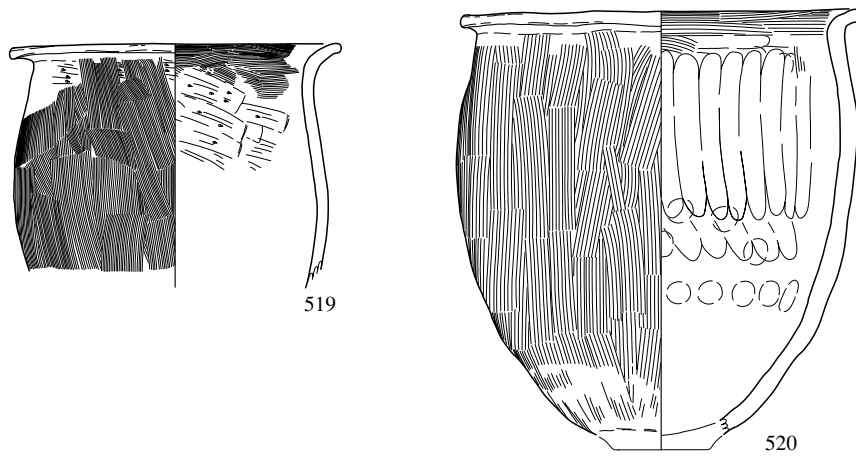
0 10cm



518

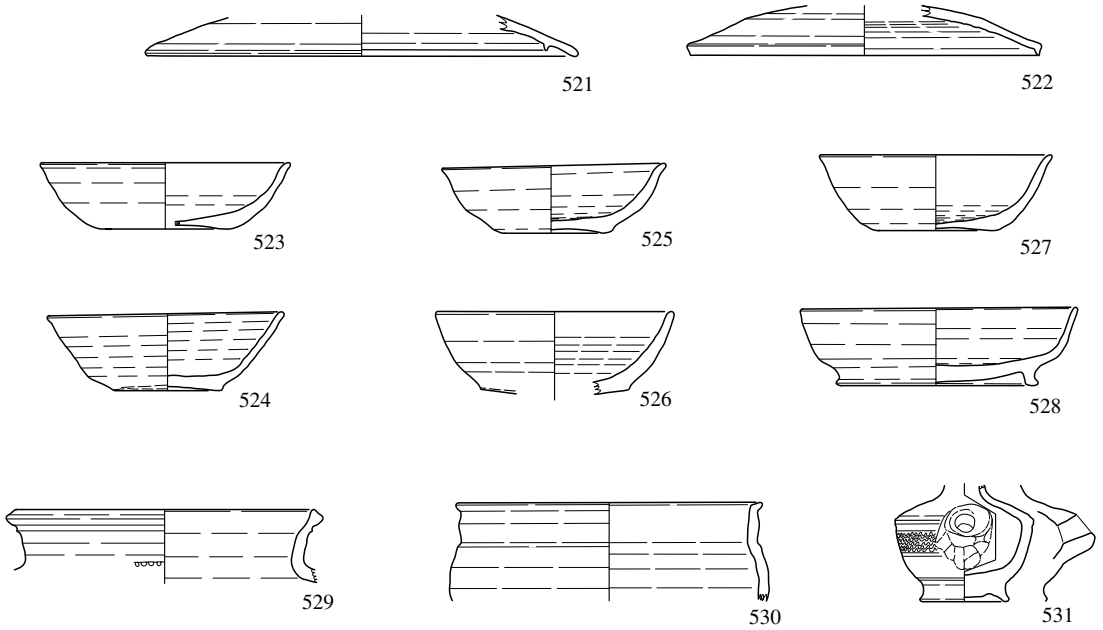
第46図 00C区出土遺物実測図(26) III期:古代

00C-SK209



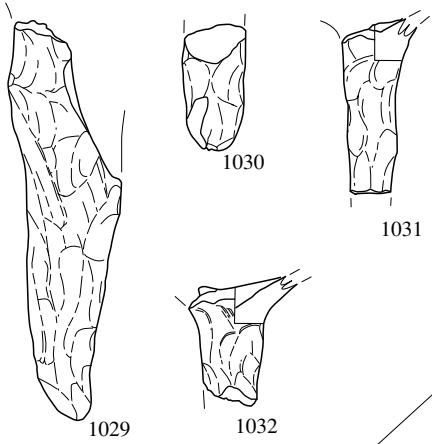
0 10cm

00C-検出

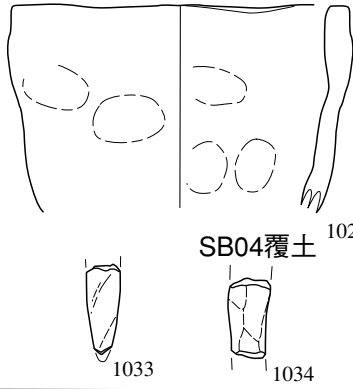


第47図 00C区出土遺物実測図(28) III期: 古代 製塩土器・土製品

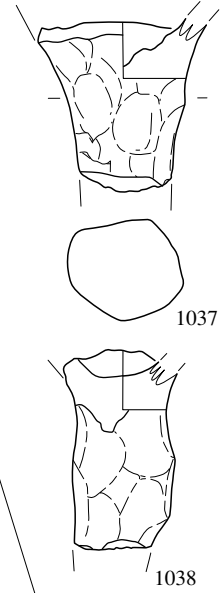
00C-SB03覆土



SB04カマド



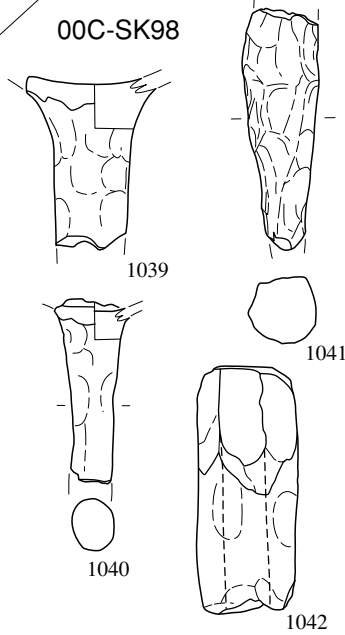
00C-SK208



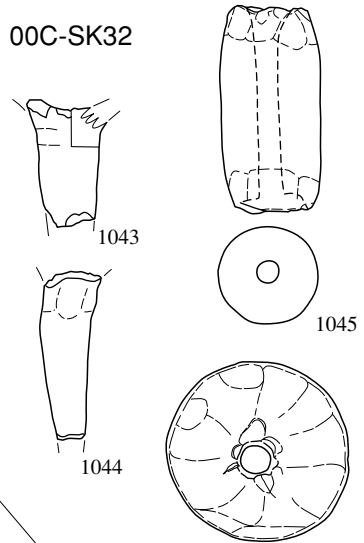
00C-SK164



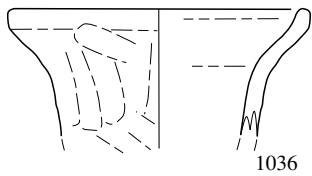
00C-SK98



00C-SK32

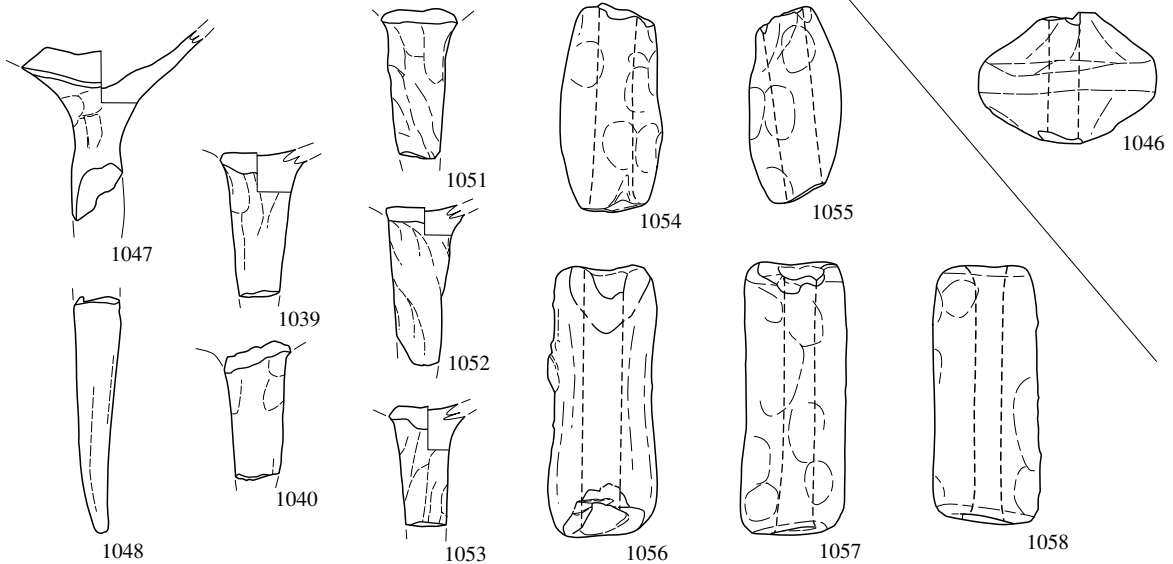


00C-SK41



0 10cm

00C-SK103



D. V期の遺構・遺物

a. 遺構

SA01（第1面：図版15）

SK01～SK06を柱穴とする1間×2間の掘立柱建物である。

SA02（第1面：図版15）

SK30・SK31・SK40・SK41からなる1間×1間の掘立柱建物である。

SD01（第1面：図版15）

調査区東部で検出した、00B区SD01に対応する大溝。SK34の北辺で窯関係の遺物が大量に投棄されていた。

SD02（第1面：図版15・第48・49図）

幅6m、深さ1.5mの、SD01につながる溝。SD01が粘土で護岸される時期には埋没する。一部に貼粘土が認められる。

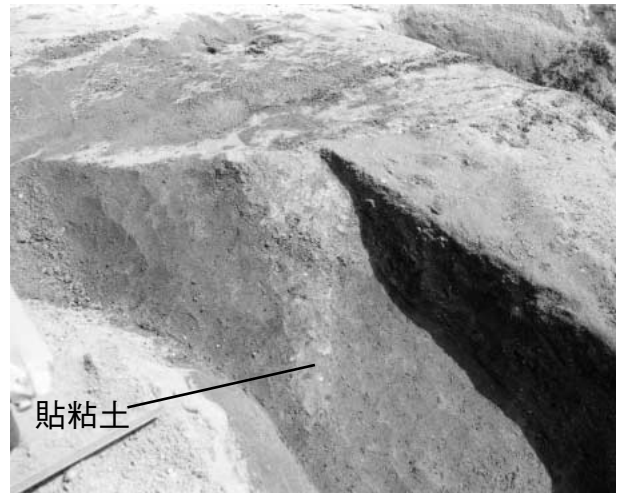
SD03（第1面：図版15）

調査区中央で東に直角に折れ、また北に折れる。性格は不明。

b. 遺物

SD01およびSD02からは、窯関係遺物や陶磁器・土器が出土した。とくにSD02からは窯体を構成する狭間

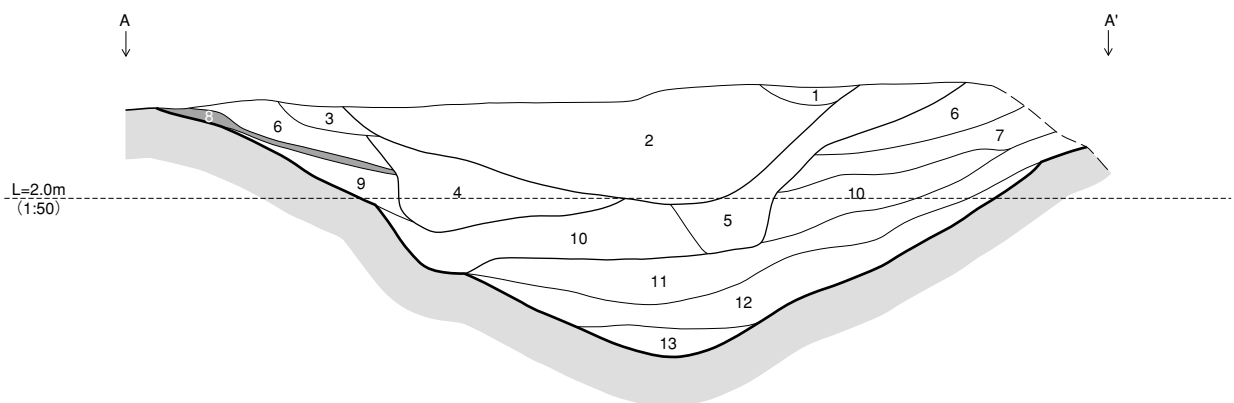
第48図 00C区SD02の貼粘土



と考えられる円柱状のものが出土した。いずれもSD01・SD02が埋め立てられる際に廃棄されたものである。

廃絶時期については第50図の陶磁器・土器からみて18世紀代であろう。

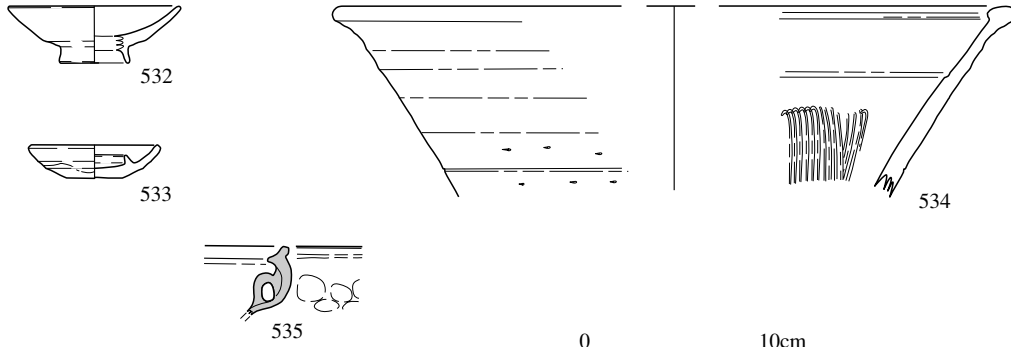
第49図 SD02土層セクション



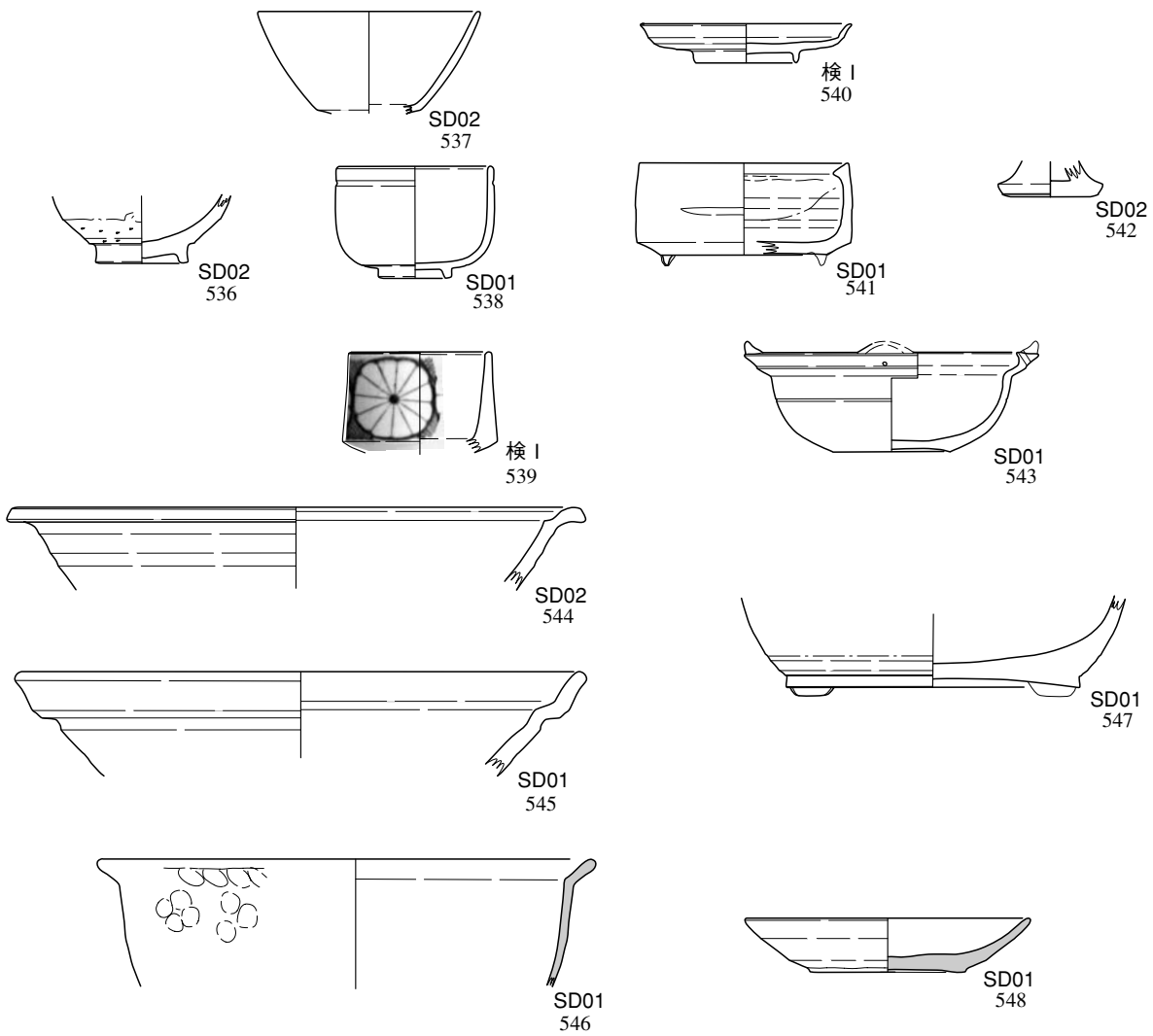
- 1 にぶい黄橙色中粒砂 10YR6/3
- 2 暗褐色中粒砂 7.5YR3/4
- 3 褐灰色中粒砂 10YR5/1
- 4 明黄褐色極粗粒砂 10YR6/6
- 5 暗褐色中粒砂 7.5YR3/4
- 6 暗灰黄色粘質シルトと暗褐色粗粒砂の斑土 2.5Y5/2+7.5YR3/4
- 7 暗灰黄色粘質シルトと暗褐色粗粒砂の斑土 2.5Y5/2+7.5YR3/4
- 8 灰色粘土 10YR6/1
- 9 暗褐色中粒砂 7.5YR3/4
- 10 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 11 灰オリーブ色粘質シルトと灰オリーブ色粗粒砂の斑土 5Y6/2+5Y6/2
- 12 暗褐色粗粒砂 10YR3/3
- 13 灰黄色中砂礫 2.5Y6/2

第 50 図 V 期：近世陶磁器・土器類実測図

00A区



00C区



第51図 00C区SD01出土窯関係資料他

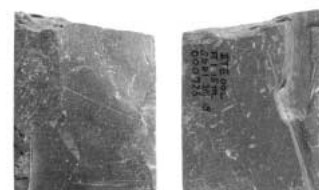
サヤ鉢



ツク

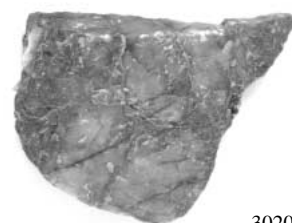


硯



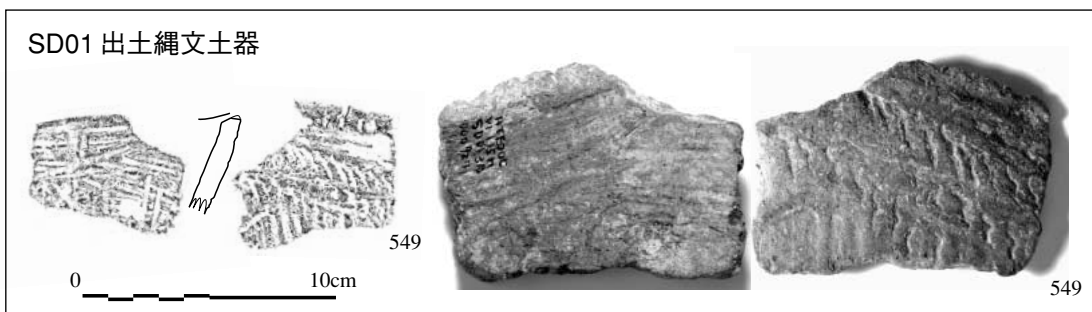
3019

火打石



3020

第52図 その他の遺物



第 53 図 00C 区 SD02 出土窯関係資料

サヤ鉢



分焰柱片



第4章 自然科学分析

(1) 烏帽子遺跡の土坑出土ガラス小玉、ガラス製勾玉の成分分析

小村美代子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

烏帽子遺跡は、知多半島の西岸北部の東海市に位置する。この遺跡からは古墳時代前半期に属すと思われる土坑(00B区SK61)が検出され、土坑内よりガラス小玉、ガラス製勾玉、管玉が出土した。今回このガラス製勾玉、ガラス小玉について分析を行い、成分について検討した。

2. 試料と方法

試料は、ガラス小玉28点、ガラス製勾玉1点である(第2表)。ここでは、これらガラス玉の化学組成やその特徴を検討するために、蛍光X線分析を行った。試料は全て超音波洗浄を行った後測定した。

測定は、セイコー電子工業(株)製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置SEA-2001Lを用いた。なお、定量分析は、標準ガラス試料(BR-B2)を用いたファンダメンタルパラメータ法により行い、酸化物の合計が100%になるように規格化した。

3. 結果

蛍光X線分析による定量分析結果を第2表に示す。分析値は酸化物(%単位)で表した。検出された元素は、主成分元素の酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化ケイ素(SiO_2)、酸化カリウム(K_2O)、酸化カルシウム(CaO)、酸化チタン(TiO_2)、酸化マンガン(MnO)、酸化鉄(Fe_2O_3)、酸化銅(CuO)、酸化亜鉛(ZnO)、酸化スズ(SnO)、酸化鉛(PbO)である。

主要元素では酸化ケイ素(SiO_2)が約55~77%、酸化アルミニウム(Al_2O_3)が約2~32%、酸化カリウム(K_2O)が0~約14%、酸化鉛(PbO)は0~約3%であった。その他ではバリウム(Ba)、アンチモン(Sb)が含まれる試料が見られた。

4. 考察

ここでは、肥塚(1995)による古代ガラスの研究について概略を述べ、ガラス小玉、ガラス製勾玉の化学組成について考察する。

1) ガラス研究の現状

日本ではガラスはほぼ紀元前2世紀頃から流通する。それ以降3世紀頃までに出現するガラスは例外的なものを除くと、鉛珪酸塩ガラスの鉛バリウムガラス(PbO-BaO-SiO_2 system)と鉛ガラス(PbO-SiO_2 system)、アルカリ珪酸塩ガラスのカリガラス($\text{K}_2\text{O-(Al}_2\text{O}_3\text{)-SiO}_2$ system)である。弥生時代から古墳時代へと移行する3世紀後半から4世紀にかけては、鉛珪酸塩ガラスの流通は途絶えて、代わって2種類のソーダ石灰ガラス($\text{Na}_2\text{O-CaO-SiO}_2$ systemと $\text{Na}_2\text{O-Al}_2\text{O}_3\text{-CaO-SiO}_2$ system)が多量に流通するようになる。一方、弥生時代から流通したカリガラスは出土量そのものが少なくなるが、その後も流通を続ける。しかし、6世紀後半から7世紀初頭にはカリガラスの流通は途絶え、代わって鉛ガラスが再び流通を始め、次第にソーダ石灰ガラスも衰退していく。

2) 出土したガラス小玉、ガラス製勾玉の化学組成

鉛ガラスには PbO が約20~40%と多く含まれている。今回分析したガラス小玉、ガラス製勾玉は全体的に PbO が約0~3%含まれていた。これらガラス小玉、ガラス製勾玉は鉛ガラスと比較して PbO が少なく、鉛ガラスの特徴を示していない。

カリガラスは、 $\text{K}_2\text{O-(Al}_2\text{O}_3\text{)-SiO}_2$ systemの比較的単純な組成を持ち、ばらつきも小さいことが特徴である。 K_2O は約18%、 SiO_2 は約75%、 Al_2O_3 は約3%含有している。この3因子をガラス小玉、ガラス製勾玉と比較するとガラス玉は試料2030のガラス小玉と2032のガラス製勾玉を除き、 Al_2O_3 が約14%~32%と多くカリガラスには相当しないものと思われる。試料2030のガラス小玉は K_2O が約6%、 SiO_2 が約77%、 Al_2O_3 が約9%含有しているが、カリガラスと比較すると K_2O が少なく Al_2O_3 が多いのでカリガラスではないと判断した。試料2032のガラス製勾玉は K_2O が約17%、 SiO_2 が約69

%, Al₂O₃が約3%含有しているが、カリガラスと比較するとSiO₂がやや低いのでカリガラスではないと判断した。

ソーダ石灰ガラスは、Al₂O₃が少なくCaOが多いNa₂O-CaO-SiO₂ systemと、Al₂O₃が多くCaOが少ないNa₂O-Al₂O₃-CaO-SiO₂ systemがある。この2因子をガラス小玉、ガラス製勾玉と比較すると、試料2003～2030のガラス小玉は全てAl₂O₃が多くCaOが少ないNa₂O-Al₂O₃-CaO-SiO₂ systemであり、2032のガラス製勾玉はAl₂O₃が少なくCaOが多いNa₂O-CaO-SiO₂ systemに相当するものと思われる。

以上より、試料2003～2030のガラス小玉は全てNa₂O-Al₂O₃-CaO-SiO₂ systemのソーダ石灰ガラス、試料2032のガラス製勾玉はNa₂O-CaO-SiO₂ systemのソーダ石灰ガラスからなると推定される。

引用文献

肥塚 隆保「古代ガラスの材質」(第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編)『古代に挑戦する自然科学』クバプロ、p.94-108。

第2表

ガラス製勾玉・小玉の化学組成(%単位)

試料番号	出土位置	遺物	色調	時代	Na ₂ O	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	NiO	CuO	ZnO	SnO	PbO	合計	種類
2003	SK61	ガラス玉	緑	弥生終末～古墳前半期	0.46	20.64	61.23	0.00	7.37	3.70	1.51	0.13	3.39	0.00	0.00	0.88	0.12	0.19	0.39	100.00	ソーダ石灰ガラス
2004	SK61	ガラス玉	緑	弥生終末～古墳前半期	0.71	18.64	61.86	0.00	7.03	6.22	0.41	0.02	1.88	0.00	0.00	0.59	0.10	0.25	2.28	100.00	ソーダ石灰ガラス
2005	SK61	ガラス玉	緑	弥生終末～古墳前半期	0.68	18.26	63.03	0.00	7.44	4.59	0.59	0.01	1.82	0.00	0.00	0.58	0.03	0.40	2.56	100.00	ソーダ石灰ガラス
2006	SK61	ガラス玉	水色	弥生終末～古墳前半期	0.59	22.18	62.25	0.00	4.71	4.56	2.04	0.00	2.50	0.00	0.01	0.67	0.23	0.03	0.23	100.00	ソーダ石灰ガラス
2007	SK61	ガラス玉	水色	弥生終末～古墳前半期	0.65	15.64	68.01	0.00	7.82	3.83	0.95	0.05	2.10	0.00	0.00	0.44	0.01	0.10	0.40	100.00	ソーダ石灰ガラス
2008	SK61	ガラス玉	青	弥生終末～古墳前半期	0.60	18.08	64.06	0.00	8.11	4.48	1.00	0.26	2.48	0.00	0.00	0.80	0.02	0.00	0.04	100.00	ソーダ石灰ガラス
2009	SK61	ガラス玉	青	弥生終末～古墳前半期	0.31	19.72	57.86	0.00	14.19	3.00	1.68	0.19	1.62	0.00	0.00	0.70	0.13	0.10	0.49	100.00	ソーダ石灰ガラス
2010	SK61	ガラス玉	青	弥生終末～古墳前半期	0.33	19.67	58.60	0.00	6.72	11.33	0.21	0.19	2.15	0.00	0.00	0.10	0.39	0.00	0.30	100.00	ソーダ石灰ガラス
2011	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.87	13.98	69.67	0.00	5.55	6.84	0.13	0.15	2.28	0.09	0.00	0.11	0.01	0.01	0.30	100.00	ソーダ石灰ガラス
2012	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.40	13.87	74.17	0.00	5.65	1.82	0.25	1.81	1.94	0.05	0.00	0.01	0.03	0.00	0.01	100.00	ソーダ石灰ガラス
2013	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	1.07	13.78	68.90	0.00	6.31	7.04	0.10	0.22	2.09	0.05	0.00	0.13	0.02	0.00	0.29	100.00	ソーダ石灰ガラス
2014	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.62	18.76	64.99	0.00	5.32	7.31	0.16	0.21	2.14	0.05	0.00	0.11	0.05	0.02	0.28	100.00	ソーダ石灰ガラス
2015	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.92	24.43	65.76	0.00	0.97	4.66	0.51	0.03	2.33	0.00	0.00	0.07	0.00	0.00	0.32	100.00	ソーダ石灰ガラス
2016	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	1.36	17.95	64.32	0.00	5.65	7.31	0.00	0.21	2.52	0.07	0.00	0.16	0.00	0.02	0.44	100.00	ソーダ石灰ガラス
2017	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	1.40	20.53	66.01	0.00	0.63	7.79	0.57	0.15	2.33	0.04	0.00	0.08	0.12	0.01	0.35	100.00	ソーダ石灰ガラス
2018	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	1.20	16.58	63.76	0.00	6.91	8.56	0.17	0.25	1.98	0.03	0.00	0.12	0.17	0.01	0.25	100.00	ソーダ石灰ガラス
2019	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.86	19.59	64.54	0.00	5.92	6.27	0.08	0.27	1.99	0.02	0.00	0.10	0.04	0.02	0.30	100.00	ソーダ石灰ガラス
2020	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.61	25.38	61.24	0.00	0.57	8.77	0.47	0.04	2.19	0.02	0.00	0.07	0.33	0.01	0.28	100.00	ソーダ石灰ガラス
2021	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.62	27.74	58.28	0.00	3.43	7.18	0.13	0.18	1.87	0.07	0.00	0.12	0.15	0.00	0.25	100.00	ソーダ石灰ガラス
2022	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.67	22.55	61.45	0.00	5.39	7.09	0.20	0.23	1.94	0.00	0.00	0.11	0.14	0.01	0.23	100.00	ソーダ石灰ガラス
2023	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	1.52	16.06	71.46	0.00	0.38	6.69	0.78	0.06	2.58	0.00	0.00	0.09	0.04	0.01	0.33	100.00	ソーダ石灰ガラス
2024	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.32	32.45	55.19	0.00	0.00	9.00	0.37	0.05	1.92	0.00	0.00	0.05	0.40	0.01	0.23	100.00	ソーダ石灰ガラス
2025	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.74	17.65	67.87	0.00	1.33	7.70	0.69	0.02	2.50	0.03	0.00	0.10	0.20	0.02	0.38	100.00	ソーダ石灰ガラス
2026	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	1.06	14.19	68.64	0.00	7.33	6.91	0.07	0.24	1.93	0.05	0.00	0.10	0.01	0.00	0.28	100.00	ソーダ石灰ガラス
2027	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.81	19.84	69.26	0.00	0.40	6.04	0.54	0.10	2.43	0.07	0.00	0.08	0.03	0.02	0.38	100.00	ソーダ石灰ガラス
2028	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.96	28.33	58.78	0.00	4.59	4.98	0.00	0.25	1.69	0.03	0.00	0.10	0.01	0.01	0.26	100.00	ソーダ石灰ガラス
2029	SK61	ガラス玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	1.08	27.75	58.66	0.00	7.95	1.49	0.64	0.00	1.35	0.00	0.00	1.03	0.00	0.00	0.04	100.00	ソーダ石灰ガラス
2030	SK61	ガラス玉	水色	弥生終末～古墳前半期	0.29	9.11	77.48	0.00	6.37	1.47	0.31	2.35	2.53	0.04	0.00	0.01	0.03	0.01	0.00	100.00	ソーダ石灰ガラス
2032	SK61	勾玉	濃青	弥生終末～古墳前半期	0.45	2.28	68.99	0.00	13.61	9.03	0.23	0.38	2.65	0.09	0.00	0.09	0.01	0.00	0.18	98.00	ソーダ石灰ガラス
			平均値		0.76	19.16	64.70	0.00	5.44	6.06	0.51	0.28	2.18	0.03	0.00	0.26	0.10	0.04	0.42		
			最大値		1.52	32.45	77.48	0.00	14.19	11.33	2.04	2.35	3.39	0.09	0.01	1.03	0.40	0.40	2.56		
			最小値		0.29	2.28	55.19	0.00	0.00	1.47	0.00	0.00	1.35	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00		

(2) 烏帽子遺跡の土坑出土赤色物の化学分析

小村美代子(パレオ・ラボ)

1. はじめに

烏帽子遺跡は、知多半島の西岸北部の東海市に位置する。この遺跡からは、古墳時代前半期に属すると思われる土坑(00B区SK61)が検出され、土坑内よりガラス製勾玉・ガラス小玉、管玉が出土した。また、この土坑内土壌は周辺土壌と比べ赤みが強い赤色顔料が用いられたものと考えられる。今回この土壌に含まれる赤色物について分析を行い、赤色物の成分について検討した。

2. 試料及び方法

分析は、①蛍光X線分析、②X線回折分析を行った。試料は土坑内土壌である。土壌には2mm前後の比較的粒度の大きい赤、黒、緑色のチャートや石英なども含まれる。チャートではない、特に赤黒い色味の強い赤色物の小片を直接肉眼で拾い出した。

① 蛍光X線分析

蛍光X線分析では、測定試料は赤色物にセロハンテープを押し付けて採取した。ただし測定試料は、純粋に赤色物のみではなく、表面に付着する土なども含まれている。分析は、セイコー電子工業(株)製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。装置の仕様は、X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電流60 μ A、電圧50kV、試料室内は真空である。

② X線回折分析

X線回折分析では、赤色物に含まれる鉱物の同定を行った。赤色物をセラミック乳鉢で粉碎してパウダー状にした。この粉末をプレパラート上にアルコールで溶きながら乾燥させ試料を作成した。分析装置は、リガク(株)製のX線回折装置MiniFlexである。測定条件は、X線発生部の管球は銅(Cu)、電流15mA、電圧30kV、走査モードは連続、スキャンスピード5.000°/min、サンプリング幅0.020°である。

3. 結果

① 蛍光X線分析

第54図には、土壌から採取した赤色物の蛍光X線ス

ペクトル図を示す。また、第3表には、試料の詳細、検出された元素などを示す。

検出された元素は、鉄、アルミニウム、ケイ素、イオウ、カリウム、カルシウムがある。

なお、ロジウム(Rh)のピークはX線発生部の管球(ロジウムターゲット)に由来するものであり、試料に含まれる元素とは関係がない。また、イオウ(S)はセロハンテープに含まれる元素である。

第3表 赤色物から検出された元素

(元素記号) Al: アルミニウム、Si: ケイ素、S: イオウ、K: カリウム、Ca: カルシウム、Fe: 鉄

遺物	出土位置	検出された元素
土壌	SK61	Al, Si, S, K, Ca, Fe

② X線回折分析

第55図には、土壌から採取した赤色物のX線回折スペクトル図を示す。

狭義のベンガラにあたる赤鉄鉱(hematite)が明瞭に検出された。また、低いピークであるが石英(quartz)が検出された。

第4表 赤色物から検出された鉱物

鉱物名	化学式	和名
hematite	Fe ₂ O ₃	赤鉄鉱
quartz	SiO ₂	石英

4. 考察

一般的に赤色顔料には、ベンガラ(Fe₂O₃)、水銀朱(HgS)、鉛丹(PbO₂)が知られている(市毛1984)。水銀朱は主成分元素が硫化第二水銀からなる辰砂(cinnabar、水銀朱)を磨り潰して作られるものを言う。

ベンガラは狭義には酸化第二鉄(赤鉄鉱、Fe₂O₃)の顔料をさすが、広義には3価の鉄が発色の原因となる化合物の顔料の総称として使われている。ベンガラは原料として天然の赤鉄鉱を用いる場合のほか、沼沢地などに沈積する含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱を用いる場合があり、これを含めればその産出地は全国無数にあることになる(成瀬1998)。ベンガラの中には極めて定形なパイプ状を呈するものがあり、一般にパイプ状ベンガラと呼称されている。このベンガラは中空円筒状で直径約1.2 μ m程度、長さはおおよそ100 μ m以

下である。最近の研究でこのパイプ状ベンガラは、崖端の湧水部や池中に沈殿した、糸状体を形成する鉄細菌の生成物を燃焼した結果得られたものだと分かってきた(岡田 1997)。鉄細菌は水中に溶存する 2 価の鉄を 3 価の鉄とし、これを体の内外に沈積する能力を持つ。ごく普通に観察される鉄細菌で鞘細胞を形成する種類に *Leptothrix* sp. や *Siderococcus* sp. がある。前者は糸状体の幅はほとんど一定で、鞘に鉄酸化物を沈着し、赤褐色の綿状集落を形成する。この沈殿物を乾燥、燃焼すると赤色で、鉄の含有量が極めて高く、遺跡から出土しているパイプ状ベンガラ粒子と同形状の粒子が得られる(岡田 前出)。

今回分析した赤色物は、蛍光 X 線分析で鉄が検出さ

れ、X 線回折では赤鉄鉱(hematite)が明瞭に認められたことから、純度の高いベンガラであることが判明した。同時に検出された石英(quartz)に関しては、土壤に含まれていた石英粒子がベンガラに混入していたため検出されたものと思われる。

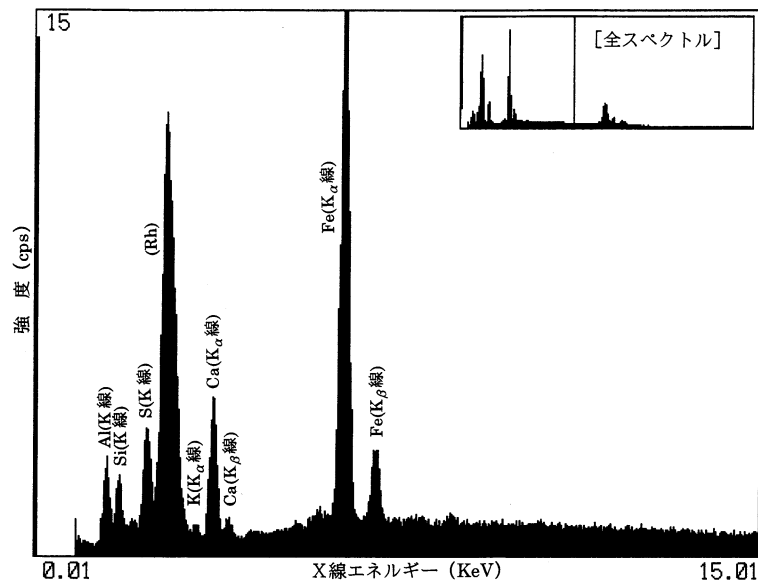
引用文献

- 市毛 勲 1998 『新版 朱の考古学 (考古学選書)』 雄山閣出版、p.42-48。
 成瀬正和 1998 「縄文時代の赤色顔料。—赤彩土器—」『考古学ジャーナル』 438、p.10。
 岡田文男 1997 「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会 第 14 回大会研究発表要旨集』、p.38-39。

第 54 図 赤色物の
蛍光 X 線スペクトル図

[元素記号]

Al: アルミニウム、Si: ケイ素、S: イオウ、
 K: カリウム、Fe: 鉄、Rh: ロジウム
 (X 線管球ターゲットから)

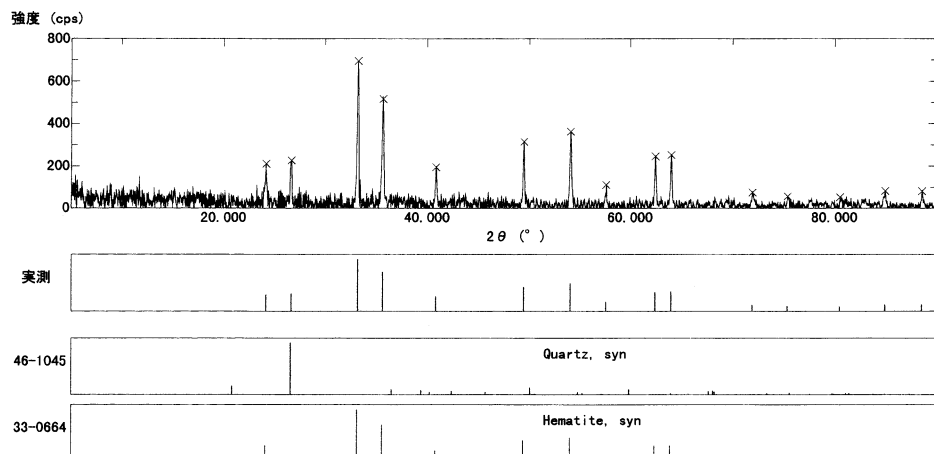


第 55 図 赤色物の
X 線回折スペクトル図

[英名]

Quartz: 石英

Hematite: 赤鉄鉱



(3) 烏帽子遺跡の土坑出土管玉の成分分析

小村美代子(パレオ・ラボ)

1. はじめに

烏帽子遺跡は、知多半島の西岸北部の東海市に位置する。この遺跡では古墳時代前半期に属すると思われる土坑(SK61)が検出され、土坑内よりガラス小玉やガラス製勾玉、管玉が出土した。今回この管玉について分析を行い、成分について検討した。

2. 試料と方法

試料は、管玉6点(第5表)。ここでは、これらガラス玉の化学組成やその特徴を検討するために、蛍光X線分析を行った。

測定は、セイコー電子工業(株)製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置SEA-2001Lを用いた。なお、定量分析は、標準試料にサヌカイトを用いたファンダメンタルパラメータ法により行い、酸化物の合計が100%になるように規格化した。

3. 結果

蛍光X線分析による定量分析結果を第5表に示す。分析値は酸化物(%単位)で表した。検出された元素は、主成分元素の酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マグネシウム

(MgO)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化ケイ素(SiO₂)、酸化リン(P₂O₅)、酸化カリウム(K₂O)、酸化カルシウム(CaO)、酸化チタン(TiO₂)、酸化マンガン(MnO)、酸化鉄(Fe₂O₃)、酸化銅(CuO)、酸化亜鉛(ZnO)、酸化ルビジウム(Rb₂O)、酸化ストロンチウム(SrO)、酸化イットリウム(Y₂O₃)、酸化ジルコニウム(ZrO₂)である。

主要元素では酸化ケイ素(SiO₂)が約71~76%、酸化アルミニウム(Al₂O₃)が約12~17%、酸化ナトリウム(Na₂O)が約3~4%、酸化カルシウム(CaO)が約3%、酸化カリウム(K₂O)が約1~2%であった。

4. 考察

今回の分析では、試料が管玉であり完全非破壊分析が要求されたため、波長分散型蛍光X線装置ではなくエネルギー分散型蛍光X線装置を使用した。エネルギー分散型蛍光X線装置は波長分散型蛍光X線装置に比べ、軽元素の感度が悪く定量性が劣るため、定性的な分析となる。しかし、大まかな化学組成では、管玉は青銅のような特定金属の元素のみを含まず岩石的な組成を示していることから、少なくとも金属ではない。また、肉眼観察よりこの管玉に微小な空隙が見られたこと、全体に淡い緑色をしていること、比較的軟質の岩石と思われることを考慮すると、この管玉は緑色凝灰岩と推定される。

第5表 管玉の化学組成(%単位)

試料番号	出土位置	遺物	色調	時代	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	合計
3036	SK61	管玉	淡緑	弥生終末~古墳前半期	4.07	1.48	12.47	74.78	0.42	1.45	2.97	0.46	0.00	1.77	0.01	0.03	0.00	0.08	0.01	0.01	100.00
3037	SK61	管玉	淡緑	弥生終末~古墳前半期	3.24	0.00	14.20	75.21	0.40	1.58	2.92	0.40	0.01	1.90	0.01	0.01	0.00	0.11	0.01	0.00	100.00
3038	SK61	管玉	淡緑	弥生終末~古墳前半期	3.46	0.00	17.31	71.38	0.74	1.52	3.17	0.34	0.01	1.88	0.01	0.06	0.00	0.10	0.01	0.01	100.00
3039	SK61	管玉	淡緑	弥生終末~古墳前半期	3.52	0.23	15.64	72.55	0.53	1.90	2.57	0.47	0.02	2.44	0.01	0.03	0.00	0.08	0.01	0.01	100.00
3040	SK61	管玉	淡緑	弥生終末~古墳前半期	3.59	0.00	13.12	75.70	0.69	1.69	2.70	0.43	0.01	1.93	0.01	0.02	0.00	0.08	0.01	0.01	100.00
3041	SK61	管玉	淡緑	弥生終末~古墳前半期	3.55	0.00	13.75	73.86	0.62	1.87	3.27	0.55	0.02	2.33	0.01	0.06	0.00	0.10	0.01	0.01	100.00
平均値					3.57	0.29	14.41	73.91	0.57	1.67	2.93	0.44	0.01	2.04	0.01	0.04	0.00	0.09	0.01	0.01	
最大値					4.07	1.48	17.31	75.70	0.74	1.90	3.27	0.55	0.02	2.44	0.01	0.06	0.00	0.11	0.01	0.01	
最小値					3.24	0.00	12.47	71.38	0.40	1.45	2.57	0.34	0.00	1.77	0.01	0.01	0.00	0.08	0.01	0.00	

(4) 烏帽子遺跡の建物跡等出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

当遺跡は東海市高須賀町に所在し、知多丘陵西側の沖積低地の海岸線近くに立地している。ここでは、考古遺物や発掘状況から7～8世紀(飛鳥時代～奈良時代)またはそれ以前と考えられる堅穴状遺構(堅穴建物)や土坑から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

2. 炭化材樹種同定の方法

試料は、破片が多数含まれていたものが殆どであったので、なるべく多くの破片を実体顕微鏡で観察し、異なる形状や横断面の特徴が異なる破片を走査電子顕微鏡で観察した。

同定の手順は、まず炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡下で観察し、分類群のおおよその目安をつけ、次に炭化材の3方向の破断面(横断面・接線断面・放射断面)を走査電子顕微鏡で拡大して材組織の特徴をもとに同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

同定結果を第6表にまとめた。

検討した12試料のすべてから、マツ属複維管束亜属が検出された。殆どの試料は複数から多数の破片が取り上げられていたが、マツ属複維管束亜属以外の分類群が検出されたのは、00A区SK15だけであった。この試料からは複数のマツ属複維管束亜属のほかに、小破片で1～2片ほどのヒノキ科と広葉樹の炭化材が検出された。広葉樹は、細い枝材らしく保存も悪いため分類群は特定できなかったが、髄が不明で管孔配列や放射組織がほとんど単列であることなどから、コナラ属の根材の可能性も考えられる。

同定された樹種の材組織記載

(1)マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 第56図 1a-1c(00A区SK15)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで晩材の量は多く、垂直樹脂道はおもに晩材部にある。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には鋸歯状の肥厚がある。マツ属複維管束亜属のアカマツまたはクロマツであるが、種までは特定できない。

(2)ヒノキ科 *conifer* 第56図 2a-2c(00A区SK15)

非常に微細な針葉樹の破片であった。垂直と水平の樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の仮道管の肥厚は顕著ではない。分野壁孔は小さなヒノキ型が1～2個、放射組織の壁は平滑である。放射組織は5細胞高以下のものが多い。アスナロ(*Thujaopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.)またはヒノキ属(*Chamaecyparis*)の可能性が考えられるが、微破片であり充分な特徴が観察できなかったため、ヒノキ科と同定した。

(3)広葉樹 *broad-leaved tree* 第56図 3a-3c(00A区SK15)

樹芯部の非常に細い広葉樹の材であった。やや大きさの不揃いな管孔が単独で分布している。中心部に髄は認められないが、潰れているためなのか根材であるからなのかは、保存が悪く判断できなかった。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列、横断面では集合状らしき部分も見られたが接線断面で存在は確認できなかった。このような形質から強いて言えば、コナラ属の材の可能性が考えられる。

4. まとめ

7～8世紀またはそれ以前の時期と考えられる、堅穴状遺構(00A区SK15・00B区SK17)や土坑(00A区SK12・00B区SK04・00B区SK12)そして土坑墓(00B区SK13)から採取された12試料のすべてから、マツ属複維管束亜属が検出された。00A区SK15と00B区SK17は、堅穴状遺構で堅穴建物跡と考えられ、その炭化材は建築材や建物内にあった道具類または燃料材などと推測される。特に00A区SK15では、堅穴建物内の四方から炭化材が採取され、そのすべてからマツ属複維管束亜属が検出されたことから推測すると、マツ属複維管束亜属は建築材であった可能性が高いのではないだろうか。

今回の調査では、弥生時代前期の土坑墓や7～8世紀の土坑など、異なる時期の複数の遺構から、マツ属複維管束亜属が優占出土した。このような調査結果は、

今まであまり知られていないのではないだろうか。その理由として、当遺跡の立地環境が考えられる。当遺跡は伊勢湾に面した海岸線沿いの標高3m前後の砂堆上に立地していることから、海岸植生の代表的な森林であるマツ林が多く分布していた可能性が類推される。従って入手が容易で、重硬かつ耐久性に優れた材質から建築材に適しているマツ属複維管束亜属の材が、当遺跡では多く利用されていたのではないだろうか。また、当遺跡周辺は知多半島の付け根に位置し、各時期の様々遺構が出土する遺跡分布の多い地帯であり、特に弥生時代以降の活発な活動拠点であった。このような人間活動に付随して生じる開発地に、マツ属はほかの樹種よりいち早く生育し分布を拡大してゆく特性を持つことから、マツ林が広がっていたことも推測される。

当遺跡から約5km北部に位置するト、メキ遺跡(東海市教育委員会 1988)では、縄文時代晩期～古墳時代後期の堆積物の花粉分析や、弥生時代後期～古墳時代前期の頃と推定される杭群や木製品の樹種同定が報告されている。花粉分析からは、常にマツ属が高率を占め、ア

カガシ亜属・シイ-クリ属・ハンノキ亜属・コナラ亜属を主体として複数種の常緑性と落葉性の広葉樹が検出された。その結果から、種類数の豊富な落葉広葉樹も含めたシイ・カシの優占する照葉樹林があったと推定されている。また、マツ属の高率出現から海岸地帯に多いクロマツ林の存在や、マツを主体とする二次林の形成が指摘されている。杭や木製品の樹種利用を見ると、落葉広葉樹のクヌギが最も多く、そのほかにマツ、アカガシ亜属・ツバキなどの常緑広葉樹、ハンノキ・コナラなどの落葉広葉樹など、様々な樹種が使われており花粉分析で出土した樹種構成と類似性が高い。

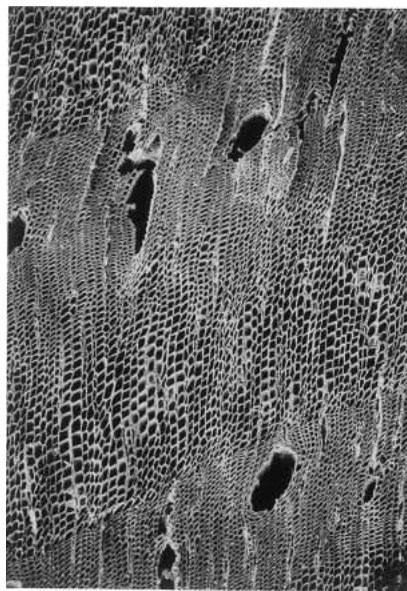
今回の当遺跡の炭化材調査では、ほとんどがマツ属複維管束亜属であり、当地域一帯にはマツが多く生育しており、その木材の利用度も高かったことが確認されたのではないだろうか。

引用文献

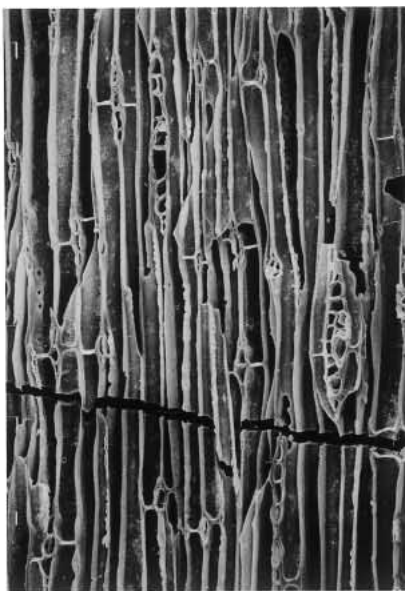
東海市教育委員会 1988 『ト、メキ遺跡』。

第6表 烏帽子遺跡出土炭化材の樹種同定結果

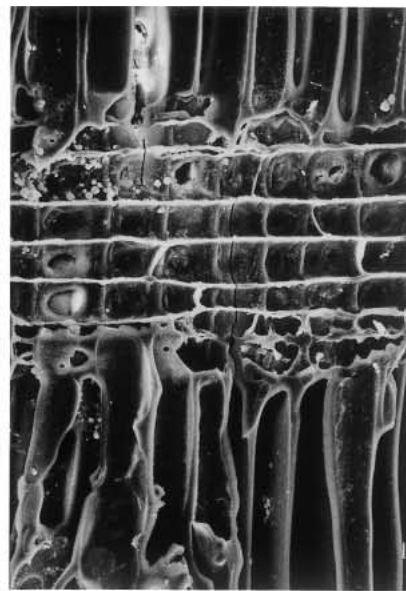
地区	出土遺構	日付け	樹種	備考	時期と遺構
00A区	ⅦJ3i SK15 南西部	000509	マツ属複維管束亜属	¹⁴ C試料(PLD—937)に4破片使用	7～8世紀以前
00A区	ⅦJ3i SK15 南西部	000510	マツ属複維管束亜属		堅穴状遺構(堅穴建物)
00A区	ⅦJ3i SK15 北西部	000508	マツ属複維管束亜属	¹⁴ C試料(PLD—938)に6破片使用	
00A区	ⅦJ3i SK15 北西部	000509	マツ属複維管束亜属 ヒノキ科 広葉樹	根材か?	
00A区	ⅦJ3i SK15 南東部	000508	マツ属複維管束亜属		
00A区	ⅦJ3i SK15 北東部	000509	マツ属複維管束亜属	¹⁴ C試料(PLD—939)に小破片多数使用	
00A区	ⅦJ3h SK12	000508	マツ属複維管束亜属	¹⁴ C試料(PLD—940)に5破片すべて使用	7～8世紀以前 土坑
00B区	ⅥJ19d SK04	000614	マツ属複維管束亜属		7～8世紀 土坑
00B区	ⅥJ18b SK13 No.52	000606	マツ属複維管束亜属		弥生時代前期 土坑墓
00B区	ⅥJ18d SK17	000608	マツ属複維管束亜属	¹⁴ C試料(PLD—942)に10破片すべて使用	7～8世紀? 堅穴状遺構(堅穴建物)
00B区	ⅥJ19b SK12	000605	マツ属複維管束亜属		7～8世紀? 土坑
00B区	ⅥJ19d SK04	000607	マツ属複維管束亜属		7～8世紀 土坑



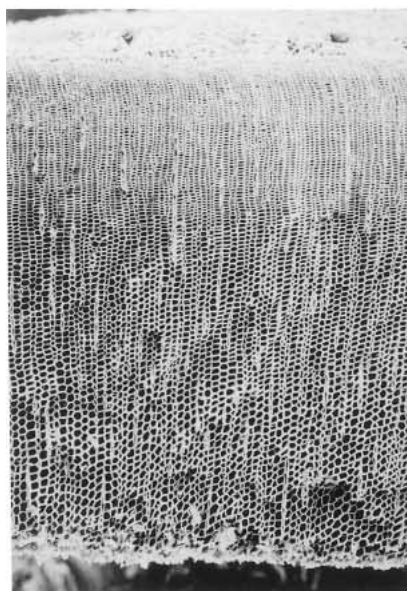
1a マツ属複維管束亜属 (横断面)
VII J3i SK15 bar : 0.5mm



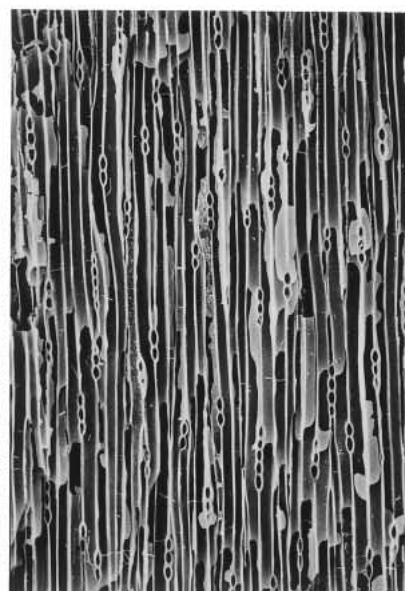
1b マツ属複維管束亜属 (接線断面)
VII J3i SK15 bar : 0.1mm



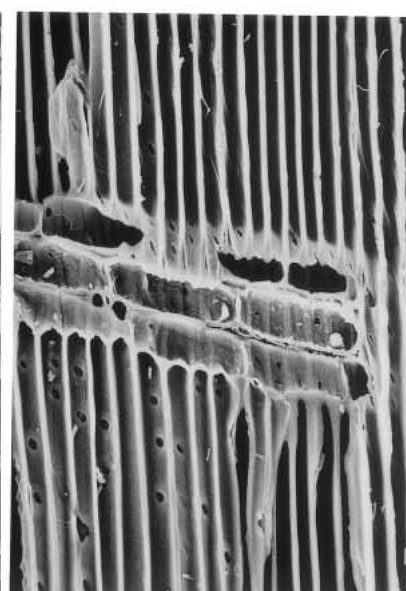
1c マツ属複維管束亜属 (放射断面)
VII J3i SK15 bar : 0.1mm



2a ヒノキ科 (横断面)
VII J3i SK15 bar : 0.5mm



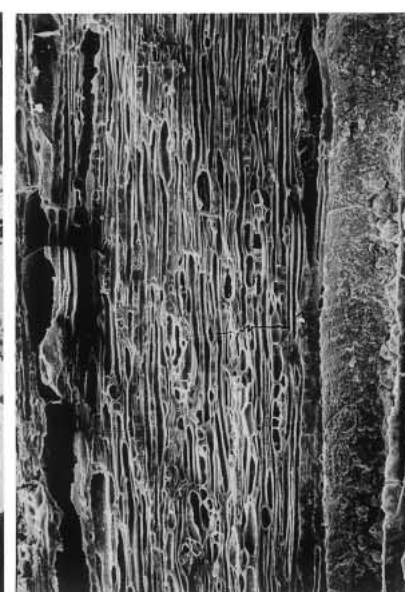
2b ヒノキ科 (接線断面)
VII J3i SK15 bar : 0.1mm



2c ヒノキ科 (放射断面)
VII J3i SK15 bar : 0.05mm



3a 広葉樹 (横断面)
VII J3i SK15 bar : 1.0mm



3b 広葉樹 (接線断面)
VII J3i SK15 bar : 0.5mm



3c 広葉樹 (放射断面)
VII J3i SK15 bar : 0.5mm

(5) 烏帽子遺跡出土貝類の同定

黒澤 一男(パレオ・ラボ)

1. はじめに

烏帽子遺跡の発掘調査において多数の貝殻が出土した。それらの貝類について分類・同定を行なった。その全体の出土動物リストを第7表に示し、以下に貝類について説明する。

2. 貝類

今回分析した試料は5,122点であり、その内容を第8表に示した。ハマグリが最も多く出土し、ウミニナ、フトヘナタリ、ヤマトシジミ、マガキとイボウミニナが次いで出土する特徴を持つ。以下に主要な分類群について説明する。なお、殻長や殻高のデータは、それぞれの試料で任意に選び出し、計測した結果である。また、個体数については、巻貝は芯が3巻以上残存する個体を、二枚貝は殻頂の残存する個体をカウントした。クボガイ

クボガイは00C区SK208で1個体のみ出土している。

クボガイは北海道南部以南に分布し、潮間帯下部の礫地に生息している。

キサゴ

キサゴは00C区SK208で4個体のみ出土している。

キサゴは北海道南部以南に分布し、潮下帯の砂底に生息している。

サザエ

サザエは00C区SK208で2個体のみ出土している。その殻高値は6cm程度である。

サザエはほぼ日本周辺の沿岸域に分布し、潮間帯から水深約40mの岩礁域に生息している。また、サザエの殻表にはトゲのある個体とトゲのない個体が存在し、波が強い外洋環境で生息すると前者、波の静かな内湾のような環境で育ったものが後者の形態を持つ。本遺跡から出土するサザエにはトゲが見られないことから、内湾から採取されたものである。

オオタニシ・マルタニシ

オオタニシは8個体、マルタニシは2個体が00C区SK208より出土している。

オオタニシは本州から九州に分布し、おもに池、沼、川に生息している。マルタニシは本州から九州、沖縄

列島に分布し、沼や田に生息している。

フトヘナタリ

フトヘナタリは全体の14.8%を占め、ハマグリ、ウミニナに次いで多く出土している。00C区SK98においては最も多く出土する貝類であり、全体の34.7%を占める。これらすべての個体は殻頂部が欠けている。個体残存部の殻高値は2~3cm程度である。

フトヘナタリは東北以南に分布し、内湾泥底のアシ原に群生している。

ウミニナ

ウミニナはハマグリに次いで本遺跡から多く出土し、全体の22.9%を占める。その中で00C区SK208において最も多く出土する貝類であり、その割合は全体の35.0%を占める。その殻高値は2~3cm程度である。

ウミニナは北海道南部以南の日本各地に分布し、内湾の干潟に群生している。

イボウミニナ

イボウミニナは全体の8.8%を占め、00C区SK98で13.5%と高い割合となる。その殻高値は2~3.5cm程度である。

イボウミニナは北海道南部以南の日本各地に分布し、内湾の泥底に群生している。

ツメタガイ

ツメタガイは全体の1.4%を占める。その殻高値は1.7~3.7cm程度である。

ツメタガイは北海道南部以南に分布し、内湾の潮間帯から水深50mの細砂底に生息している。

アカニシ

アカニシは全体の0.7%を占める。その殻高値は最大で13cm程度である。またこれらの殻は壊れているものが多く、軟体部を取り出す際に壊されたものと考えられる。

アカニシは北海道南部以南に分布し、水深30m以内の砂泥底に生息している。

イボニシ

イボニシは00C区SK208で1個体のみ出土している。

イボニシは北海道南部以南に分布し、潮下帯中部から下部の岩礁に生息している。

サルボウガイ

サルボウガイは全体の1.5%を占める。その殻高値は3cm程度である。

サルボウガイは、東京湾以南の潮間帯、亜潮間帯の

砂泥底に生息している。

ハイガイ

ハイガイは00C区SK208でのみ3個体出土している。

ハイガイは、三河湾、瀬戸内海、有明海などの潮間帯から水深約10mの泥底に浅く潜って生息している。

イタボガキ

イタボガキは全体の0.6%を占め、00C区SK208では全体の1.0%を占める。その殻高値は10cm前後である。

イタボガキは、房総半島以南に分布し、潮間帯から水深約20mの砂泥底にある小石や岩に付着して生息している。

マガキ

マガキは全体の9.7%を占め、00C区SK15において全体の14.2%を占める。その殻高値は4.5～6.5cm前後である。

マガキは、日本全国に分布し、潮間帯の岩礁に固着するか、砂礫底に密集してカキ礁をつくり生息している。

シオフキガイ

シオフキガイは全体の0.6%を占める。その殻高値は3～4cm前後である。

シオフキガイは、房総半島以南に分布し、潮間帯から水深20mの砂泥底に生息している。

ヤマトシジミ

ヤマトシジミは13.6%を占め、本遺跡では比較的多く出土する。また、00C区SK15において最も出土する貝類であり、全体の46.8%を占める。その殻長値は、1～4cm程度で、2.5cm前後がもっとも多く出土している。

ヤマトシジミは、日本全国の海水の影響を受ける河口域（汽水域）の砂中に生息している。ハマグリやアサリと同様に採取が容易であり、一般的な食用貝類のひとつである。

カガミガイ

カガミガイは00C区SK208からのみ3個体出土している。

カガミガイは、北海道南部以南に分布し、潮間帯から水深60mの細砂底に生息している。

アサリ

アサリは00C区SK208でのみ6個体のみ出土している、その殻高値は3～3.5cm程度である。

アサリは、日本周辺の潮間帯から水深約10mの砂礫泥底に生息し、比較的容易に採取することができ、一般的な食用の貝類のひとつである。

ハマグリ

ハマグリは本遺跡から出土した貝類の中でもっとも多く、全体の24.5%を占める。それらの殻長値は、2.5～7.5cm程度で、もっとも多いのは約3.5～5cmの個体である。

ハマグリは、日本周辺の沿岸域に広く分布し、潮間帯から水深20m前後の砂泥底に生息する。干潟などから採取できることから多くの遺跡で比較的多く産出し、本遺跡においても同様に多く産出する。これらもシジミやアサリ同様に一般的な食用貝類のひとつである。

オキシジミ

オキシジミは00C区SK208から1個体のみ出土している。

オキシジミは、房総半島以南に分布し、潮間帯から水深20mの砂泥底に生息している。

3. おわりに

鳥帽子遺跡の3土坑（00C区SK15・00C区SK98・00C区SK208）から出土した貝類について同定をおこなった結果を以下にまとめる。

全試料を見ると、ハマグリ、ウミニナを主体とし、フトヘナタリ、ヤマトシジミ、カキ、イボウミニナなどが多く出土し、内湾や干潟など近隣で採取できる貝類がほとんどである。このことから多くの貝類は伊勢湾から採取していたと考えられる。

土坑別に見ると、構成する種類はほとんど同じであるが、主体となる種類がそれぞれ異なり、00C区SK208ではウミニナとハマグリ、00C区SK98ではフトヘナタリが、00C区SK15ではヤマトシジミとハマグリがそれぞれ主体となる。このような違いは何らかの現象を示しているものと考えられ、その一つとしてそれらを採取した季節（または時期）の違いをあらわしている可能性が考えられる。

中には少量ではあるが、比較的大型のアカニシが確認される。これらアカニシは他の巻貝類と異なり、ほとんどの殻が破損している。このことからおそらく茹でて食べたのではなく、生食したと考えられ、逆にウミニナやフトヘナタリなどは茹でて食したと考えられる。

腹足綱	Class GASTROPODA
前鰓亜綱	Subclass PROSOBRANCHIA
原始腹足目	Order ARCHAEOGASTROPODA
ニシキウズガイ科	Family Trochidae
クボガイ	<i>Chlorostoma turbinatum</i> (Tapparone-Canefri)
キサゴ	<i>Umbonium costatum</i> (Kiener)
リュウテンサザエ科	Family Turbinidae
サザエ	<i>Batillus cornutus</i> (Lightfoot)
中腹足目	Order MESOGASTROPODA
タニシ科	Family Vivipariidae
オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i> (Martens)
マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (Martens)
ウミニナ科	Family Potamididae
フトヘナタリ	<i>Cerithidae rhizophorarum</i> A.Adams
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i> (Lischke)
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i> (Bruguere)
タマガイ科	Family Naticidae
ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i> (Roeding)
アキガイ科	Family Muricidae
アカニシ	<i>Rapana venosa</i> (Valenciennes)
イボニシ	<i>Reishia clavigena</i> (Kuster)
イトカケガイ科	Family Epitoniidae
属・種不明	Epitoniidae gen. et sp. indet.
斧足綱	Class PELECYPODA
糸鰓亜綱	Subclass FILIBRANCHIA
真多歯目	Order EUTAXODONTA
フネガイ科	Family Arcidae
サルボウガイ	<i>Scapharca subcrenata</i> (Lischke)
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)
イタボガキ科	Family Ostreidae
イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i> Lischke
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG)
弁鰓亜綱	Subclass EULAMELLIBRANCHIA
異歯目	Order HETERODONTA
バカガイ科	Family Mactridae
シオフキガイ	<i>Mactra quadrangularis</i> Deshayes
シジミ科	Family Corbiculidae
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> PRIME
マルスダレガイ科	Family Veneridae
カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i> (Reeve)
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i> (A.Adams et Reeve)
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roding)
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)

第7表 出土貝類種名表

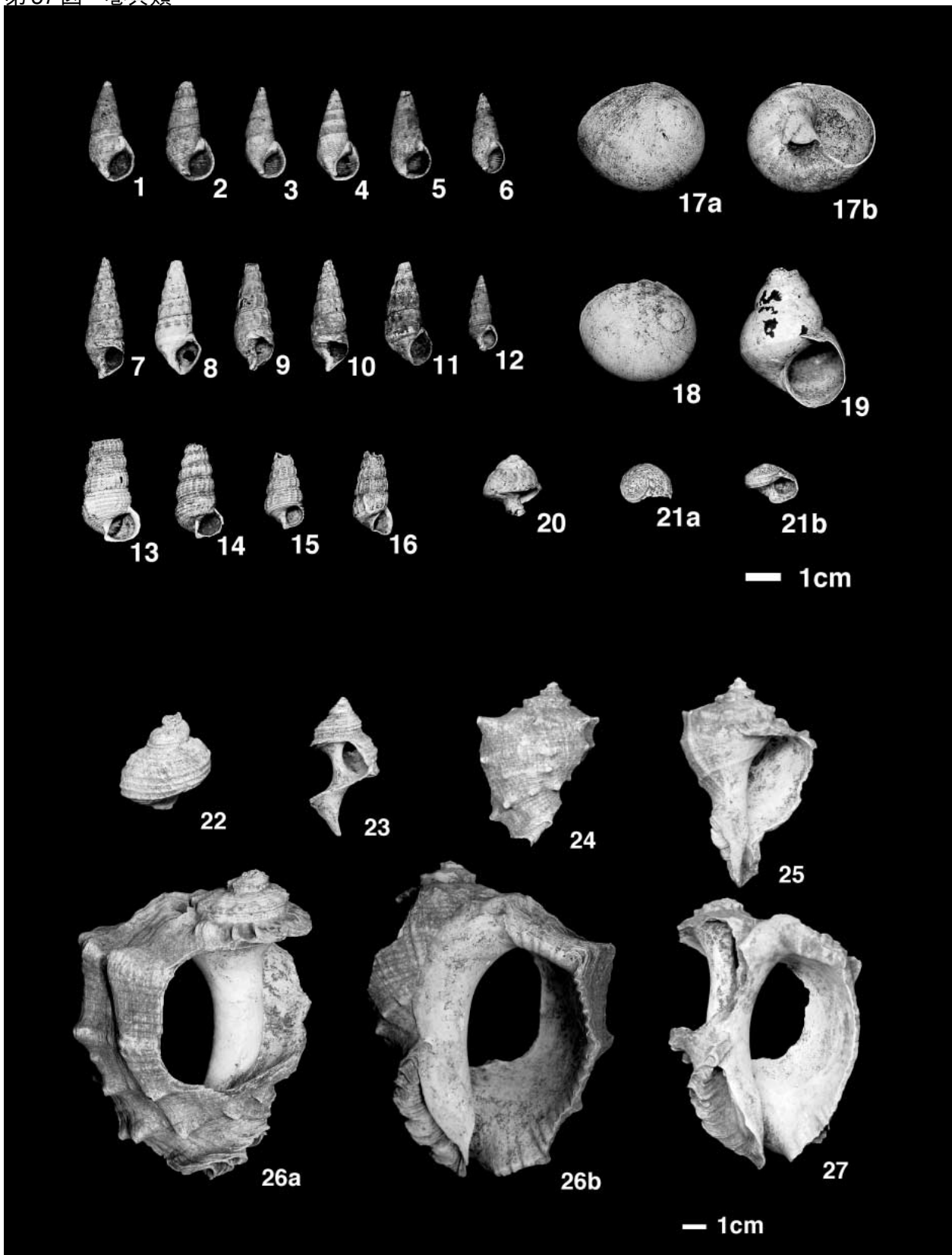
参考文献

吉良哲明 1954 『原色日本貝類図鑑 (増補改訂版)』 保育社、p.240。
 波部忠重・奥谷喬司 1983 『学研生物図鑑 貝Ⅱ』 学習研究社、p.294。
 樋泉岳二・黒住耐二・山谷文人・切通雅子 2000 「貝類遺体」 『中里貝塚 (保坂太一編)』 東京都北区教育委員会、p.99-171。
 金子浩昌 1992 「新宿区細工町遺跡出土の動物遺存体」 『東京都新宿区 細工町遺跡』 新宿区厚生部遺跡調査会、p.188-203。

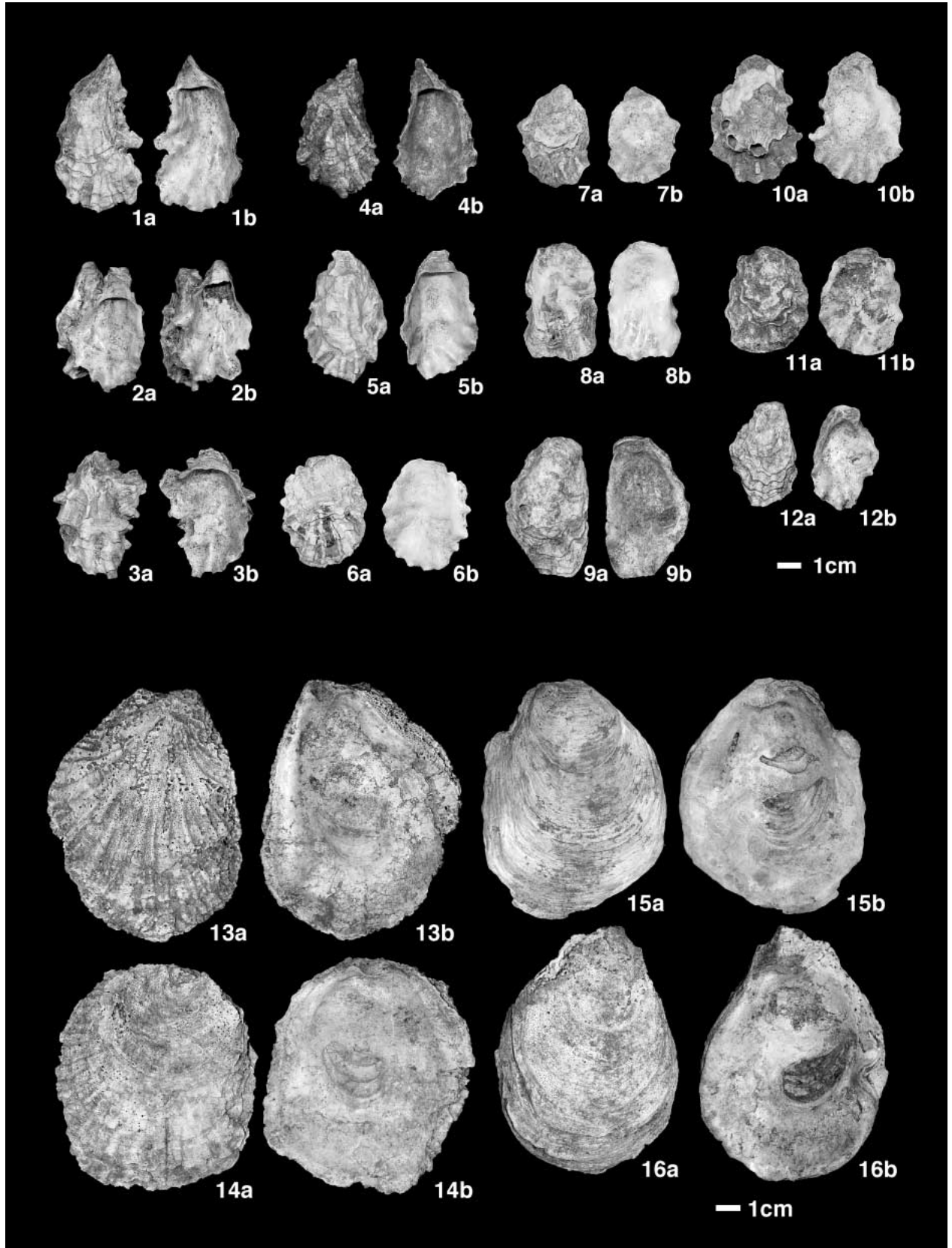
第8表 貝類の出土量

	SK208	SK98	SK15	合計
巻貝類				
クボガイ	1			1
キサゴ	4			4
サザエ	2			2
オオタニシ	8			8
マルタニシ	2			2
フトヘナタリ	395	345	16	756
ウミニナ	1,077	65	32	1,174
イボウミニナ	298	134	17	449
ツメタガイ	66	5	3	74
アカニシ	31	4	Fr.	35
イボニシ	1			1
イトカケガイ科			2	2
マイマイ類			2	2
微小巻貝	9			9
二枚貝類				
サルボウガイ	L 31	8	1	77 L 40
	R 27	10		R 37
ハイガイ	L 2			3 L 2
	R 1			R 1
イタボガキ	L 12	1		33 L 13
	R 19	1		R 20
マガキ	L 132	55	61	496 L 248
	R 120	40	88	R 248
シオフキガイ	L	10	7	32 L 17
	R	7	8	R 15
ヤマトシジミ	L 75	16	249	695 L 340
	R 94	20	241	R 355
カガミガイ	L 2			3 L 2
	R 1			R 1
アサリ	L 3			6 L 3
	R 3			R 3
ハマグリ	L 336	142	155	1,257 L 633
	R 326	132	166	R 624
オキシジミ	R 1			1 R 1
巻貝類 (種数)	11	5	6	12
二枚貝 (種数)	9	6	5	10
合計 (個体数)	3,079	995	1,048	5,122

第57図 巻貝類

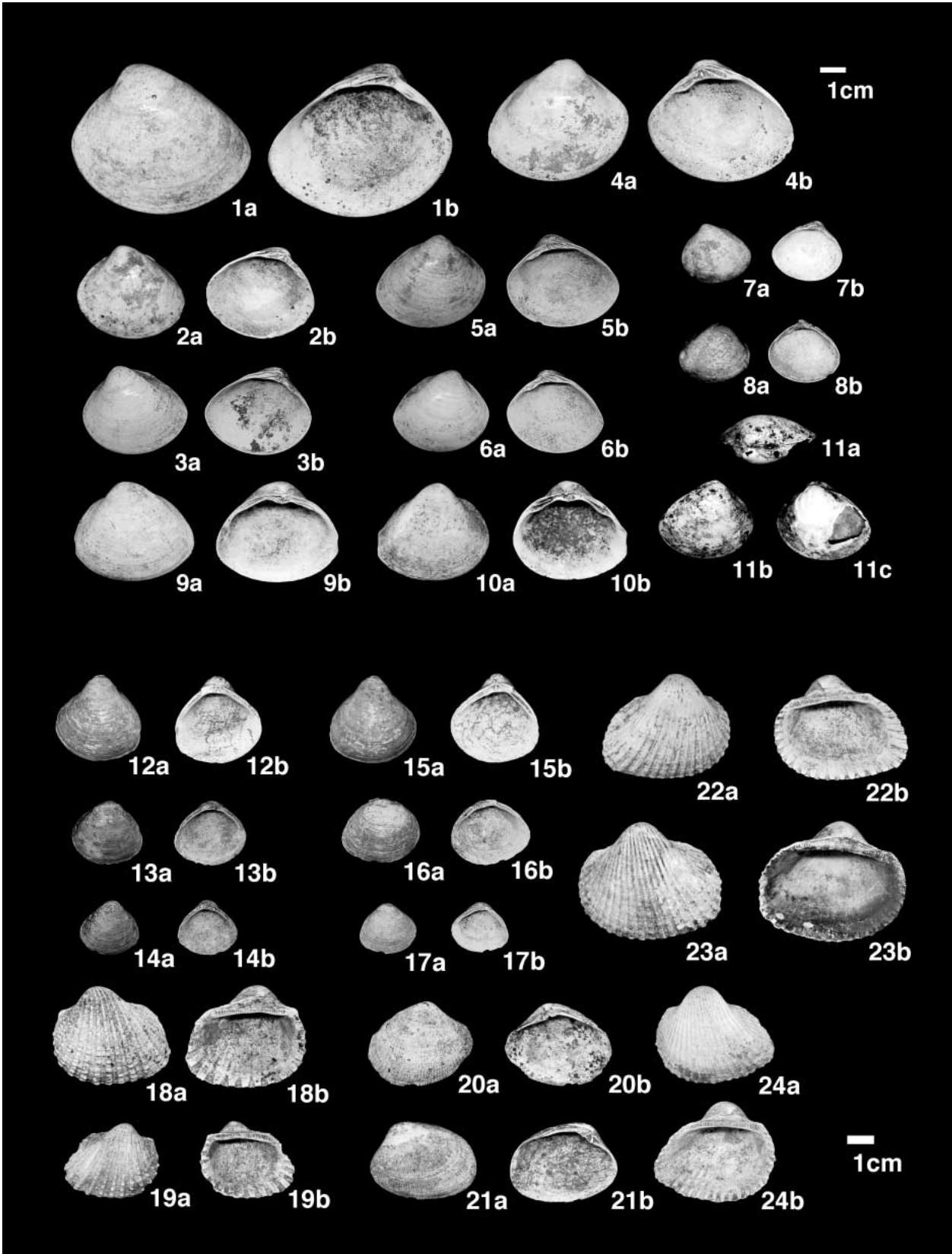


1～6 ウミニナ 7～12 イボウミニナ 13～16 フトヘタナリ 17・18 ツメタガイ
 19 オオタニシ 20 クボガイ 21 キサゴ 22・23 サザエ 24～27 アカニシ



1～12マガキ 13～16イタボガキ

第59図 二枚貝類(2)



1～8・11ハマグリ 9・10シオフキガイ 12～17ヤマトシジミ 18・19ハイガイ
20・21アサリ 22～24サルボウガイ

(6) 烏帽子遺跡出土貝類の放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

烏帽子遺跡より出土した貝殻の加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、00B 区 SK15 から採取した貝殻 (ハマグリ・カキ) 2 点、00C 区 SK98 から採取した貝殻 (ハマグリ・カキ) 2 点、00C 区 SK208 から採取した貝殻 (サルボウガイ・フトヘナタリ) 2 点のあわせて 6 点である。

これら試料は、酸処理を施して表面部分を洗浄し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

第 9 表に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値 -25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値 (yrBP) の算出は、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が 68% であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変

動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0 のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。

カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10% 未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』、p.3-20。
 Stuiver, M. and Reimer, P. J. 1993 Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
 Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. 1998 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第 9 表
貝殻の放射性炭素年代測定
および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-1710 (AMS)	貝殻 (ハマグリ) SK15	+0.8	1820 \pm 35	cal AD 605	cal AD 565 — 635 (100%)
PLD-1711 (AMS)	貝殻 (カキ) SK15	-0.1	1870 \pm 40	cal AD 545	cal AD 490 — 590 (100%)
PLD-1712 (AMS)	貝殻 (ハマグリ) SK98	+0.5	1775 \pm 40	cal AD 645	cal AD 605 — 670 (100%)
PLD-1713 (AMS)	貝殻 (カキ) SK98	-0.3	1860 \pm 40	cal AD 555	cal AD 505 — 605 (100%)
PLD-1714 (AMS)	貝殻 (サルボウガイ) SK208	+0.3	1815 \pm 35	cal AD 610	cal AD 570 — 640 (100%)
PLD-1715 (AMS)	貝殻 (フトヘナタリ) SK208	-5.9	1580 \pm 35	cal AD 805	cal AD 775 — 860 (100%)

(7) 烏帽子遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

烏帽子遺跡から出土した炭化物試料12点の放射性炭素年代をGPC法にて測定した。測定結果と暦年代較正して得られた結果は第10表に記載した。

2. 放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、リチウムと混合して反応管内に入れ、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム(カーバイド)を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、ラドン崩壊のために約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを容量400ccのガス比例計数管(GPC)に充填し、 β -線を計数して ^{14}C 濃度を算出した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

なお、 ^{14}C 年代値(yrBP)の算出には ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

3. 同位体分別効果の補正について

第10表に記載した $\delta^{13}\text{CPDB}$ 値は、PDB標準試料の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}_{\text{PDB}}=0.0112372$)を標準値として、その標準値からのずれを千分率で示し、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}_{\text{sample}}$)を質量分析計で測定して、 $\delta^{13}\text{CPDB}=[\{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{sample}}-(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{PDB}}\}/(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{PDB}}]\times 1000$ の計算式によって算出した。試料の $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値を-25.0‰に規格化することにより、測定された試料の $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値を用いて ^{14}C 濃度を補正し、これを用いて ^{14}C 年代を算出した。したがって、第10表に記載した ^{14}C 年代は同位体分別効果による測定誤差を補正した年代である。

4. 暦年代較正について

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙

線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正し、より正確に真の年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C 年代の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代を算出する。較正暦年代の算出にRadiocarbon Calibration Program* CALIB rev. 4.3 {Reference for datasets used: Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL98 : Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40, p.1041-1083}を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、真の年代である可能性が最も高いことを示す。また、 1σ 暦年代範囲および 2σ 暦年代範囲は確率分布を用いて算出した暦年代範囲であり、その範囲内に真の年代が入る可能性が高いことを示す。 1σ 暦年代範囲は ^{14}C 年代誤差に相当する較正曲線上の暦年代範囲であり、真の年代が入る確率が68%であることを示す。 1σ 暦年代範囲のProbabilityは、68%のうちで、さらに特定の 1σ 暦年代範囲に入る確率を示す。同様に、 2σ 暦年代範囲は ^{14}C 年代誤差の2倍($\pm 2\sigma$)に相当する較正曲線上の暦年代範囲であり、真の年代が入る確率が95%であることを示す。 2σ 暦年代範囲のProbabilityは、95%のうちで、さらに特定の 2σ 暦年代範囲に入る確率を示す。

較正曲線は ^{14}C 濃度の変動のためデコボコしており、そのため ^{14}C 年代値に対応する暦年代較正值、または ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲が複数存在する場合があるが、暦年代較正值はいずれも等しく真の年代である可能性があり、 1σ 暦年代範囲はいずれも68%、 2σ 暦年代範囲はいずれも95%の確率で、さらにProbabilityに示された確率で真の年代が入る。

備考

ModernはAD1,950年以降の新しい年代を指す。yrBPはAD1,950年から過去へ遡った年代を意味する。calは較正した暦年代を意味し、実年代との混同を防ぐためにつけられる。また、Probabilityが10%未満の1σ年代範囲および2σ年代範囲については記載を省略した。

引用文献

中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』、p.3-20。

Stuiver, M. and Reimer, P. J. 1993 Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

第 10 表 炭化物の放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定方法)	試料データ	δ ¹³ C _{PDB} (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代		
				暦年代較正值	1σ暦年代範囲 (Probability)	2σ暦年代範囲 (Probability)
PLD—937 (GPC)	炭化物 (マツ) II TE 00A VIIJ3i SK15 南西部	-26.3	1930±70	cal AD 75	cal BC 0 — cal AD 135 (84.9%)	cal BC 110 — cal AD 245 (99.6%)
PLD—938 (GPC)	炭化物 II TE 00A VIIJ3i SK15 北西部	-26.8	2040±80	cal BC 45 cal BC 5	cal BC 160 — 130 (13.3%) cal BC 120 — cal AD 25 (83.0%)	cal BC 205 — cal AD 25 (96.8%)
PLD—939 (GPC)	炭化物 II TE 00A VIIJ3i SK15 北東部	-27.3	1930±80	cal AD 75	cal BC 0 — cal AD 135 (79.7%)	cal BC 105 — cal AD 255 (98.9%)
PLD—940 (GPC)	炭化物 II TE 00A VIIJ3h SK12	-26.9	2060±80	cal BC 50	cal BC 170 — cal AD 20 (100%)	cal BC 230 — cal AD 85 (92.1%)
PLD—941 (GPC)	炭化物 II TE 00B VIJ19d SK04 (000607)	-27.7	1780±80	cal AD 245	cal AD 135 — 200 (29.8%) cal AD 205 — 265 (31.9%) cal AD 270 — 340 (38.3%)	cal AD 80 — 420 (100%)
PLD—942 (GPC)	炭化物 II TE 00B VIJ18d SK17	-26.7	2090±100	cal BC 95	cal BC 205 — cal AD 5 (89.6%)	cal BC 375 — cal AD 80 (100%)
PLD—943 (GPC)	炭化物 II TE 00B VIJ19b SK12	-26.5	1710±80	cal AD 265 cal AD 270 cal AD 340	cal AD 240 — 415 (100%)	cal AD 130 — 440 (93.5%)
PLD—944 (GPC)	炭化物 II TE 00B VIJ20e SK36 炭化物層 A	-28.0	1430±100	cal AD 640	cal AD 530 — 690 (94.5%)	cal AD 415 — 780 (99.4%)
PLD—945 (GPC)	炭化物 II TE 00B VIJ20r SK34 炭化物層 B	-27.8	2210±140	cal BC 350 cal BC 315 cal BC 300 cal BC 230 cal BC 220 cal BC 210	cal BC 400 — 90 (97.3%)	cal BC 550 — cal AD 75 (95.1%)
PLD—946 (GPC)	炭化物 II TE 00B VIJ16f SK34 炭化物層 C	-29.1	1910±100	cal AD 85 cal AD 105 cal AD 120	cal BC 55 — cal AD 260 (93.1%)	cal BC 210 — cal AD 430 (98.0%)
PLD—947 (GPC)	炭化物 II TE 00B VIJ18b SD11	-22.9	2820±90	cal BC 970 cal BC 955 cal BC 940	cal BC 1050 — 890 (78.8%) cal BC 880 — 835 (15.8%)	cal BC 1135 — 810 (91.0%)
PLD—948 (GPC)	炭化物 II TE 00B VIJ19e SD07	-27.9	2110±100	cal BC 165 cal BC 130 cal BC 120	cal BC 350 — 315 (12.7%) cal BC 210 — 40 (74.8%)	cal BC 380 — AD 55 (100%)

第5章 まとめ

今回の調査ではいくつかの新しい成果が得られた。

①市道を挟んだ東側の区域（とくに00B区）は、弥生前期から古墳中期にかけて、断続しながらも墓域として利用されていたらしい。下呂石の詰まった水神平式壺が供献された弥生前期の土坑墓、ガラス製勾玉などの装身具類が出土した古墳時代の土坑墓は注目に値する。

②前回の調査では空白であった弥生後期から終末期までの遺物が出土した。ただし、集落に伴うのか墓域に伴うのかは不明。

③00B区と00C区の間には江戸時代の大溝が存在した。おそらく横須賀御殿に関係する区画溝であり、廃絶は18世紀ごろらしい。

以上の点についてもう少し述べておこう。

①弥生前期の土坑墓（00B区SK13）に関しては、墓坑の規模からいえば伸展葬であり、木棺墓の可能性も考えられる。下呂石の詰まった水神平式壺が墓の上部に据えられていたらしいことも、この墓の被葬者についていろいろな憶測を引き寄せる。

壺に詰められていた下呂石は34個で1個は安山岩であった。烏帽子遺跡では下呂石とチャートの石核・剥片が出土しているが、下呂石は在地の石材ではない。当然搬入しなければならない。安山岩が含まれていたことは木曾川水系の河原で採取したまま搬入されたことを示しているように思える。

壺については烏帽子遺跡近辺で製作されたか、濃尾平野南部で製作されたかのいずれかである。前者なら木曾川水系の河原で採取された下呂石を壺に入れて烏帽子遺跡に運び、壺に供献された。後者なら、下呂石が人手をわたって烏帽子遺跡にもたらされ、壺に入れて墓に供えた、と考えられる。

②古墳時代の土坑墓（00B区SK61）は、墓坑内からベンガラ混じりの砂が立体的に出土し、しかもその内部や周囲からガラス製勾玉、ガラス小玉、管玉が出土した。直接に年代を決める資料には欠けていたが、頭部を赤く塗ることは被葬者が海人であったことを想像

させる。海人と鯨面が無関係でなく、鯨面埴輪に顔面を赤く塗る例のあることを見るときはおさらである。はたしてガラス製勾玉をどこで入手したのであろうか。なお、本例が土坑墓（もしくは木棺墓）ではなく何らかの外部施設をもつ墳墓であるという確証は得られていない。

②は前回の調査では空白であった資料が今回見つかったという以上に、烏帽子遺跡周辺に水上交通の拠点がありはしないかという思いを強くさせた。第3砂堆における当該期の遺跡は他に細見遺跡があるが、烏帽子遺跡は位置的にほぼ中心であり、けっして周辺部の遺跡であるとは思えない。今後の調査に期待したい。

③は御庭焼窯関係遺物の出土とも関係する。SD01・SD02からは窯関係遺物が出土し、付近の整地によって廃棄されたものである可能性が高い。SD01はもともと横須賀御殿北辺の区画として掘削されたと考えられるが、幅は15mほどあって、城館の堀に匹敵する規模である。それが廃絶後には粘土によって固められ水路としての機能が与えられている。

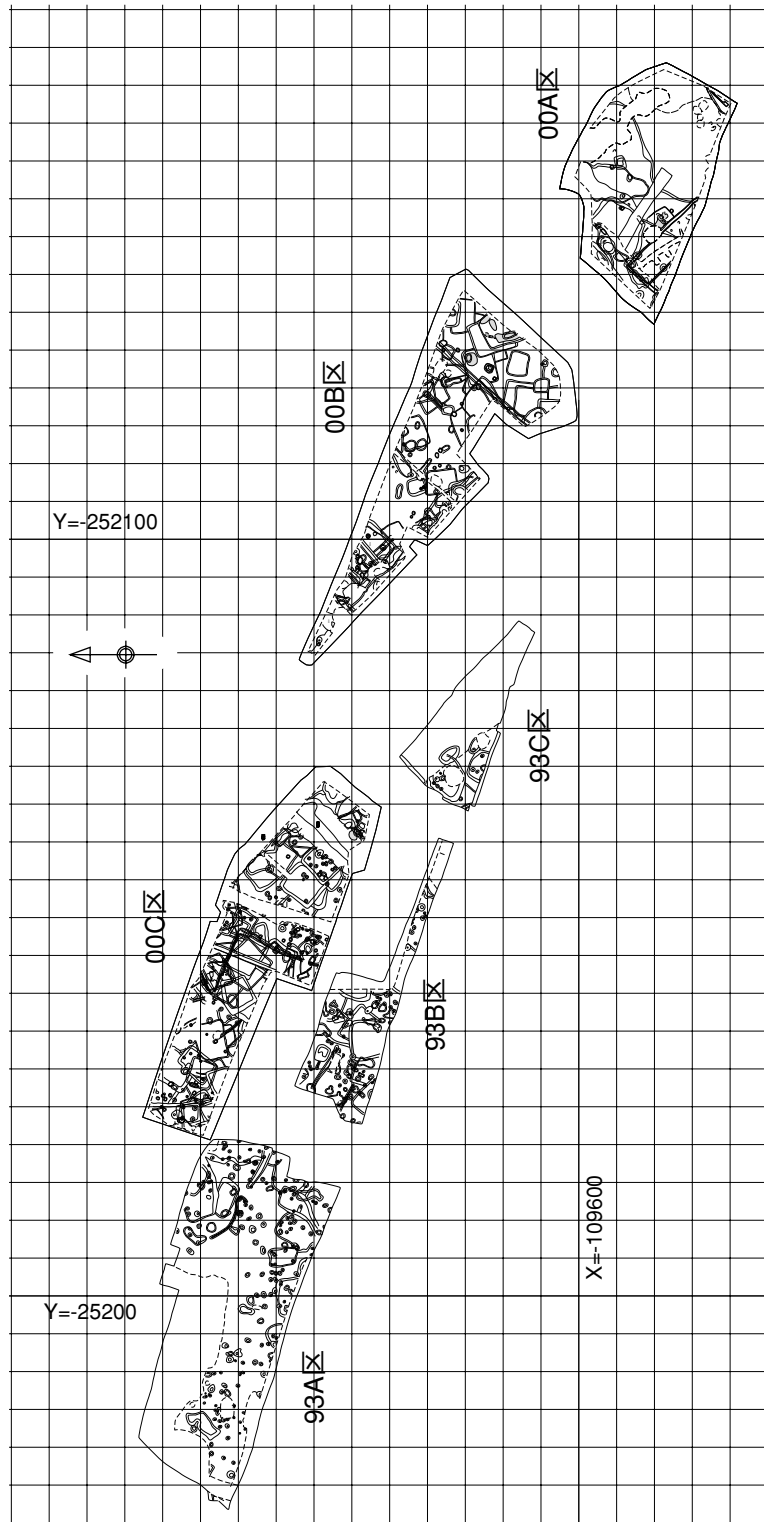
遺物については、縄文晩期終末から弥生前期前半の土器群に伴う大形壺がほとんど無く、前回調査を再確認した。そのことが大形壺の定着以前という微妙な時期差を示すのか、海岸部に立地するという遺跡の特性に関わるのかどうかであるが、前者の可能性が高いと考える。典型的な檜王式壺は無く、むしろ前回調査で出土した突帯紋系変容壺との関連が考えられるからである。共存する浮線紋浅鉢は点刻が施されているとはいえ口外帯直下の無紋帯が幅広くはなく、それほど新しくならないだろう。名古屋市古沢町遺跡2号溝資料に近く、典型的な檜王式が成立する直前に位置付けられよう。長野県茅野市御社宮司遺跡とは浮線紋浅鉢・条痕紋深鉢・外面ケズリ深鉢などが共通する。

古代では移動式竈が注目される。土間に固定するための突起をもつものもたない大形品がある。前者は砂地に適している

図版

遺構プラン・セクション／遺構写真／遺物写真

図版1 遺構全体図
1 : 1000



図版2 調査区西半部プラン
1:500

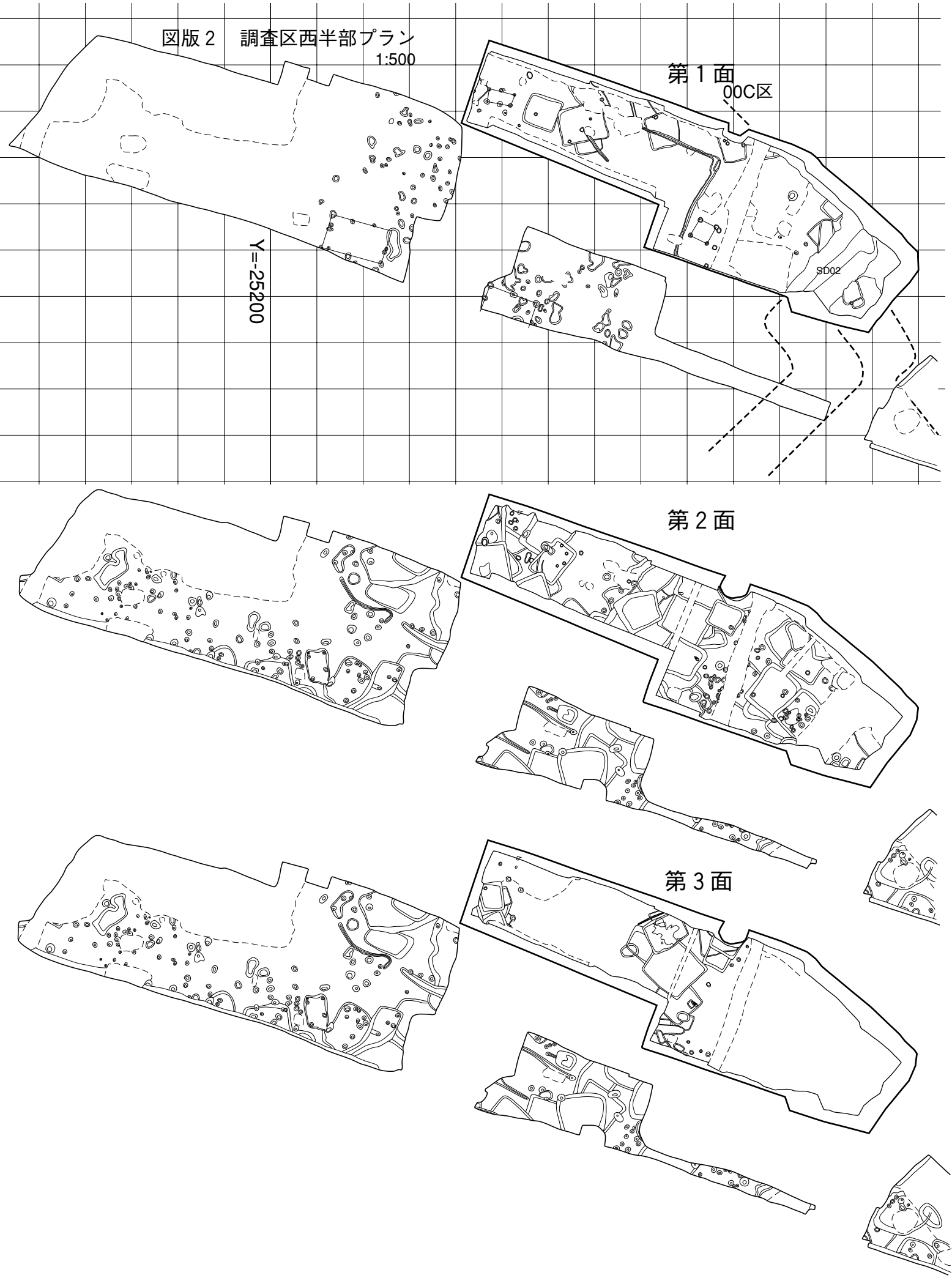
Y=-25200

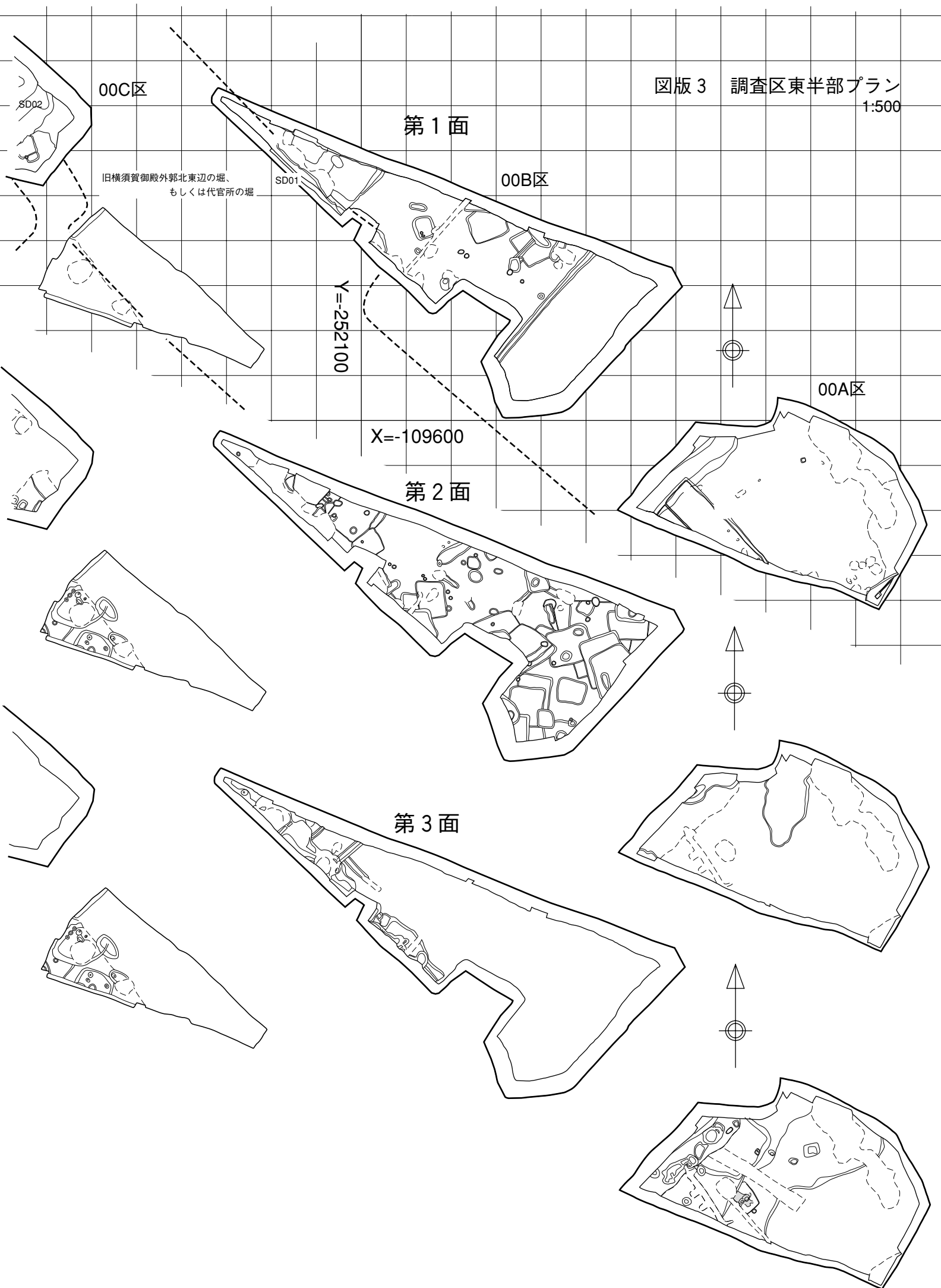
第1面
00C区

SD02

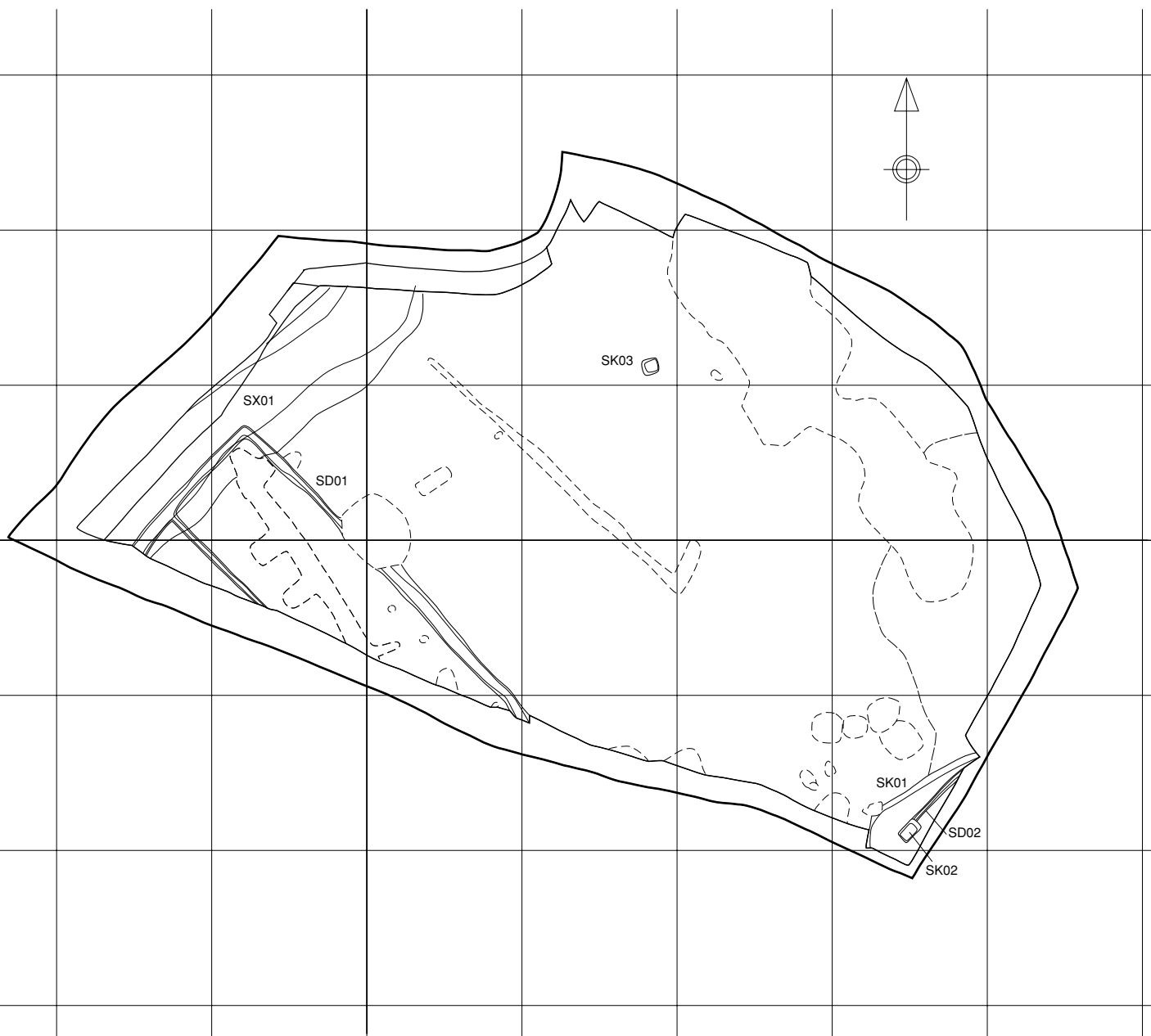
第2面

第3面

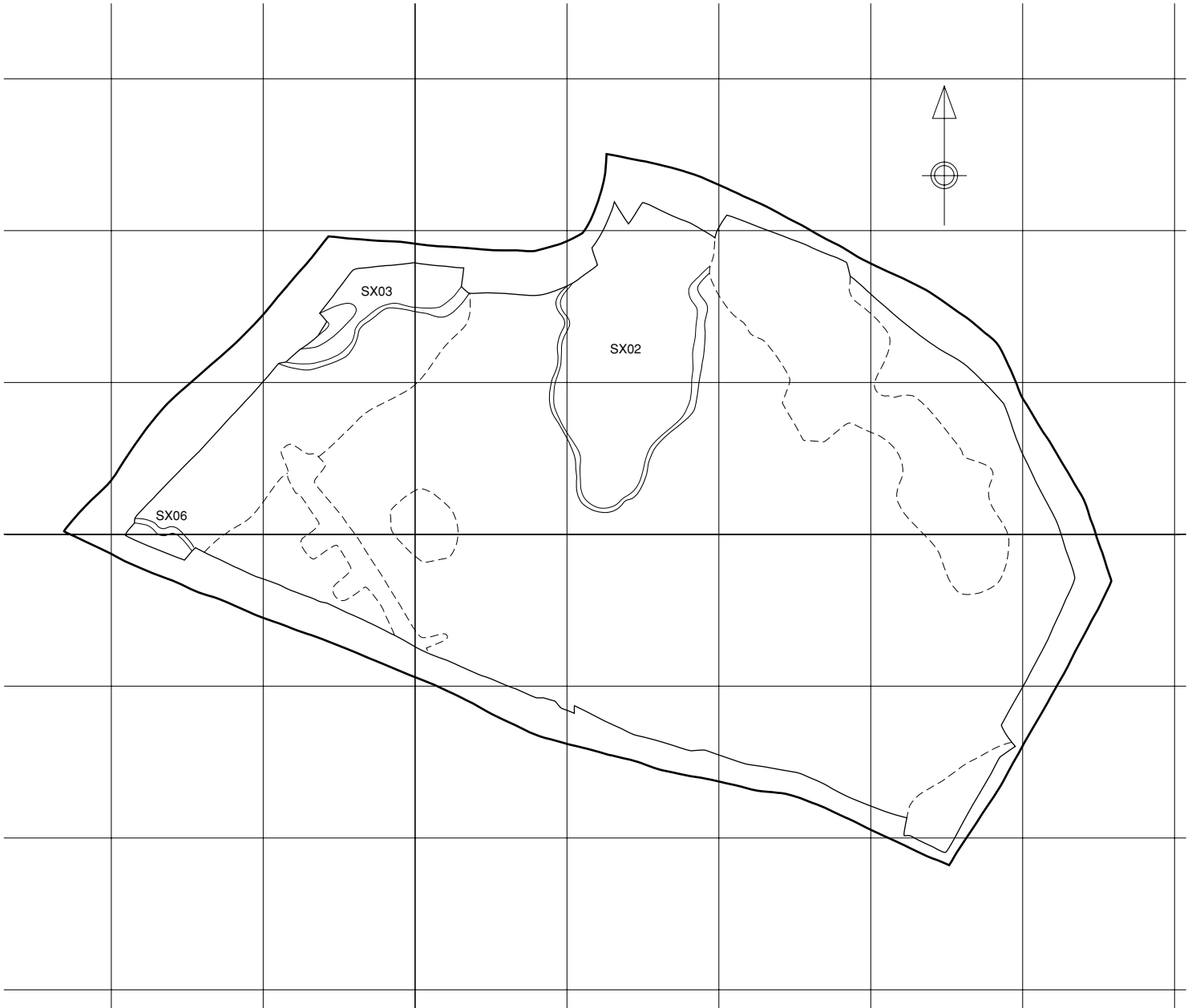




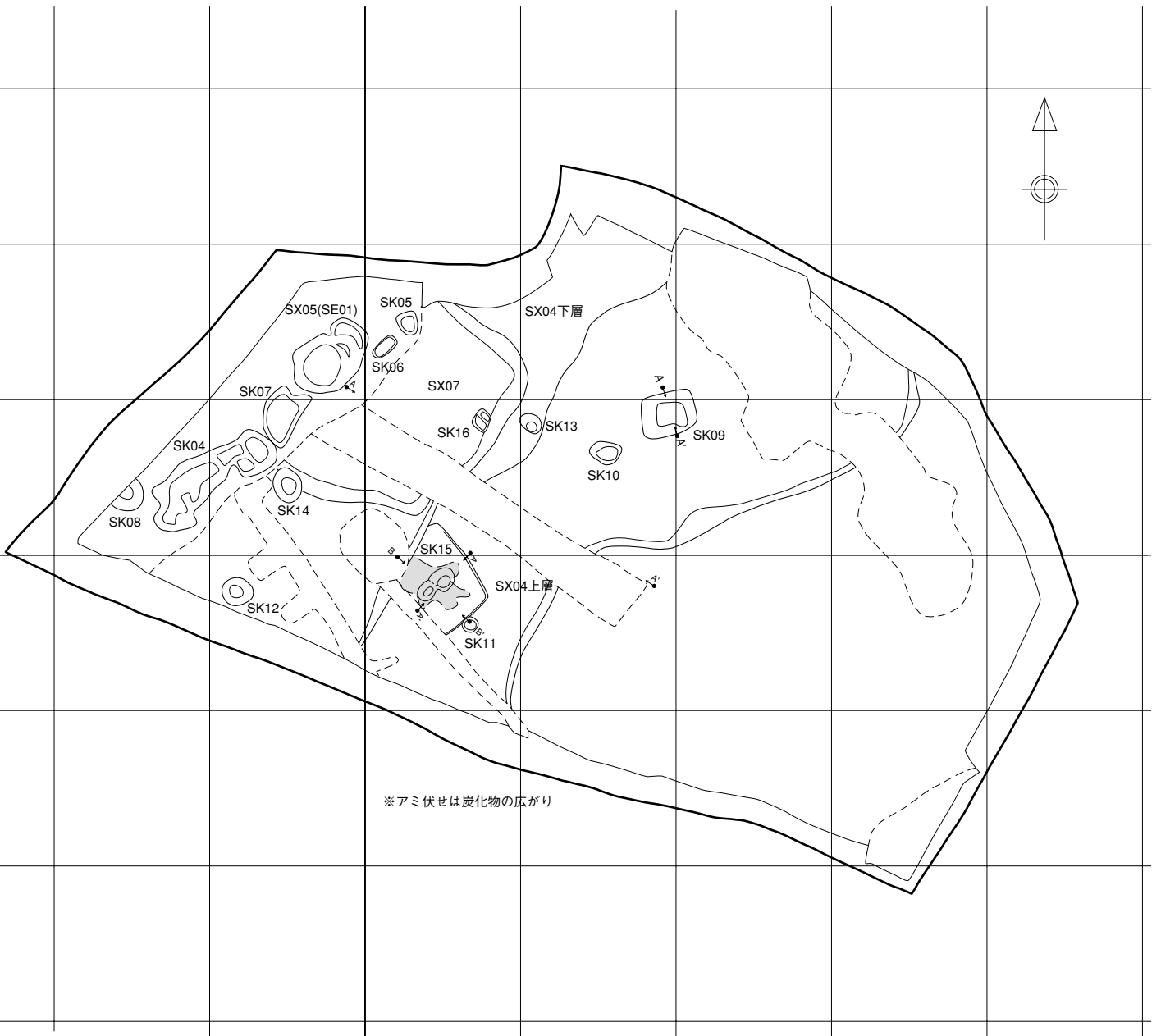
図版 4 00A区第1面プラン
1:200



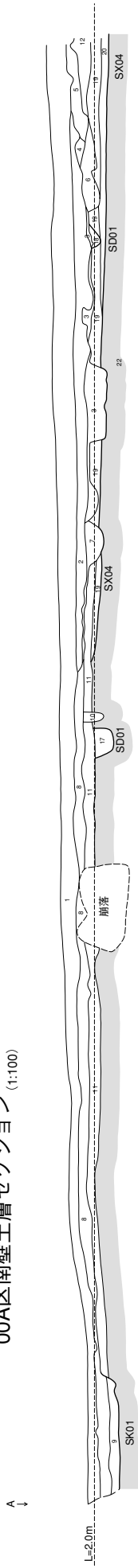
図版5 00A区第2面プラン
1:200



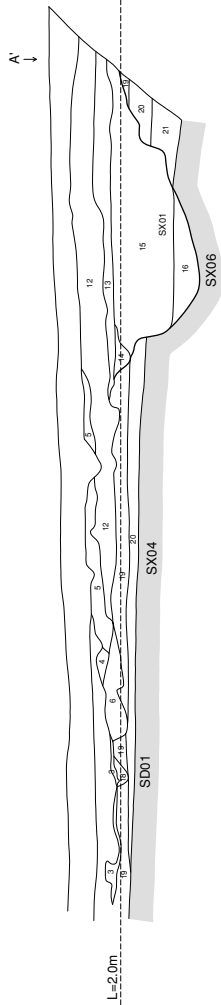
図版 6 00A区第3面プラン
1 : 200



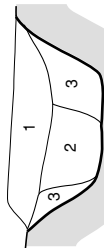
00A区南壁土層セクション (1:100)



- 1 表土
- 2 にぶい黄褐色中粒砂
- 3 褐色中粒砂
- 4 褐色中粒砂
- 5 褐色中粒砂
- 6 にぶい黄褐色中粒砂
- 7 褐色中粒砂
- 8 暗オリーブ褐色細粒砂
- 9 褐色細粒砂
- 10 暗褐色細粒砂
- 11 褐色細粒～中粒砂
- 12 褐色中粒砂
- 13 暗褐色細粒砂
- 14 褐色細粒砂
- 15 褐色粗粒砂
- 16 黒褐色粗粒砂
- 17 にぶい黄褐色中粒砂
- 18 褐色中粒砂
- 19 暗褐色中粒砂
- 20 暗褐色中粒砂
- 21 黒褐色粗粒砂
- 22 基礎

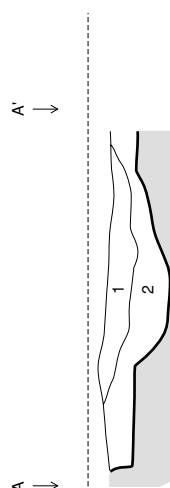


SK09 (1:50)

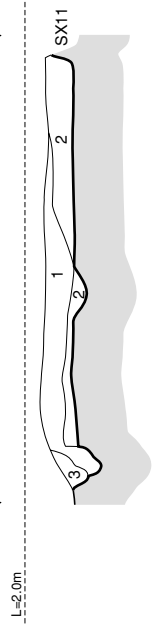


SK15 (1:50)

- 1 黒褐色中粒砂 10YR2/3
- 2 暗褐色中粒砂 10YR3/3
- 3 灰黄褐色中粒砂 10YR4/2



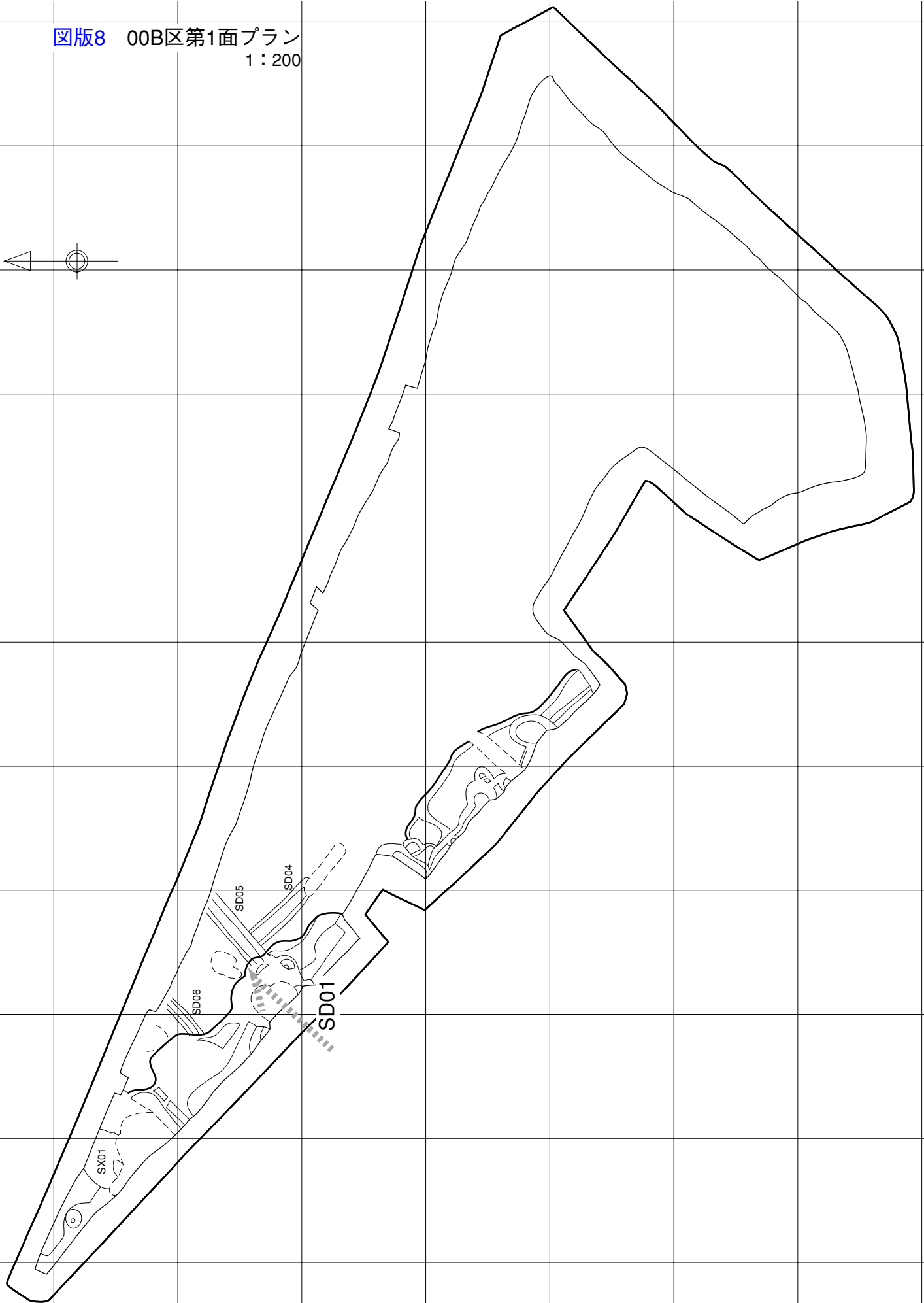
- 1 黒褐色中粒砂 10YR2/3
- 2 暗褐色細粒砂 10YR3/3
- 3 黒褐色中粒砂 10YR2/3

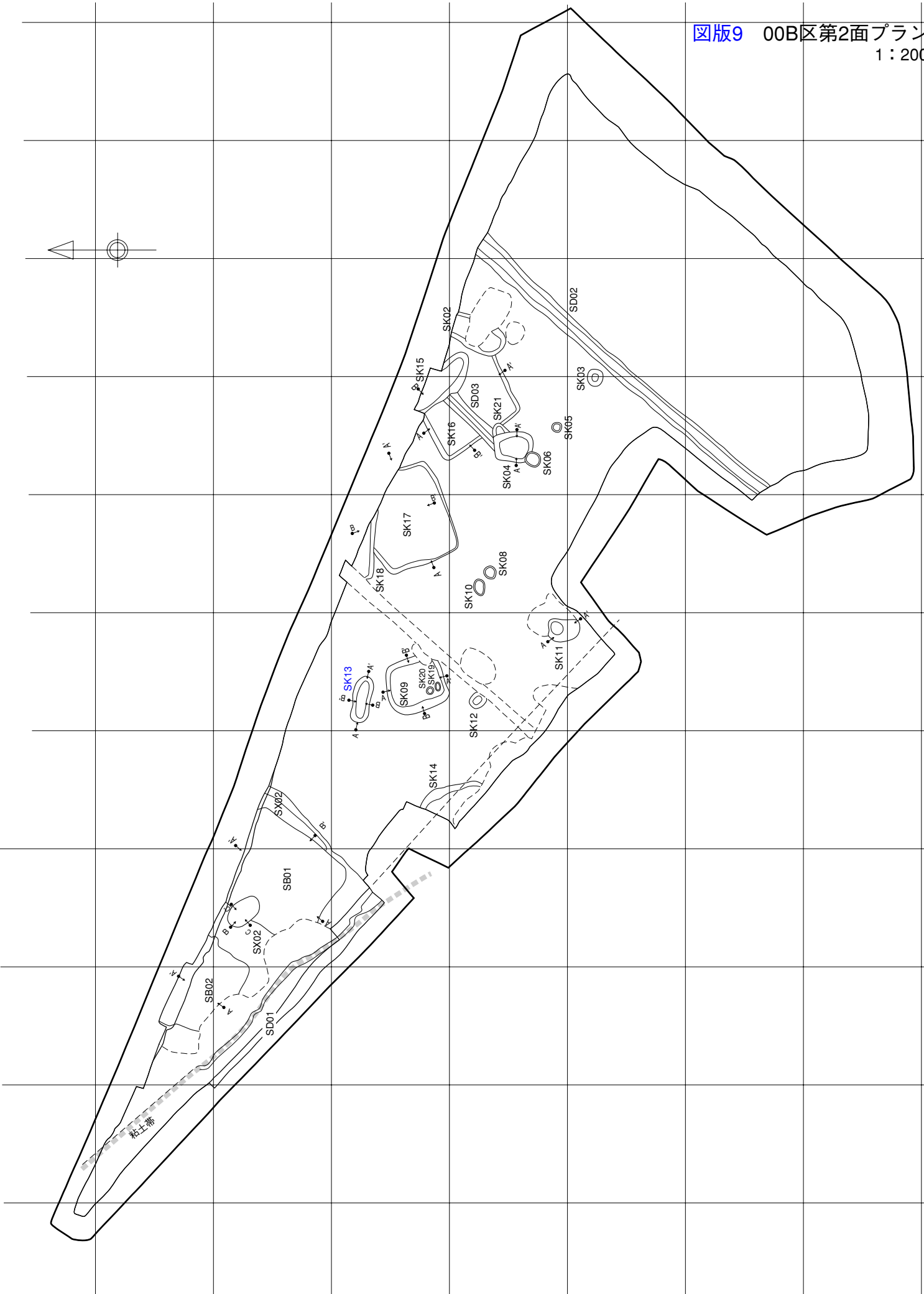


SX04.SX07 (1:100)

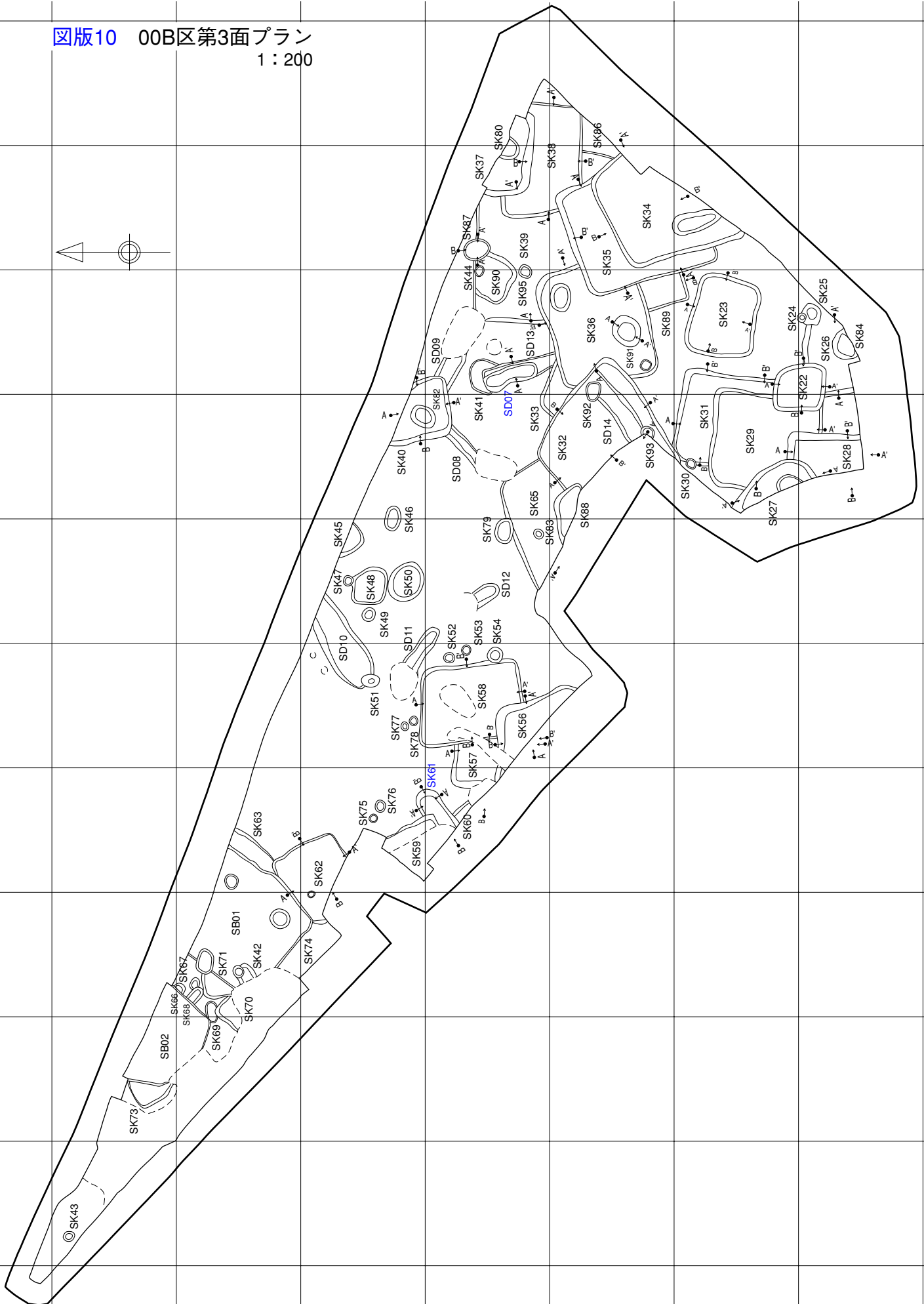
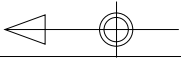
- 1 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 2 暗褐色中粒砂 10YR3/3
- 3 黒褐色中粒砂 10YR2/2

図版8 00B区第1面プラン
1:200

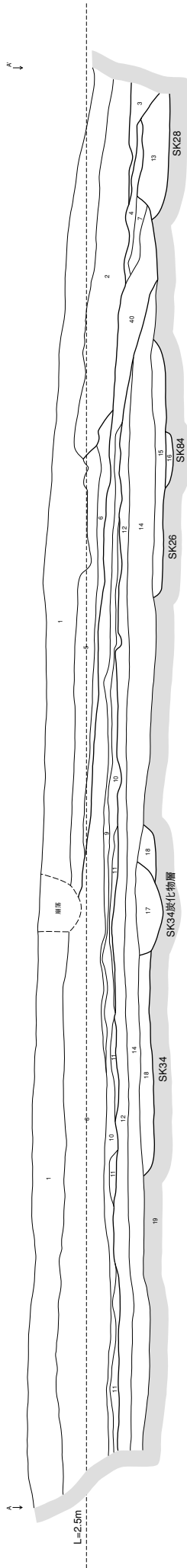




図版10 00B区第3面プラン
1 : 200



00B区東壁セクション (1:100)



11 褐色中粒砂 10YR3/3

12 褐色細粒砂 10YR4/4

13 褐色細粒砂 10YR4/6

14 褐色細粒砂 10YR4/4

15 暗褐色中粒砂 10YR3/4

16 黒褐色中粒砂 10YR2/3

17 黒褐色中粒砂(炭化物層) 10YR2/3+10YR2/1

18 暗褐色中粒砂 10YR3/4

19 黄褐色粗粒砂 10YR5/6 (地山)

1 表土

2 にぶい黄褐色極細粒砂 10YR6/4

3 上層 黒褐色シルト 10YR3/2

下層 にぶい黄褐色極細粒砂 10YR5/4

4 褐色中粒砂 10YR4/4

5 にぶい黄褐色シルト混じり細粒砂 10YR6/4

6 灰黄褐色粘質シルト 10YR6/2

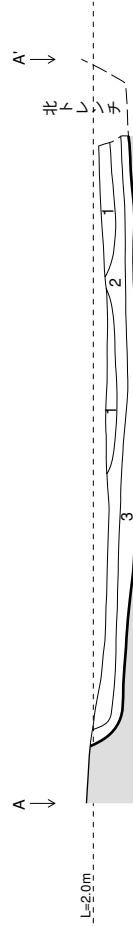
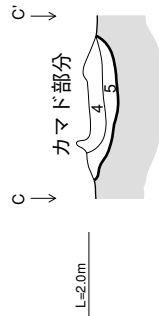
7 褐色細粒砂 10YR4/6

8 にぶい黄褐色中粒砂 10YR5/4

9 暗褐色中粒砂 10YR3/4

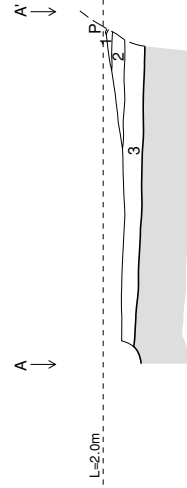
10 褐色細粒砂 10YR4/4

SB01 (1:50)



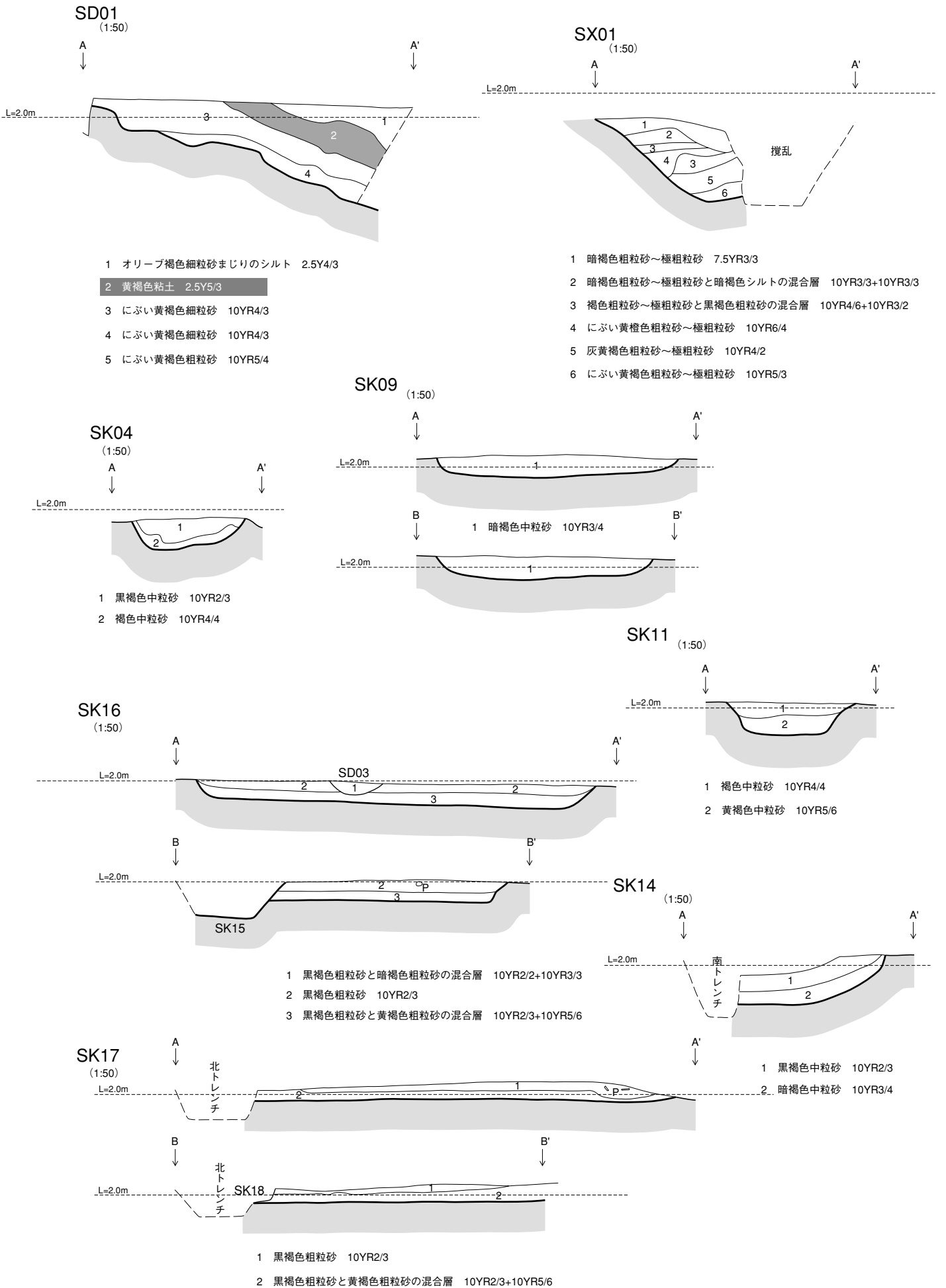
- 1 黒色細粒砂 10YR2/1
- 2 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 3 黄褐色細粒砂 10YR5/6
- 4 暗褐色細粒砂まじり粘土 10YR3/3
- 5 褐色細粒砂まじり粘質土 10YR4/4

SB02 (1:50)



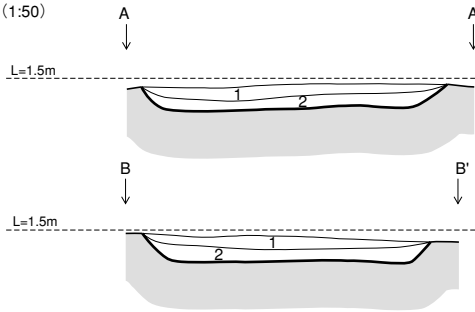
- 1 黒色細粒砂 10YR2/1
- 2 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 3 黄褐色細粒砂 10YR5/6

図版12 00B区セクション2



SK22

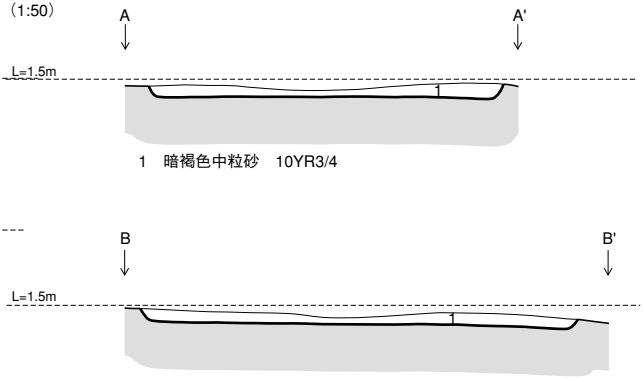
(1:50)



- 1 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 2 褐色中粒砂 10YR4/4

SK23

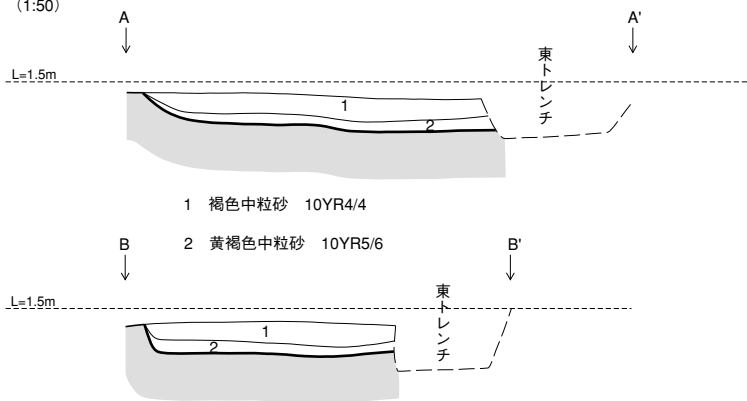
(1:50)



- 1 暗褐色中粒砂 10YR3/4

SK26

(1:50)

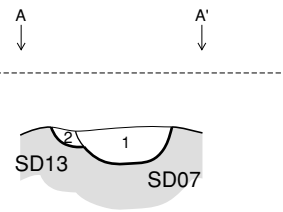


- 1 褐色中粒砂 10YR4/4
- 2 黄褐色中粒砂 10YR5/6

SD13・17

(1:50)

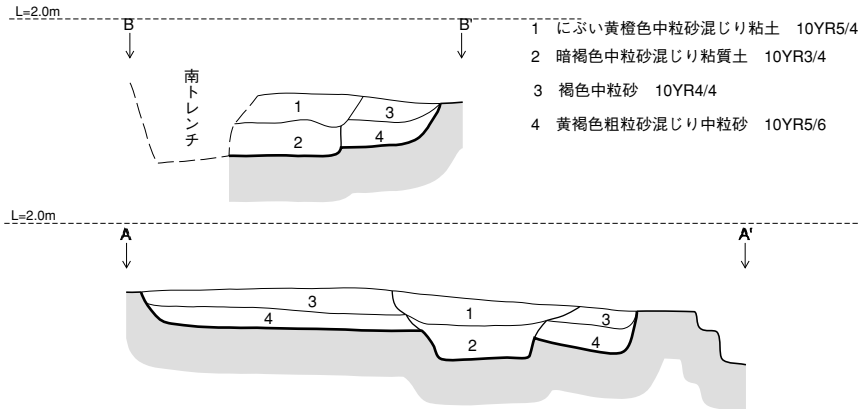
L=2.0m



- 1 黒褐色粗粒砂 10YR2/3
- 2 暗褐色粗粒砂 10YR3/4

SK27

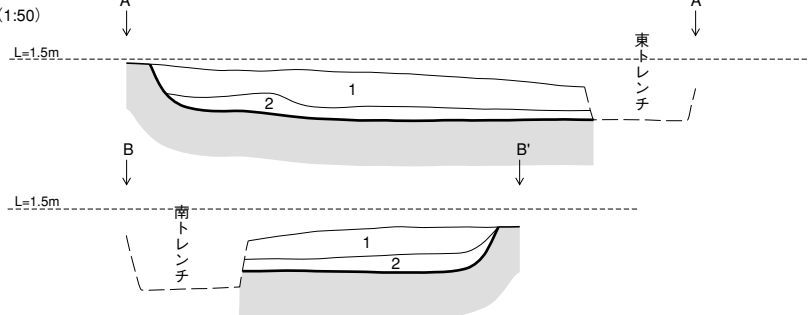
(1:50)



- 1 にぶい黄褐色中粒砂混じり粘土 10YR5/4
- 2 暗褐色中粒砂混じり粘質土 10YR3/4
- 3 褐色中粒砂 10YR4/4
- 4 黄褐色粗粒砂混じり中粒砂 10YR5/6

SK28

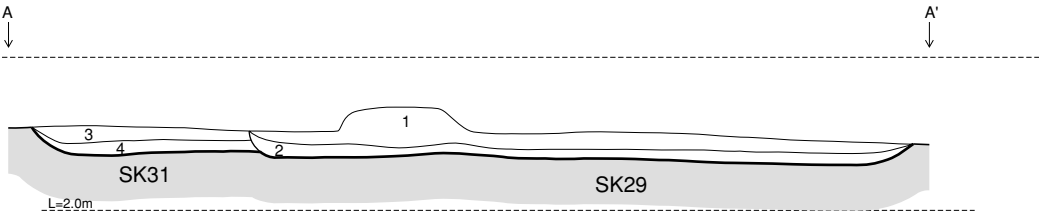
(1:50)



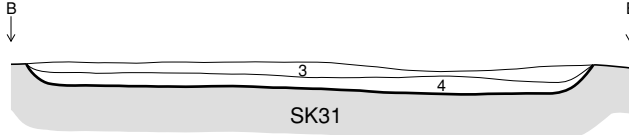
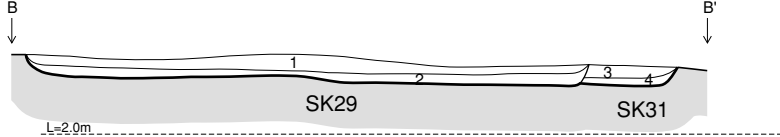
- 1 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 2 褐色中粒砂 10YR4/4

図版14 00B区セクション4

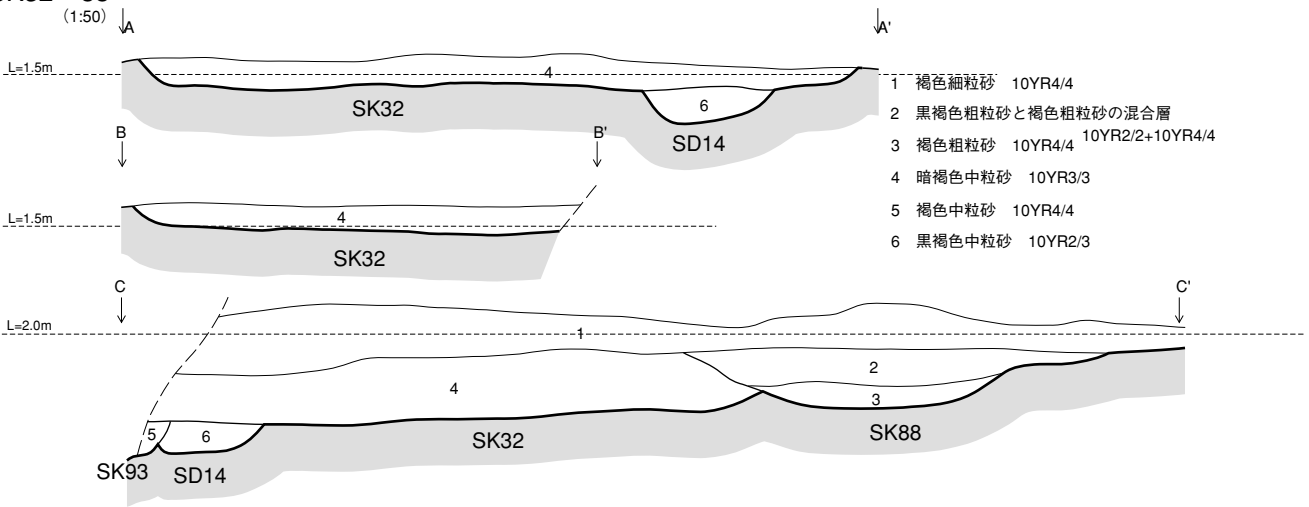
SK31
(1:50)
L=2.0m



- 1 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 2 褐色中粒砂 10YR4/4
- 3 褐色中粒砂 10YR4/4
- 4 黄褐色中粒砂 10YR5/6

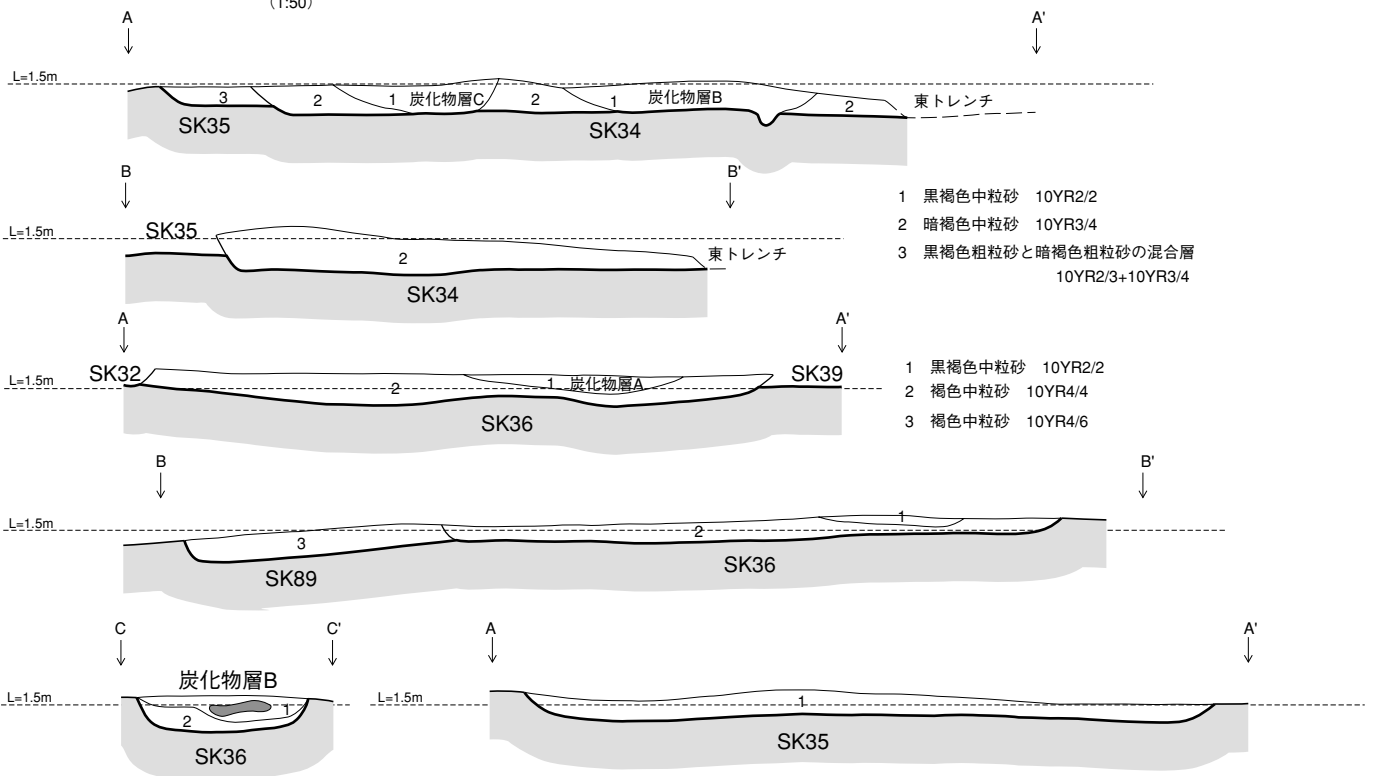


SK32・88
(1:50)



- 1 褐色細粒砂 10YR4/4
- 2 黒褐色粗粒砂と褐色粗粒砂の混合層
- 3 褐色粗粒砂 10YR4/4 10YR2/2+10YR4/4
- 4 暗褐色中粒砂 10YR3/3
- 5 褐色中粒砂 10YR4/4
- 6 黒褐色中粒砂 10YR2/3

SK34・35・36・89
(1:50)

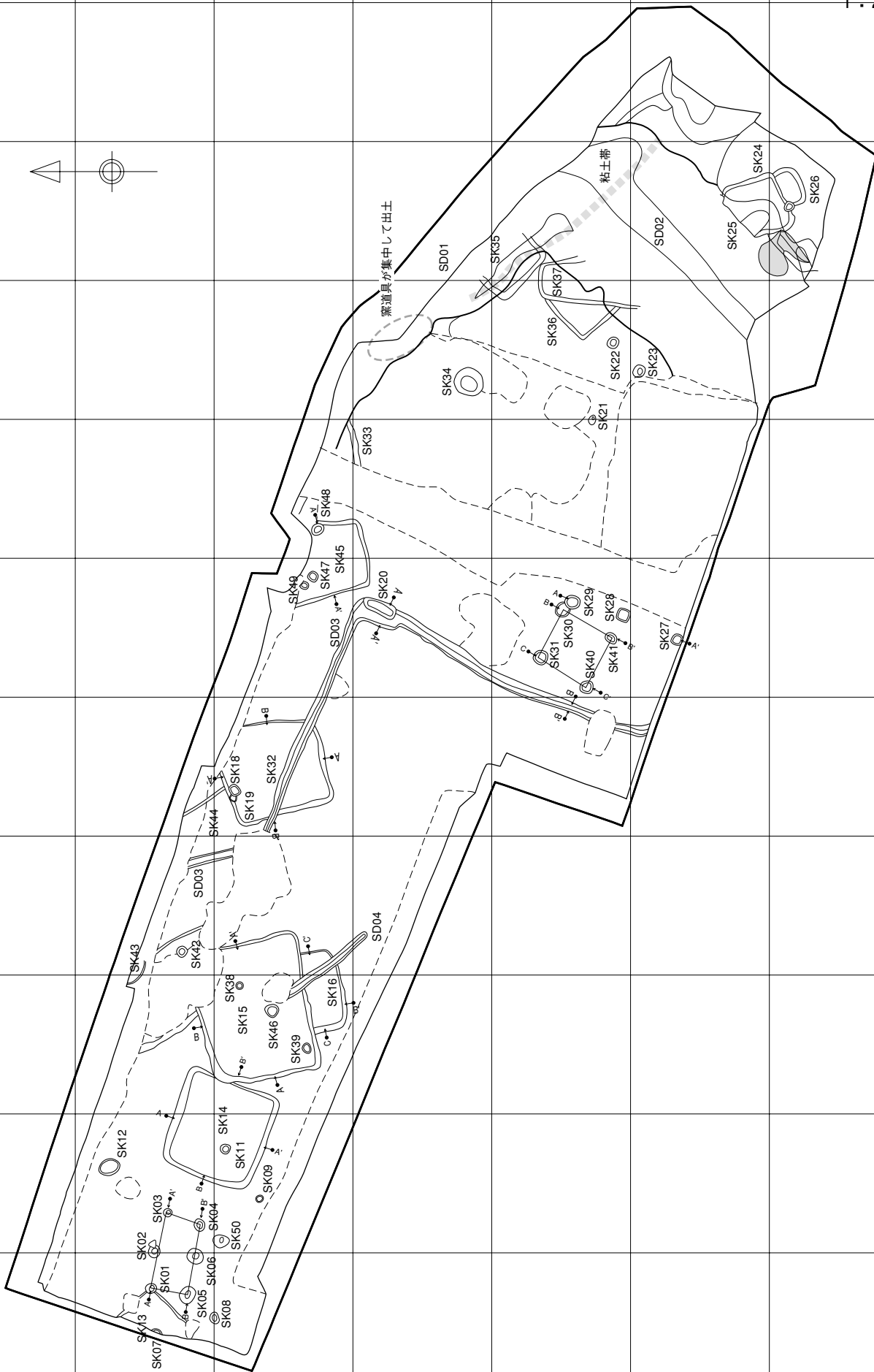


- 1 黒褐色中粒砂 10YR2/2
- 2 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 3 黒褐色粗粒砂と暗褐色粗粒砂の混合層 10YR2/3+10YR3/4

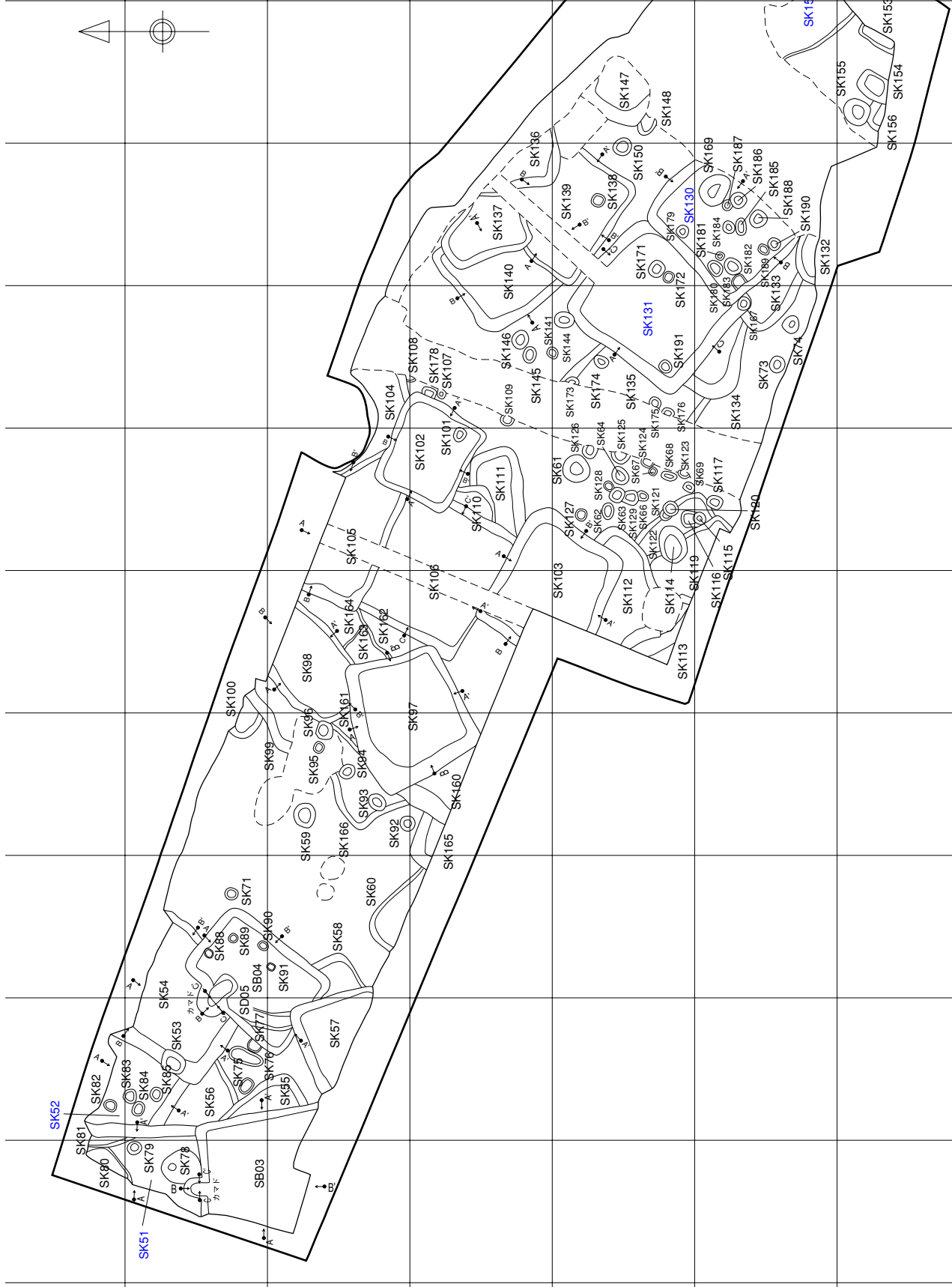
- 1 黒褐色中粒砂 10YR2/2
- 2 褐色中粒砂 10YR4/4
- 3 褐色中粒砂 10YR4/6

- 1 黒褐色中粒砂 10YR2/2
- 2 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 炭化物

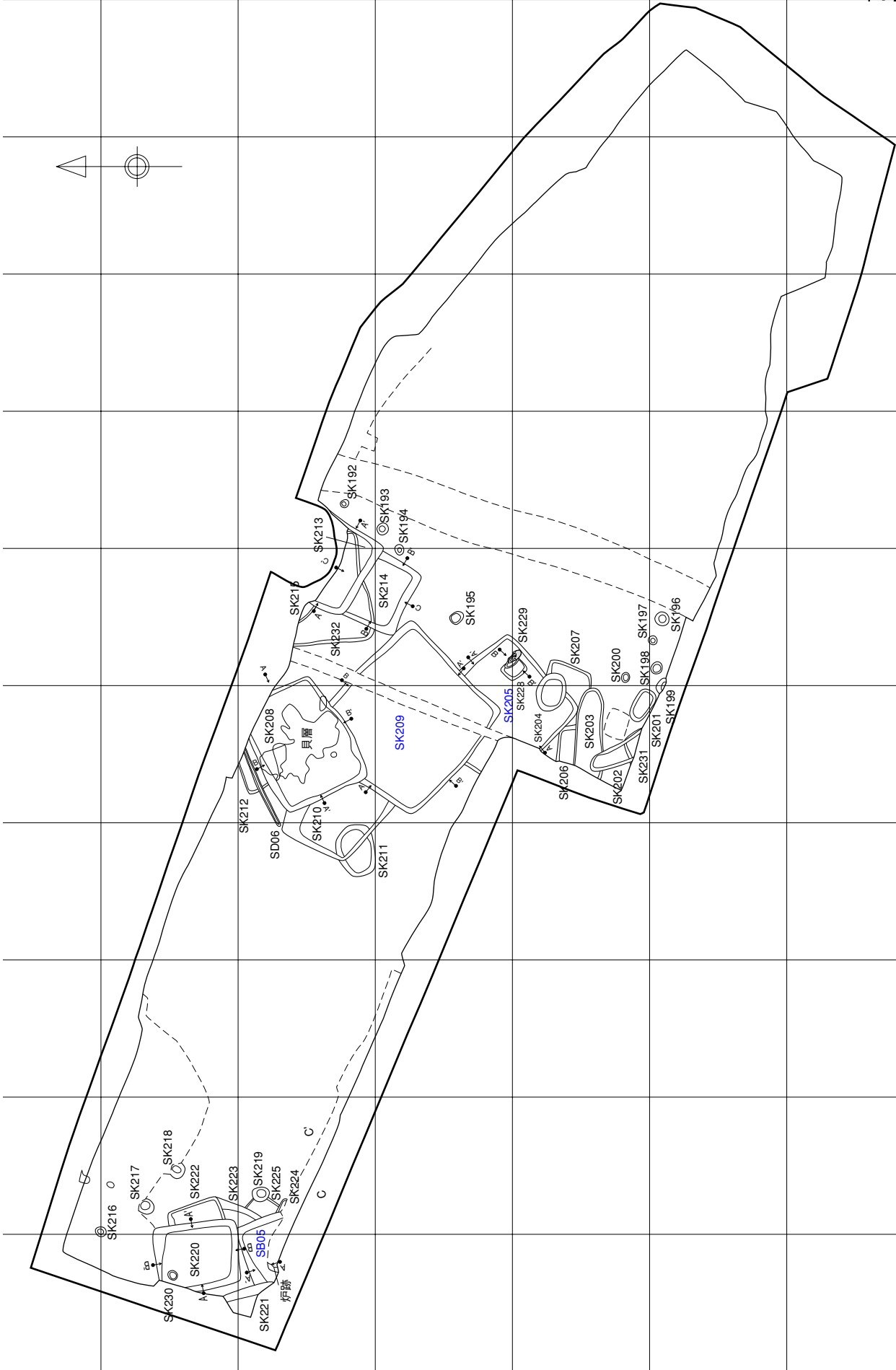
- 1 黒褐色粗粒砂と暗褐色粗粒砂の混合層 10YR2/3+10YR3/4



図版16 00C区第2面プラン
1:200

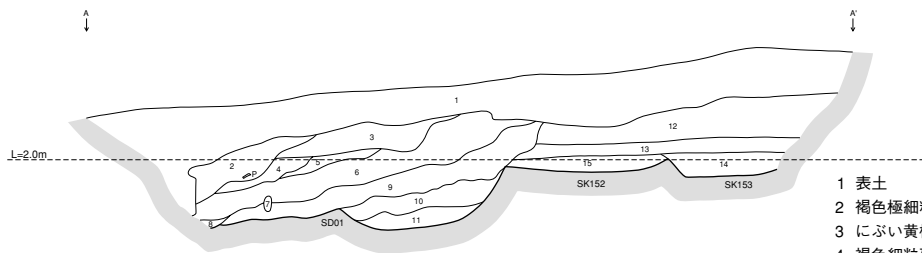


図版17 00C区第3面プラン
1:200



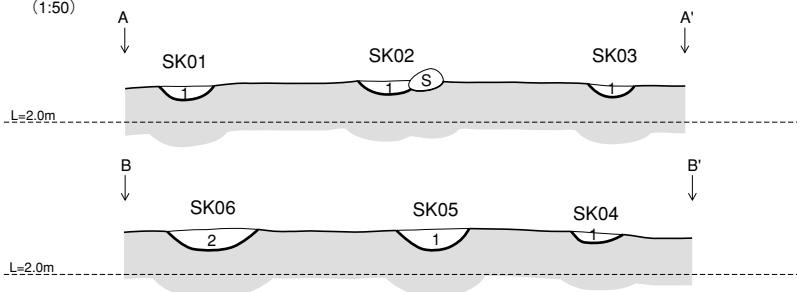
図版18 00C区セクション1

00C区東壁セクション
(1/100)

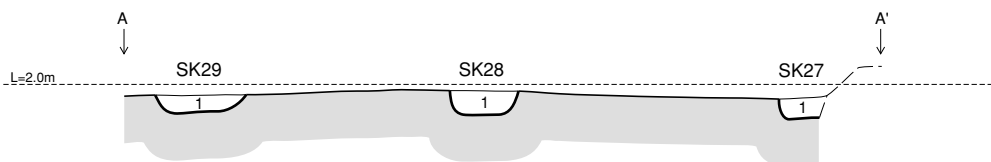


- 1 表土
- 2 褐色極細粒砂 10YR4/4
- 3 にぶい黄褐色極細粒砂 10YR6/3
- 4 褐色細粒砂 10YR4/4
- 5 にぶい黄褐色細粒砂 10YR5/4
- 6 にぶい黄褐色細粒砂 10YR5/4
- 7 灰黄褐色細粒砂 10YR5/2
- 8 にぶい黄褐色中粒砂 10YR5/4
- 9 黄褐色粗粒砂 10YR5/6
- 10 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 11 暗褐色中粒砂が褐色中粒砂に混じる
10YR3/3+10YR4/6
- 12 褐色細粒砂 10YR4/4
- 13 暗褐色中粒砂 10YR3/4
- 14 暗褐色中粒砂が褐色粗粒砂に混じる
10YR3/4+10YR4/6
- 15 褐色粗粒砂 10YR4/4

SB01
(1:50)

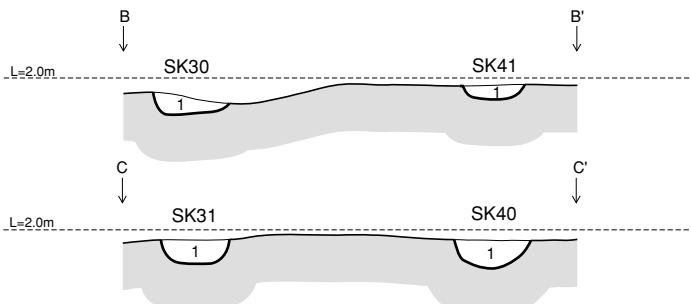


- 1 褐色中粒砂 10YR4/4
- 2 褐色中粒砂に明黄褐色シルトブロック混じる 10YR4/4+10YR6/6



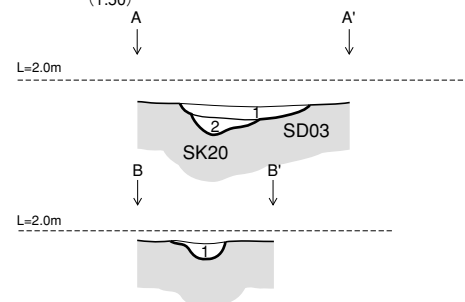
- 1 黒褐色中粒砂に暗褐色中粒砂が混じる 10YR2/3+10YR3/4

SB02
(1:50)



- 1 黒褐色中粒砂に暗褐色中粒砂が混じる 10YR2/3+10YR3/4

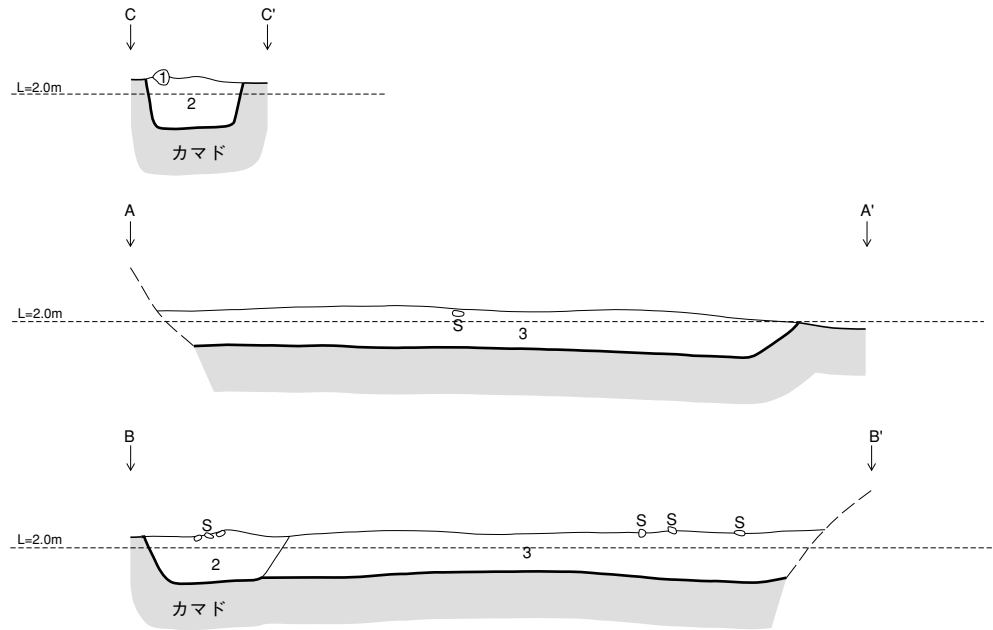
SD03
(1:50)



- 1 褐色中粒砂 10YR4/4
- 2 暗褐色中粒砂に褐色中粒砂が混じる
10YR3/4+10YR4/4

SB03

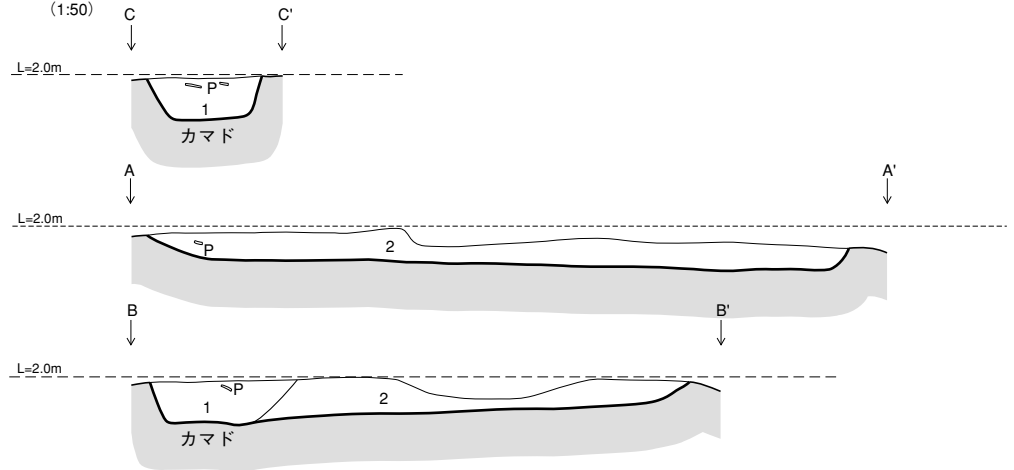
(1:50)



- 1 にぶい黄橙色粘土 10YR6/3
- 2 暗褐色中粒砂 10YR3/3
- 3 暗褐色中粒砂 10YR3/3

SB04

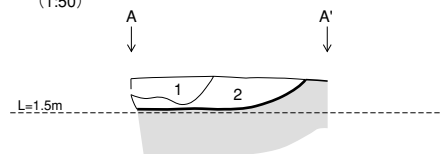
(1:50)



- 1 暗褐色中粒砂 10YR3/3
- 2 暗褐色中粒砂 10YR3/4

SB05

(1:50)

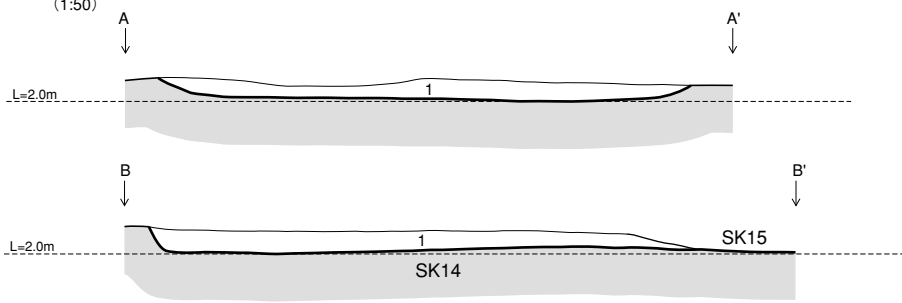


- 1 極暗赤褐色粗粒砂 5YR2/3
- 2 黒褐色粗粒砂 7.5YR2/2

図版20 00C区セクション 3

SK14

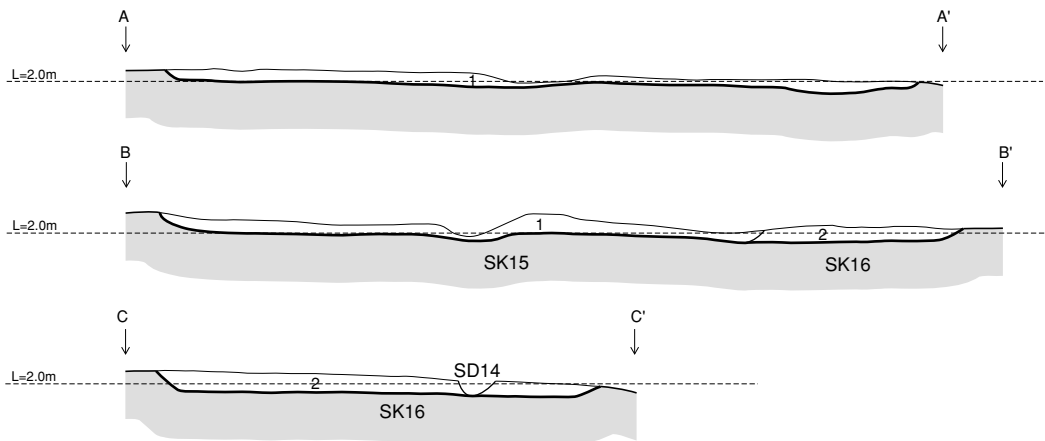
(1:50)



1 黒褐色中粒砂に暗褐色中粒砂が混じる 10YR2/3+10YR3/4

SK15

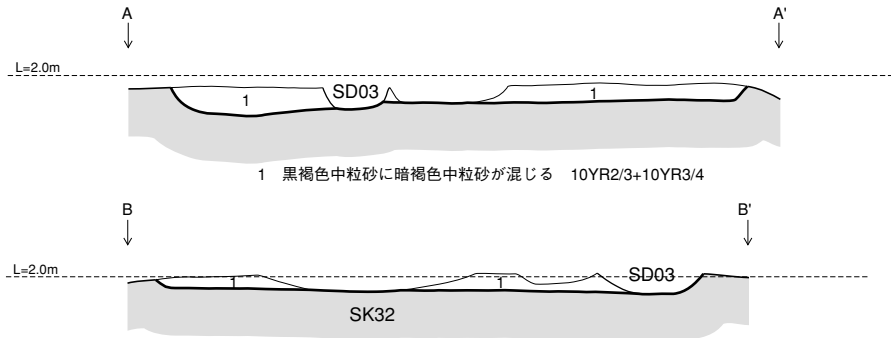
(1:50)



- 1 黒褐色中粒砂に暗褐色中粒砂が多く混じる 10YR2/3+10YR3/4
- 2 黒褐色中粒砂に暗褐色中粒砂が混じる 10YR2/3+10YR3/4

SK32

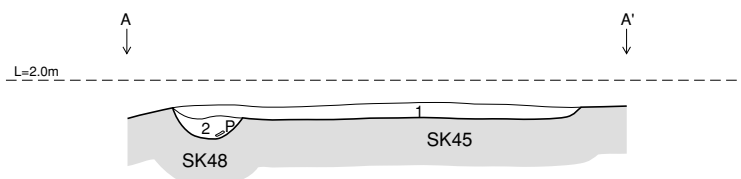
(1:50)



1 黒褐色中粒砂に暗褐色中粒砂が混じる 10YR2/3+10YR3/4

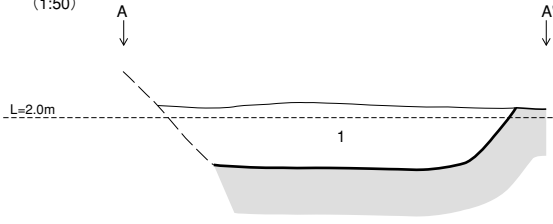
SK45・48

(1:50)



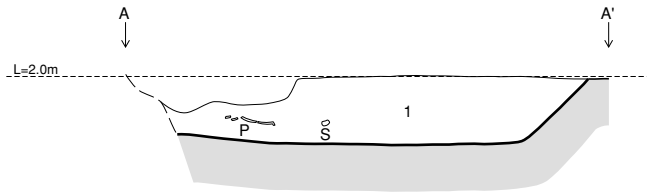
- 1 暗褐色中粒砂に黒褐色中粒砂が混じる 10YR3/4+10YR2/3
- 2 暗褐色中粒砂 10YR3/4

SK51
(1:50)



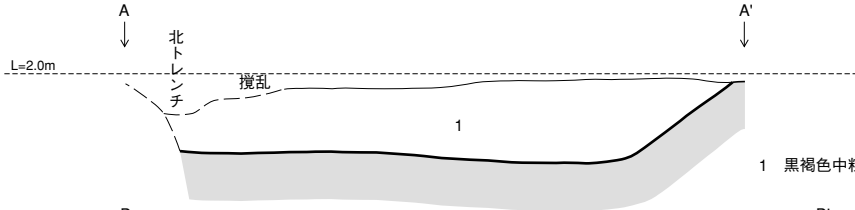
1 暗褐色中粒砂 10YR3/3

SK52
(1:50)

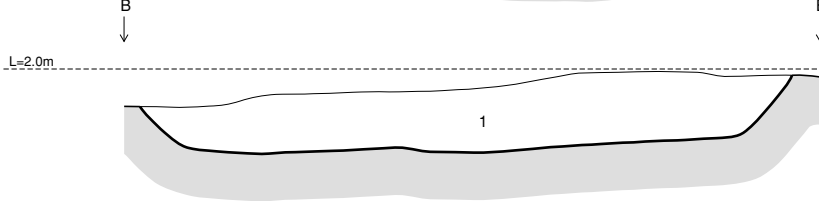


1 黒褐色中粒砂 10YR2/2

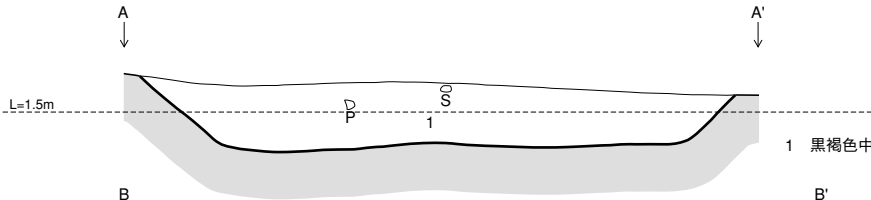
SK54
(1:50)



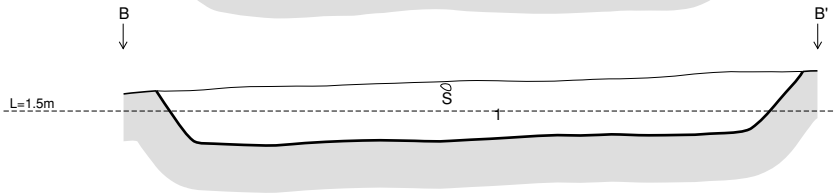
1 黒褐色中粒砂 10YR2/3



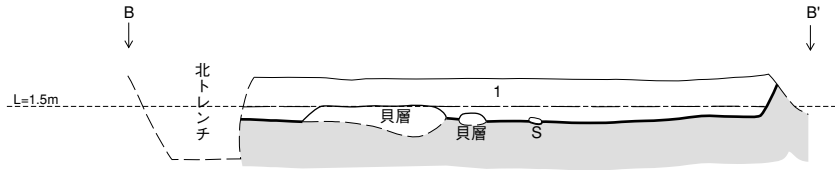
SK97
(1:50)



1 黒褐色中粒砂 10YR2/3

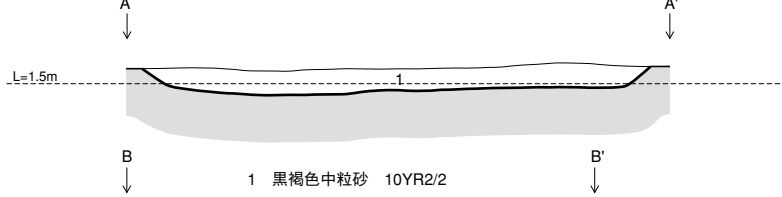


SK98
(1:50)

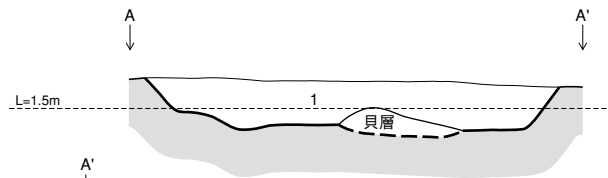
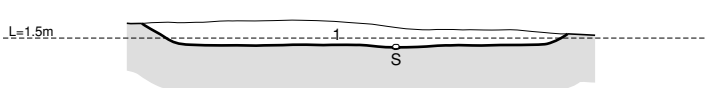


1 黒褐色中粒砂 10YR2/2

SK102
(1:50)



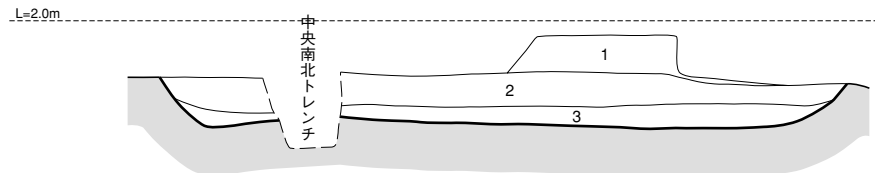
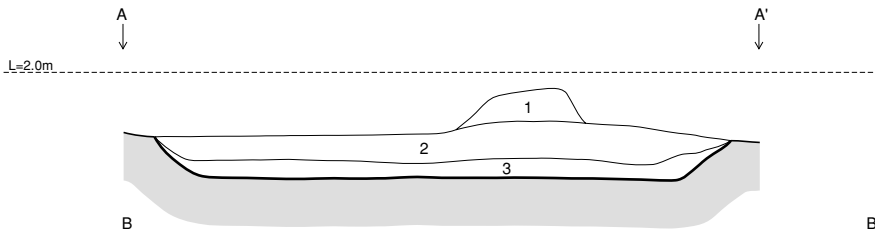
1 黒褐色中粒砂 10YR2/2



図版22 00C区セクション5

SK103

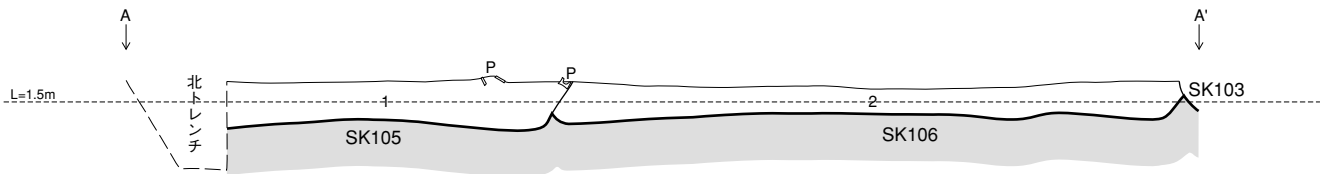
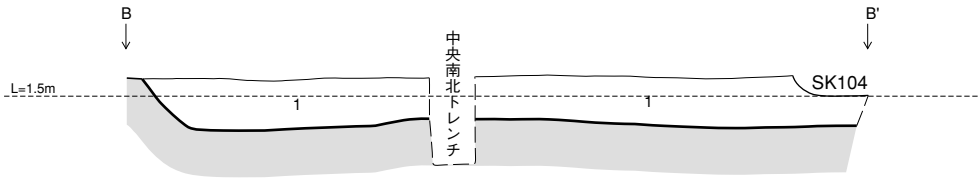
(1:50)



- 1 黒褐色中粒砂 10YR2/2
- 2 にぶい黄褐色中粒砂 10YR4/3
- 3 黒褐色中粒砂 10YR2/3

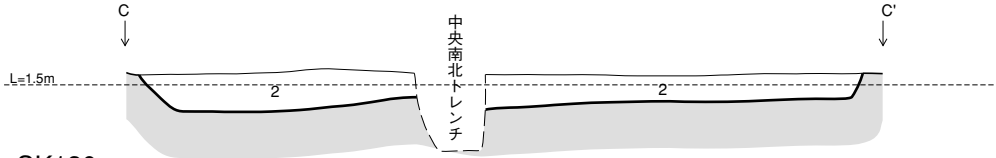
SK105

(1:50)



SK106

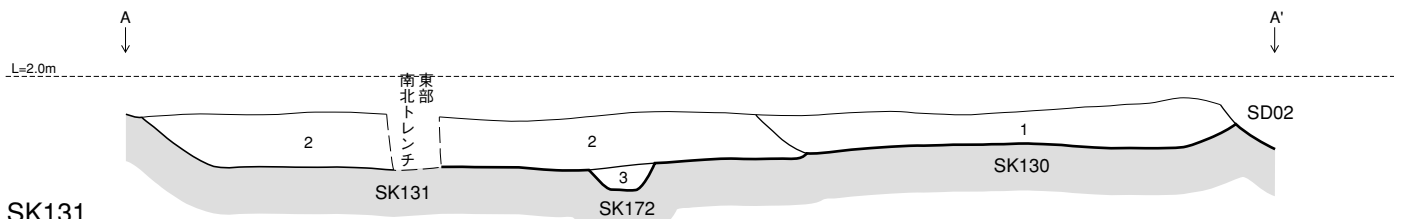
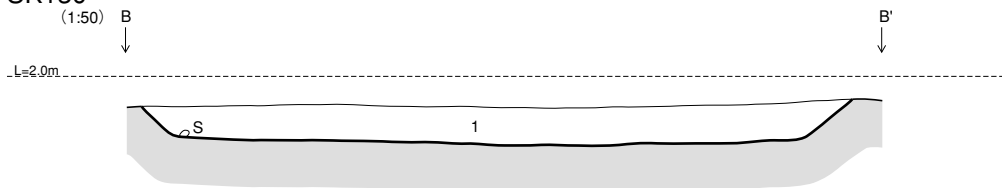
(1:50)



- 1 黒褐色中粒砂 10YR2/3
- 2 黒褐色中粒砂 10YR2/2

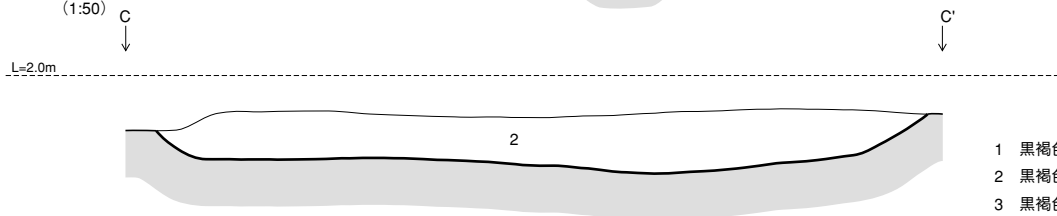
SK130

(1:50)



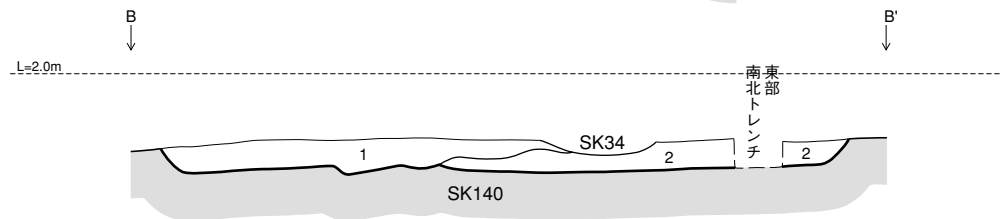
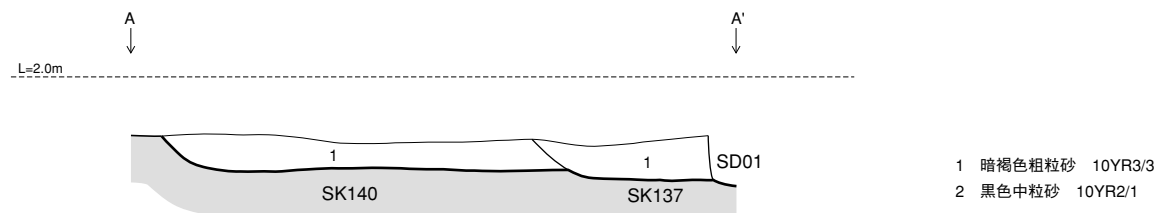
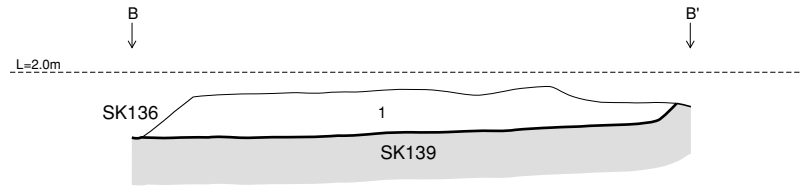
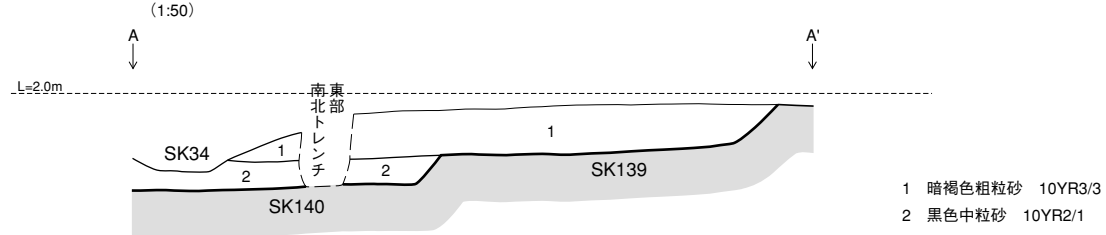
SK131

(1:50)

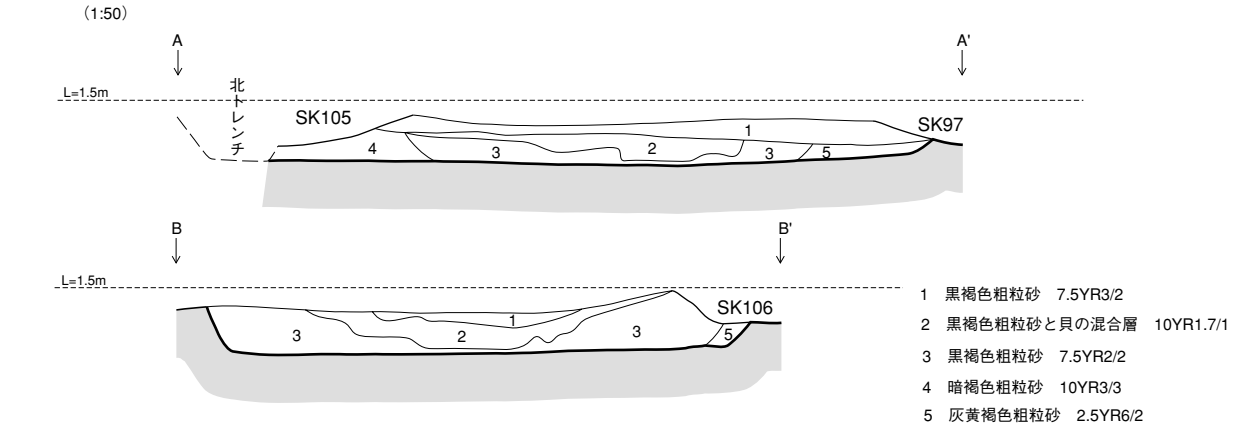


- 1 黒褐色中粒砂 10YR2/2
- 2 黒褐色中粒砂 10YR2/3
- 3 黒褐色粗粒砂 10YR3/2

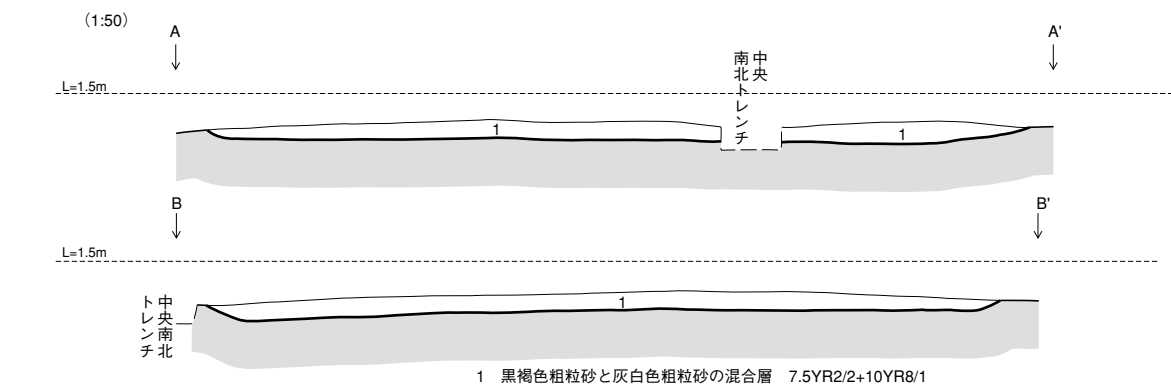
SK137~140



SK208



SK209





名鉄常滑線高架

00A区

00B区

00C区

調査範囲全景 西から



00A区第1面

00A区



00A区第3面
西から



第2面 南西から

00B区



SD01 東から



SD01 土層セクション 西から



第3面 西から

00B区

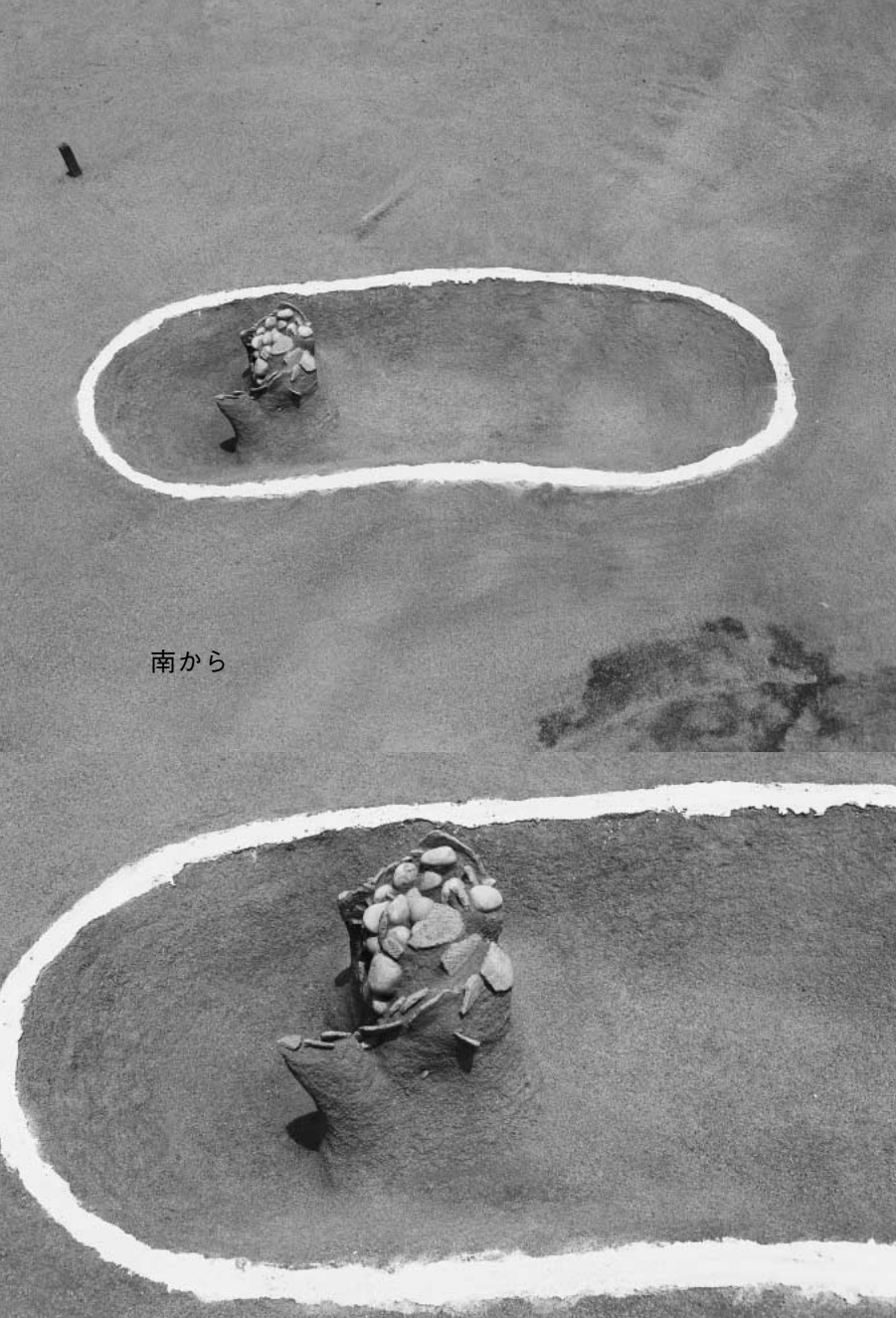
第3面 東部



南から

00B 区

SK13 遺物出土状況



西から



SD07

遺物出土状況
北から



SK61 管玉出土状況 南西から



SK61 赤色砂・管玉検出状況
南から



SB01
完掘状況 南西から

SK34 遺物出土状況
南から



SK32 遺物出土状況
南西から



SK36 炭化物出土状況
西から





第1面 西から

00C 区

SD02 完掘状況



00C 区 第2面 調査区西部



00C 区

SK14 遺物出土状況
北から



SK130 遺物出土状況
西から



SK131 遺物出土状況
西から



SK208 古代貝層 南西から

SK208 出土移動式カマド片 (518) 出土状況





紋様拡大









510



491



493



492



467



466



524



517



525



526



496



591



516



520



3021



3028



3035



3022



3029



3036



3023



3030



3037



3024



3031



3038



3025



3032



3039



3026



3033



3040



3027



3034



3041



3042



3043



3044



3045



3046



3047



3048



3049



3050



3051



3052



3053



3054



3055

報告書抄録

ふりがな	えほしいせき
書名	烏帽子遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第117集
編著者名	石黒立人・小村美代子・植田弥生・黒澤一男・山形秀樹
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ケ須新田字野方802-24
発行年	西暦 2003年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えほし 烏帽子	あいちけんとうかいし 愛知県東海市 たかよこすかちょう 高横須賀町 えほし 烏帽子	23222	43062	35 度 00 分 43 秒	136 度 53 分 26 秒	20000413～ 20000927	2,500	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
烏帽子	集落跡	縄文		縄文土器・独鈷石	
		弥生	竪穴住居・土坑	弥生土器 有孔磨製石鏃	
		古墳	土坑	ガラス製勾玉 ガラス小玉・管玉	土坑内部からベンガラ とともに出土
		古代	竪穴住居・土坑	須恵器・土師器	
		室町	溝	山茶碗	
	その他	江戸	溝	陶磁器類	御庭焼窯関連窯道具類 が出土

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第117集

烏帽子遺跡Ⅱ

2003年10月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社